

二次元

表紙を飾るヒロインが大活躍の「ハーレムジェネラル」連載中!

cover illustration by かん奈

ドリーム

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

立ち読み版

新連載小説①



スレイブドニル
紅眼の女特務捜査官

空蝉×
ぼっしい

新連載小説②

ビルグリムメイデン外伝

狩野景×ぽち。

小説大好評連載中!

ハーレムジェネラル
竹内けん×かん奈

マンガ大好評連載中!

超昂閃忍ハルカ
魔法少女イスカ
~after school.~

ゲーム

『魔法少女沙枝3』

いよいよ発売決定!

特別付録

ピンナップポスター!
いるまかみり/かん奈
本田直樹/笹弘

カラーマンガ



井上よしひさ



抱き枕カバー発売記念!

短編小説

魔が墮ちる夜外伝

譲堂×笹弘

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

vol.53
2010

08

DIGITAL EDITION
デジタル版

近未来都市を駆けるクールな女エージェント！
その肢体を包む極薄スーツは
牡の欲望が迸る！！

SLAVE スレイブドール DOLL

紅眼の女特務捜査官

Mission
1 夜の佳人

小説 NOVEL うつせみ 空蝉 挿絵 ILLUSTRATION ぼっしい

「国民よ我らの声を聞きたまえ！」
喧騒を突如裂いた拡声器越しの声に、高層ビル街を雑然と歩いていた人々の視線が集中する。

マイクロチップタイプの小型拡声器を装着し、かなり立てているのは、中年の男。

紳士然とした顔に強い意志を秘め、深いしわを刻んだその男は、息継ぐひまも惜しげに喋り続ける。

「我々『イービス』は決して国家の圧力には屈しはせぬ。そう、祖国の大地に再び自由の灯をともしその日までだ！」

反政府組織イービス。現国家体制に反逆し、過激なテロも平気で言うと言われる組織の名が出た途端に、雑踏の喧騒が一段と増した。

「我が国の主要産業である義体化技術は、今や他国に戦禍をばらまいている。あれは、人を兵器に変える悪魔のごとき技術なのだ！ 我らはそれに関する動かぬ証拠も手に入れた！」

関わりあいになりたくない。よけいなことを――。見るからに渋い顔で足早に立ち去ろうとする者たち。誰もが声高に理想を語る男から目を背け、我先にとその場を去ろうとする。

「圧力を恐れないでほしい。我々は国家権力により不当な風評を立てられているにすぎぬのだ。どうか、どうか私の声に耳を――」

男の仲間なのだろう連中が、逃げようとする群衆を留めようと、力ずくの行動に出始めていた。

不規則に動き乱れる 人の波。

「……ロック、オン」

その波を気前よくテロ組織の連中自らが堰き止めてくれた。わずかな瞬間、かすかに生まれた波の隙間を縫って。闇を裂き弾けた光弾が、宣言中の中年の額を撃ち貫く。

「せ、先生っ!!」
先生と呼ばれた、どうやら組織においてそれなりに

の高位にあつたらしいその男は、拡声器を握り仰向けに倒れたまま、もう二度と動くことはない。

心肺の停止と体温の下降を確認――。
脳内に鳴り響くナノ組織からの報告を聞いて、淡く紅の乗った唇が小さな笑みに彩られる。

「先生ええええツツ！ ちくしように、どこだッ、どこから撃ちやがったッ！」

喧騒が加速する。怒声が混じり、逃げる民衆の足音が重なり。まるで血の香りにつられたケダモノがうなりを上げているようだ。そんな風に考えつつ、引き金を引いた女は路地裏から喧騒に耳傾ける。

まだ、敵勢力に気づかれなかった様子はない。今逃げれば、自身に被害が及ぶこともない。されど女は、銃を構えたまま。次なるターゲットを定め、一切の躊躇なくトリガーを引く。

「ぎやうっ」
手のひらに隠れるサイズのハンドガンから噴き出した光弾が、背を向けていた男の肩甲骨から右胸を一直線に突き抜けた。

倒れ伏す仲間へ駆け寄る連中。その顔と背格好の特徴を順次記憶し、照準を合わせては引き金を引く。「きやああああ!!」

また一人。標的を抹消した。たまたま標的の近くにおいて血しぶきを浴びた民間人の女が金切り声を上げたが、引き金を引く指先は鈍らない。

かえって悲鳴が連中の意識を引き、注目する民衆の足を止める結果となり、好都合だ。

位置を変え回り込んで、テロ組織員の無防備な側頭部めがけ、また一発。

(どれも同じね……)

脳しようの散華する様――見慣れた光景を何と思うでもなく眺めつつ、またトリガーを引いた。

銃声の響かぬガンより光弾を放つ、そのたび。漆黒のスーツに覆われた胸の奥で、火花が散る。チロ

チロと燃え盛るわずかな灯火に煽られぬよう、豊かに突つたふたつの膨らみを揺らし、女は幾度か深呼吸をした。

「ちくしように。どこだ出てこい卑怯者！」
テロ一味の一人が空にむなしく吠え叫ぶ。

屈辱と、無力感に打ち震える物悲しい響きにも、紅に輝く瞳は揺らがない。黒のショートヘアを夜風になびかせ、ビルの上へと壁伝いに音もなく駆け上がり。しなやかな筋肉に覆われた腿を弾ませるその都度射撃位置を変え、ただ淡々と職務を遂行する。

「……五」
散開し逃走を図るテロ組織員たちを、あらかじめ顔を覚えた順に追い、すべて一撃で始末していった。

「これで六」
あと一人。残り少なくなつてくると、さすがに群衆にさえぎられて的を絞りにくくなつてくる。

連中もそれが狙いで、わざと逃げ惑う群衆の中へ身を浸しているのだ。

「……なら」
捕捉した獲物を、狩り場へと追い込むまで。最後のターゲットを追いつかない程度の加減した速度で追走しながら、順次張り巡らされた警察機関の包囲網を利用して、所定の路地へと追い込んでゆく。

最後のターゲットが、逃走すがらポケットから取り出した小型機器――通信機のボタンを押す。じきに、呼ばれた仲間が駆けつけてくるだろう。

「糞っ。権力の犬めっ」
全身を覆い、ボディラインを際立たせた漆黒のスーツ。それが警察特務機関の標準装備であることと、

浮き立つ身体は変わっていった。

男の声のトーンは変わっていった。

敵を前にしての怒りと、わずかばかりの昂揚。そして、死を前にした恐怖。雑多な感情を声にこぼした男は、決死の形相で駆けながら、検問を避け、

人波を避け、狭い路地へと追い込まれていった。「はあ、はっ、必ずっ……先生の、同志の仇を討つてやる」

崇高な誇りなどという不確かな感情を糧に生きる連中は、いつもわかりやすい行動を取るものだ。

袋小路に着くのとほぼ同時に組織員の増援が現れたのを幸いと喜び勇み、元から醜い顔をより意地汚く歪めてくれる。

「あの女が先生を……」

「相手は女一人だぞ……」

袋小路に集まったのは男ばかり、増援を含めて総勢十名。連中は女の服装を見てそれぞれ違った表情を見せてくれた。

「特務の……警察の犬め」

対テロ組織班である特務の装備に、敵意を剥き出しにする者。

「ごくっ……」

メリハリのついたボディラインをよけいに際立たせるびっちりとした装備に好色な目を向ける者。安産型のヒップや、豊かな胸にあからさまな視線を突き刺す者もいた。

そのすべてを受け止めて、長身の女はことさら伶俐に研ぎ澄まされていく己を実感する。

冷えた心と対照的に、すらりと伸びた四肢に熱がこもり始めていた。

「データ照合は完了しているが、一応聞いておく。今朝の警察車両襲撃犯。お前たちに間違いないな」

今から十一時間前。警察機関の装甲車が襲われ、積荷であった資料の一部が盗難にあっていた。その犯行集団の顔が割れたのが、半時間前。そして今日の前にいる男たちの中にもリストに合致する顔がいくつもある。

「ああそうだ！俺たちがやったんだ、お前ら国家権力の闇を暴くためにな！」

「お前たちが仕組んだ爆発で、警護に当たっていた警官複数名が死傷した」

「狙って殺したわけじゃあない。そう……権力の犬に天罰が下ったんだ」

「天罰……？神でもない口がほざくにはすぎたる言葉だな」

誇らしげに胸を張り、声高に犯罪を認めるテロ組織員たち。その上で、自己弁護に等しい主張の正当性を頑ななまでに盲信し続ける。

彼らも当然、国内でのテロに対して即時射殺命令が出ていることは知っているはずだ。

（それでもなお、青臭い理想に殉ずる……か）

肩先までの長さの黒髪が夜風に巻き上げられ、視界をかすかにさえぎっても、思考回路に変化は現れない。ただ冷静に、女は敵を全滅させるまでのタイムを予測していた。

（増援が九。最初のと合わせて、十）

時間をかければまたぞろ増えるだろう。だが、その前にどちらが袋のネズミなのか思い知らせてやればいい。狩り尽くす。それだけの話だ。

「ふ……ッ！」

硬直を押し破るような、静かな咆哮を皮切りに、狩り場に誘い込まれたネズミを一匹一匹狩り立てる作業が始まった。

「う、ぐあつ!?ご、ぶろうらうらッ」

まず、迫ってきた一匹の顔を蹴りはね上げ、勢いのまま首に腕を絡めてへし折ってみせる。

「このッ……!!」

予期せぬ先制。その衝撃に驚き固まってしまった次の顔を、速度を落とさずにハンドガンの柄で叩き潰した。

あわてて放たれた敵勢の銃の矢を、上方に飛んでかわし、そのまま半回転。

「ごっ……ぶふうっ」

着地点にいた標的の頭上に逆立ちでつかまり、自重をかけて仰向けに倒れ、男の首と背骨を畳み折る。「くっ……!!この権力の犬め！」

たった今絶命した巨体がちようど盾になってくれたおかげで、敵に背を向けていながら追撃も受けず着地を決めた。

肉の盾を片手に掲げて、暗い路地裏を敵の群れめがけ逆走する。

「馬鹿力にもほどが……ま、まさかこいつド……ぐばあつ！」

無駄口を叩いた標的の口蓋を光弾で撃ち抜き、膝を折るできたの死体の脇から、肉の盾を次の標的めがけ放り投げた。

「なッ!!」

突如物を投げられた際の人間の反応パターンはいくつかあれど、それが血みどろの死体であった場合。次なる標的の反応は予想通りのものだった。

「ひいっ!!」

わずか二分前まで生きていた同胞を、男は汚物でも見るような目で見つめ、かがんで避ける。

——次の人生が得られたなら、戦場には出てこないことね。

高々と掲げた踵をうずくまる男の頭上に叩き落とす。頭蓋がつぶれる鈍い衝撃。訓示を捧げてやった代価に、男の命を刈り取った。

「残り、四」

わずかに閉じていたまぶたを持ち上げて、宣告。

「ひ、ひイイイッ！」

男たちの怯えた瞳には、煌々とした血の色の輝き——鮮血を帯びてなお表情を変えぬ女の瞳の光が、恐怖とともにこびりついていた。

人形の紅眼。それは過去二度。たった二度の交戦で、死の代名詞としてイギリス組織員たちの間に広まっていた忌み名だったから。

「三……二、一」

駆けながら続けざまにふたつの頭を撃ち抜いて仕留め、その脚で壁を蹴って敵の頭上へと身を躍らせる。特務が行う強化義体化処置により常人の数倍にも及ぶ身体能力を得た女は、夜空に黒髪をなびかせ、軽々。逃走を図る獲物の目前に降り立ってみせた。

「あ……あ、ああ」

地にへたり込んだ最後のひとり。それは皮肉にも、増援として仲間を死地に呼び寄せてしまったあの男だった。

「く……そおおっ！」

心身ともに追いつめられた男の右手が、突っ込んでいた脇ポケットから勢いよく飛び出てくる。

（小型の、爆弾……!?!）

握り込まれた拳からわずかに覗く黒の器具。手のひらよりやや大きめのそれは、つぶすと同時に三百メートル四方を爆炎に巻き込む代物だった。

（チツ、厄介なものを——）

「我が命は真実とともにイッ」
 盲信へと逃げ場を求めた男の拳が、小型爆弾を握りつぶそうと力を込める。狂喜に歪んだ顔。己が信念の勝利を確信していたのだろう。その顔が、一瞬後には愕然とした表情に移り変わっていった。

ボムウツツ——!!

「ぐうっあああああぎやあああああッツ!!」

あまりにあっけなく轟いたこもった爆発音と圧縮された熱風に、男の悲鳴がこだまする。見開かれた男の瞳には、爆弾ごと握りつぶされた己が拳と、今まさに爆風で吹き飛んだ女捜査官の左拳。弾け飛ぶ骨片から噴き散る赤き鮮血とが映し出されていた。

「生きる意志がないのなら、ひとりで野垂れ死ね」

冷淡に吐き出した言葉の端々と、昂る胸に芽生えていたのは、命を捨てようとした男への——また、無数の命を巻き添えにしようとした下衆に対する純

然たる憤怒。

痛みの中に奔る感覚にわずかばかり眉を細め、熱風にちぎり飛ばされた左腕には欠片も頓着せず。右手に構えた銃のトリガーを引き絞る。

「ぎあつ……」

頭上数ミリの位置を撃たれた男が、抜かした腰をずると地に落とし、なくした腕から奔る痛みと恐怖にのたうつ中、白目を剥き失神した。

「……任務完了」

整った美貌を自他の血潮に染めて、国家警察特務機関に所属する女は夜空を仰ぐ。見上げた先では穢れなき星星の輝きが明滅していて——。

「さすがドール。お見事お見事」

冷めた心にともりかけた感傷を断ち切ったのは、不意に路地の入り口から響いた渴いた声と、空々しい拍手の音色だった。

「包围網、御苦労さま」

ドール。義体化により強化された人間、特に警察組織に属する殺人兵器を指してイージスの者たちはおろか市民にまで浸透している、もうひとつの忌み名。ふんだんに侮蔑の意図が込められた名で軽々しく呼ばれても、女の怜愍な表情は崩れなかった。

ドールには暴走して同僚を傷つけぬようプロテクトがかけられている。そのことを逆手に取り、やっかみ半分でうるさいハエが寄ってくることは、珍しいことではない。

「毎度柔なもんだ。署内のPCで常時把握されているお前さんの居場所を確認して、点在する狩り場から獲物が逃げ出さんよう困ってるだけでいい」

ぼやくつつ、腕は大丈夫かよ、などと、少しも心配していない風で尋ねてくる。

「一人生かしてある。盗難書類の隠し場所はそいつの脳から記憶データを引き出すといい」
 視線を揺らがせずに、淡々と用件だけを告げた。

敵を掃討するのが自分の仕事なら、死体の衣服、あ

るいは脳を漁ってデータを得るのが彼らの仕事だ。それに義体の腕など、取り換えもきけばある程度までなら再生もする。子供でも知っていることだ。

「特務の武装義体研究の被験者第一号にして、唯一の成功検体。我らの切り札殿は、よほどこいつらに恨まれてると見える」

失禁し失神している唯一の生存者を足蹴にしながらの、中年の皮肉。イージスは、義体化技術を他国に高額で売り渡す国家を「死の商人」呼ばわりして忌み嫌っている。

「……」

いつものことだ。だから、毎度の応対をすればよいだけのこと。いつも通り聞き流して、蔑む視線を受け止めるふりをしていれば、理性は自制を促していたが、目の前の男に対する嫌悪はぬぐえない。

「……お前の相棒のジャンがイージスに関して単独専行捜査中行方をくらませた」

ただでさえ堪えようとしているところへ、今夜は予想外の言葉が追加で降ってきた。

「行方がわからなくなった地点は、どこだ」

無視できぬ事態に、先刻の立ち回りでさえ揺るがなかった心臓の鼓動が早まっていくのを感じる。早口になるのを自覚しながら、努めて鉄面皮を装い、言葉をつないだ。

「西地区のFブロック付近だ」

「……了解。すぐに捜索、可能なら救出を図る」
 振り向けばきつと、ニヤニヤと下世話な笑みを張ったひげ面に遭遇する羽目になる。

ゆえにもう振り返ることなく、負傷をかばうこともなく、女捜査官は再度夜の闇へとひるがえす。

（権力の犬、か）

死んだテロ組織員の言葉がよみがえる。それは間違いないゆえに、いつまでも耳朶にこびりつき離

れなかつた。自由もなく、意思介在の余地すらなく、ただ命令を実行するだけの戦闘人形。

青臭い理想に殉じるほうが、よほど楽で幸せなのかも知れない。

「へっ。義体化されても心は女、か」

響きだけでいやらしさの伝わる下衆の声を夜風で洗い流して、黒から紅へ再度瞳の色を変化させる。

国家警察特務機関所属捜査官、コードナンバーD001。幼少時の事故で失った欠損部位を補うため義体化し、のちに自ら志願して特務機関に入隊。進んで受けた強化義体手術の折に記憶を喪失。親類縁者なし。黒崎京子。

データで知った己の姓名と、たった数行の略歴。

「……ジャン」

思い出と呼ぶにはあまりに短く味気ない記憶の中。唯一灯火のように輝く男の名をつぶやき、逸る胸を右手でわしづかみにして、女は闇を駆け抜けていった。

西暦二一五〇年。三度の大战を経て、世界情勢は一変していた。

二十二年前、終戦時のどさくさに紛れ独立を果たした小国マルタ。大戦前まで連邦国家の一部として寄れば大樹の陰だった小国は、戦時に開発したとある技術に支えられ、急速な発展を遂げていた。

戦で負傷、欠損した肉体を補うために開発された、義体化技術。人体にナノマシンを埋め込み、その自己増殖機能を用いて欠損部位を修復させる。

同技術は戦争という絶好の実験舞台を得て瞬く間に洗練され、今では広く一般にも浸透している。

国は一見豊かになったかのように思われた。だが、急激な発展は時にいびつな状況を作り上げる。一部技術従事者へのみ富が集中することで生まれた貧富の格差。独立運動を主導した旧軍閥を核として生まれた一党独裁体制。

平穏に飽きた神が戯れを起したかのごとく。戦の傷まだ癒えぬ小国に、暗雲が立ち込めてゆく――。

西地区、Fブロック。その場末にある古いバーの前に立ち、大して乱れてもない黒髪を整える。

腕を再生しつつ休む間なく駆け続けたおかげで、目的地には所要二十分ほどで着くことができた。

——カラン、カラカラ……。

木製のドアを開けると同時に、戸の上部に設置されていた時代物のカウベルが妙にかすれた音色を聴かせてくれる。

——「ごちゃごちゃしたこの店には似合いの騒々しさだ。毎度の感想を抱きつつ、一步。足を踏み入れた店内はうす暗く、密閉された空間特有のこもったにおいと、安酒の香りがフロア中に敷き詰められていた。

「おんや……こりや、珍しい」

カウンタに腰掛け、ウイスキーを飲んでいた二十代半ばほどの男の顔が、深紅のドレスへと注がれる。瘦せた指に禁制となつて久しいタバコを挟み、こけた頬とは対照的に厚ぼつたい唇をゆつくりと歪めて、下卑た視線を恥じようとしめない。

そんなお世辞にも整っているとは言いがたい風貌の男からの好奇の視線を受け止めて、京子は悠然と彼の隣席に腰を下ろした。

「へへ……あんたが一人で、しかもそんな格好で来るたあ、一体全体どういう風の吹き回しだ？」

「ジャンを探している」

男はすべて知っている。なぜなら彼もまた、イージスの言葉を借りるならば「国家の犬」。この地区専属の情報収集担当なのだから。闇に溶け入り、同化するように過ごしては裏情報を集める、そのためだけに雇われた存在。

幾度も仕事を共にしたこの男が、ジャンとの関係を知らぬはずもなければ、この地区でジャンが足取りを消したことを知らぬはずもない。

「もつたいぶつた芝居はいい。情報があるかないか、それだけを答えなさい」

「さあ、なあ。へへ。人探しは専門外なもんでね」

淡い紅を引いた唇が淡々と言葉を紡ぐ間も、男は深く切れ込んだ深紅のドレスの胸元へと視線を這わせ続けていた。好色の中に値踏みの色を含んだ視線。共に仕事をしたといつても、常はジャンが交渉役を担っていた。ほとんど初めて会話するこの男は、こちらの出方を探っているのかもしれない。

すべて事前に予想した通りの状況。ゆえに京子はさつさと立ち上がり、にべもなく男に背を向ける。

「お、おい。いいのかわ。情報は」

あわてて引き留めようとする男の様までが、すべて予想の範疇に収まりすぎていて、おかしくもある。

（普通に感情ある人間ならば）

こういう時、思わず吹き出してしまふものなのだろうか。なくした記憶をたどつてみたところで、脳裏に答えが浮かばうはずもない。

「なーなあ。待てよ」

目の前の女が「情報提供を拒まれた」などと密告すれば、すぐにでも、文字通り首が飛ぶ身なのだ。男がふざげた態度を改め狼狽するのは当然だった。

「……ついてきなさい」

「お、おいっ？……ちっ、わあつたよっ」

肩幅の広い体軀を折りたたむようにしゅんとした男を連れて、京子は足早に店を後にした。

連れ立って着いたのは、店のすぐ脇にある路地の奥。ちょうど置いてあった腰掛けられる高さの台に腰を下ろして、男と向きあう。

「な、なあ。勘弁してくれよ。マジで話すからよお」

「あなたの言葉は軽すぎて信用できない」
 情報提供担当に向いてないわ、とつけ足すと、一瞬ムツとしたあとにまた立場を思い出し情けない表情を形作る。

そんな状況にありながら下品な視線がドレスのスカートの奥へと注がれているのを、京子は鋭敏な肌でじかに感じ取っていた。

「餌をあげれば、素直になるかしら？」

「え？」

これまでと違う、媚を帯びた言葉に男が視線を上げる。向きあう女のハツとするほどの艶と、じつと潤んだ黒の瞳。湿った唇に紅がテラテラと輝いている。店内の態度とは一変して、牡の欲情に火をともしには充分すぎる雰囲気醸していた。

「ごく」。期待で生唾を飲む音が、二人きりの路地にやけにうるさく響き。

「ドレスがいい？ それとも」

「い、いつものアレ。あのびちびちスーツで頼む」
 そして牡は、己が胸の内吹き荒れる欲望のままに、安直な行動に移ることを決めた。

「シユンツ——とわずかな音を立てて赤のドレスが溶けていき。」

「おお……っ」

瞬間、ゆざりと揺れた豊かな膨らみと、対照的にぼつちり咲いた小粒の乳頭に男の視線が突き刺さる。瞬きふたつする間に、赤いドレスは特務機関用装備であるボディスーツに変化した。

最初からこうなる事態を想定して、わざわざ露出の高い衣装を選んだのだが——。

（少し、予想外れ。準備が無駄になったな）

まさか目の前の男がボディスーツのほうを好むとは思わなかったのだ。

だがそのことを口惜しく思うでもなく、即座に頭を切り替えて京子は今の服装をもっとも活かせる挑

発方法を考え連ねていく。

「これで、よく……見えるかしら」

そして、顔を近づける男の前で、台に乗った腰をクイと持ち上げ。はしたなく大股に広げた股間を見せつけるように、前後左右に振ってみせる。

「あ、ああつ。よおく見えるぜ。あんたのマンスジも、か、形までくつきりだあ」

気密の都合上素肌じかに装備するスーツは、身体にびったりフィットするがゆえに局部までくつきり浮かび上がらせてしまう。

男はスーツの股間に縦に刻まれた食い込みスジに血走った目で見入り、整った美貌と卑しいポーズのギャップにますます鼻息を荒くして、今にも突つ伏さんばかりに顔を接近させてきた。

「ふう、ふーっ。すげえ……すげえすげえ。ドールの股ぐらも、やっぱ汗臭いんだなあ」

荒い息が吹きかかるその都度、くすぐったさに震えて京子の尻が揺らぐ。

「そういうの、好きなんでしょう……？」

演技か本気か。戦いの中の怜悯な顔とは対照的にうつとりとした表情を張りつけた美貌からも、徐々に火照った息が漏れ始めていた。

無力な獲物を狩るだけの任務ではたぎらなかつた血潮が、ふつふつと煮沸されていくのを感じ、思わず濡れた唇をなめ潤す。

（このまま……）

いつときの享楽に耽るのも悪くない。そんな想いは不意に脳裏に浮かんだ恋人の咄めるような顔に掻き消され。胸を突く痛みによる新たな快感と、目の男を手玉に取る悦びに駆られて、京子は小さく、口の端で喘ぐ。

「あは……」

男が声につられて視線を上げたのを見計らい。

「お、おわあ……っ」

トンツ——と素早く彼の胸元を突いて小汚い地面に押し倒す。

突然の事態に面喰らい、それでも股間の食い込みから目を離さないでいる彼の情欲を煽るため。倒れた牡の腰を跨ぐように、ことさら脚を広げてわざと股下を見せつけ。

「それじゃあ……始めましょう」

「いつ……うえおああ!!」

無様に膨らんだ男の股間に、スーツ越しのつま先を押しつけた。

「な、っ。お、おいてめっ……くう、あつ！」

グリグリと、屈辱的な姿勢から募りかけた文句をさえぎるみたいに、足裏で軽く踏みつけてやれば、想定通りに上ずった歓喜がこぼれ出る。

「どこでイカせて、とは言わなかつたわよね」

「だ、だからって、お、おふうっ……」

普通は——などとな言い募ろうとした男を無視し、右足でズボン越しの肉感を築しむ。熱、そして浅はかに勃起したその硬度を確かめるように、何度も。踏みつけたつま先に時に体重をかけ、京子は手の内（足の内？）にある男心を弄ぶ。

ぐりゅっ……

「ぬふうっ！」

踏まれた男は屈辱と恥辱にまみれた声を吐き漏らして、なお刺激を求め腰を突き上げた。つま先で幹を圧迫されては、堰き止められた血流がドクドク高鳴って、解放された途端に悦び咽んで脈を打つ。その快感を愉しむように——男は、腰を突き上げる。

「よっほど……溜まってたのかしら」

——もう、パンパンじゃない。

皆までは言わずに、蔑んだ目で足元の男を見下ろしてやれば、案の定男のプライドに火がついて、ムクムクと肉の猛りはさらなる膨張を始める。

本当に、男とは単純極まりない生き物だ。

だが、それがかえって面白い。そう思える自分はずくづく女なのだと実感する。この瞬間が京子は嫌いでなかった。

「じかに扱いてほしいなら、自分の手でズボンから出してみせなさい」

ポディスツ内に充満する我が身の火照りが、密閉されているだけに何倍にも感じられ、我が身にダイレクトに跳ね返ってくる。

「ば、馬鹿言うな、なんで俺が自分でっ、お、おおう……ッ！」

女の湿ったハスキーボイスに生唾飲み込む、その音色にすらビクつき戦きながら。濡れゆく己を引き留めるすべを失った男は、ふぬけた嬌声を漏らし続ける。

「するの？ それとも……ここで、やめる？」

色欲に濡れた黒の瞳を隠しもせず、むしろ進んで見せてやりながら、女が勃起に添わせた右足の五指を蠢かせる。

細い指先で皮をつまみ。切り揃えた爪で幹を握り、は煽るように刺激を加えて。時に強く、肉ごと持ち上げるように。

「う、っぐ、ちよ、つと待て……っ」

逡巡をあげたらうかのような刺激のチョイスに侵され、男はたちまちのうちに焦りと甘美にまみれていった。

生殖器をまるで汚いものを見るような目つきで見下げられ、つままれる。力でも敵わぬ圧倒的優位に立たれていることで、ますます男の屈辱は増幅されてゆく。強制的に与えられる快感に浸かりきってしまうことに対する恐怖と、禁断の果実を得られるかもしれない期待感。

「うぐっ、ち、ちくしよおっ……」

圧迫から解き放たれた幹の脈動に合わせて眉間に

しわを寄せ、また押し留められた血流の息苦しさと、わずかな痛み。そして再度圧迫から解き放たれる際の喜びに寄せる期待とに、脳の髓までシェイクされながら。享楽と自尊心。競りあうふたつの間で取捨選択をためらい、煩悶している。

（よだれまで垂らして……私がそうさせているのか。私の足が、指が）

そんなみつともない顔を見せられれば、否が応にも女の部分がうずいてきてしまうというのに――。

「っく、おおうっ……」

「っ……はあ、あ……」

切羽詰まった風の男の声に合わせて、牝の甘い吐息が薄暗がりに飛散する。

「すり、すりりっ……」

「足の下でビクビク脈打ってる。これは、ただ血流が圧迫されているだけ？ それとも――」

楽になれとばかりに、ズボンの内で反り返る肉棒の裏スジを、器用に親指でなぞり上げた。

ねっとりとした声の響きに、男の目がいっそう脂ぎった輝きを帯びてゆく。彼の呼吸が荒ぶるのに呼応して、踏まれたままの肉棒も、我慢するなど声代わりの脈動を大きくする。

（牝のくせに……屈する悦びに浸るか）
すがる男の目が潤む。まるでレイプされる女のように。腰を突き上がる快楽に肉棒を溶かして、四肢の力を抜いて――男は喘ぎ声を響かせる。

「わ、かった……認めるっ、認めっからよおっ」

屈辱の時の訪れまで、大した時間は過ぎなかった。

「なにを、認めるの？」

口に出して言いなさい――瞬間的に紅くきらめいた目でそう伝えると、すぐさま情けなく震えた声での降伏宣言が響き渡る。

「あんたの足に踏まれて感じてるッ。今にも出ちまいるようになってんだッ！ だ、だからよおッ」

早口で言いきった直後。男はこれで違う場所での奉仕を受けられる、そう思いホッとしたのだろう。頬を緩ませ腰に集中していた力みを解いた、そのタイミングを見計らい、グッと京子の右足に体重がかかった。

ぐ、りゅうっ――！

「ひ、ぎや……ッ！？」

何しやがる、と涙ぐんだ目で訴える男。その怒りと悲しみに妖艶な微笑で応じ、受け流して、一転。今度は勃起をさするよう指腹で数回扱いてやった。

ビクリと弾んだ肉竿が、痛みのあとで敏感になっていたこともあり、またひと回り浅ましく膨張する。

「出しなさい、自分の手で」

痛みと恥辱。両方に打ちのめされ己の立場を理解した牝は、もうためらわなかった。

ジジ、とジッパーが下げられる音、そしてベルトを外す慌ただしい金属音に耳朶をくすぐられ、否が応にも牝の期待は煽られる。瞬きひとつする間にズボンと下着がベルトごと引き下ろされ。我慢に我慢を重ねた結果、彼自身の腹に張りつくほどに怒張した卑しき姿で、肉勃起が弾け出た。

与えられる快楽に期待してヒクつく様は、養豚場の豚のごとく。鈴口からは透明の汁を垂らし、赤黒い幹に青筋まで浮かべて懇願している。荒い鼻息までもが、豚のそれに酷似しているように思われた。

「こ、これでいいんだろっ、は、早く。早くしてくれ。もうなんでもいいからよおっ」

「足で、いいのね？」

艶と、氷のような冷たさを均等に含んだ声音と、紅い瞳に魅入られ、追いつめられた牝が首を即座に縦に振ってみせた。

直後。再び肉竿に乗せた右足の、親指と人差し指覆っていたスーツの部分消失させ露出した素足の二本指で器用に亀頭を、まるで言うことを聞いた褒

これはナイスブルマと言わねるを得ない!!



第三話 疾風干戈

漫画 / **SASAYUKI**
原作 / **Lilith**
©Lilith



ほーら
今度はご褒美よ

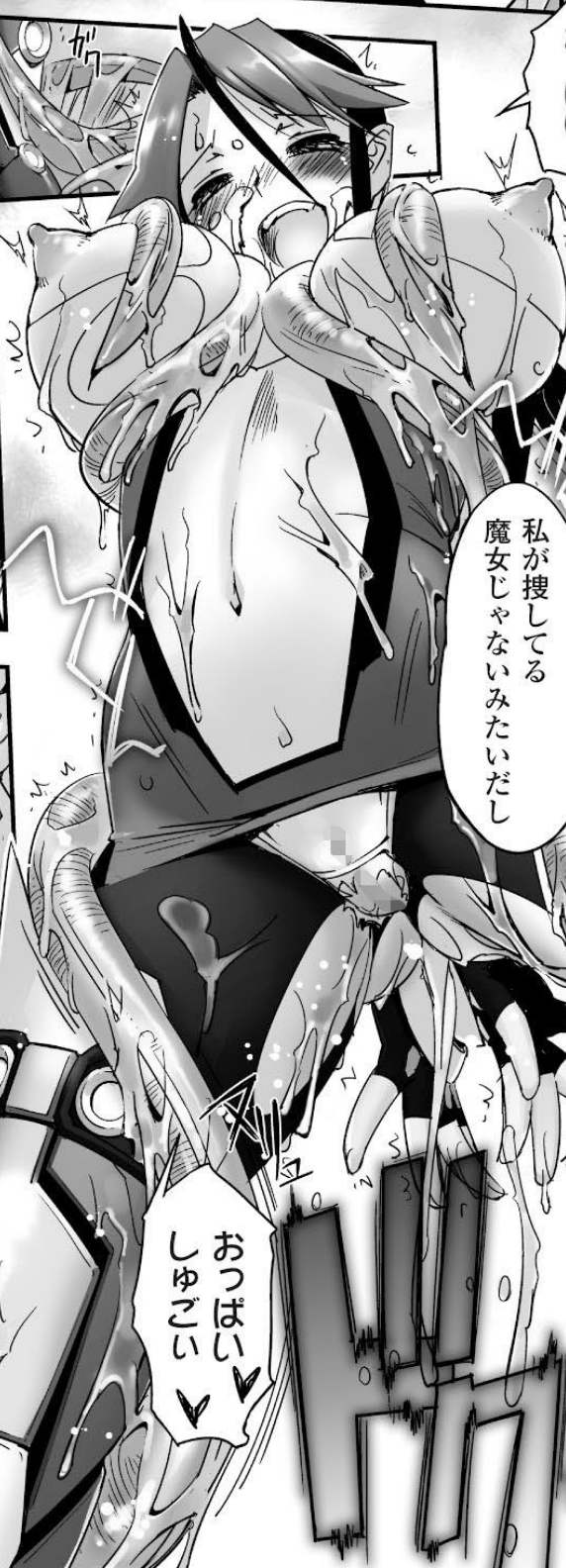


おっぱい



あの娘を犯す事が
できたらもっとすごい
ご褒美をあげるわ

そうだ



私が捜してる
魔女じゃないみたいだし

おっぱい
しゃんこ



お姉ちゃん…

ほたる
蛭を犯しゆ?

前回までのあらすじ

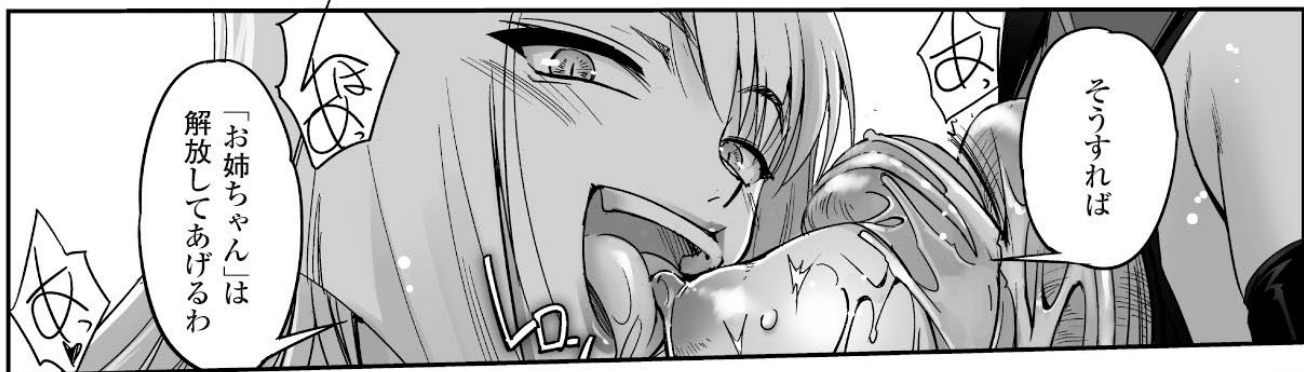
イスカは魔女狩り・白亜から助けた魔法少女ソラを保護する。一方新手の魔法少女セツナはRBとの戦いで傷ついた身体を癒やすべく、蛭の姉として人間界に潜伏するが、学園に巣くう白亜に敗れ触手陵辱の餌食となったのであった。



それとも貴方が「お姉ちゃん」の代わりに

お仕置きを受ける...

あ、あ、あ...



そうすれば

「お姉ちゃん」は解放してあげるわ



私が...

おお姉ちゃんの...

どうする...
早いモノ勝ちよ



わ

わかりました

私が...



ウ・ツ

な〜んて



貴方はこの魔女の次に
かわいがってあげるわっ







か
回
き
ま
す

!!
!!
!!

!!
!!
!!

何か
!!
!!
!!



お姉ちゃん...

お姉ちゃん...

ハーレムキャッスル

THE LEGEND OF HAREM GENERAL

第三章 虚々実々

小説
NOVEL
たけうち
竹内けん

挿絵
ILLUSTRATION
かな
かな

自らを縛めるクリステイナ
その理由とは……!!

『閻神艶戯』にて『ハーレムキャッスル』コミック連載中!

登場人物紹介



クリスティーナ

リュシアンが率いる部隊の戦目付で軍師役。真面目なエリート。



ルキノ

下級兵士からの叩き上げで、一騎当千の強さを誇る女戦士。



オルタンス

リュシアン先輩で、現在は副官を務めている。



マージョリー

フルセン王国に祖国を滅ぼされ、フレリア王国に亡命した女将軍。

前号までのあらすじ

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

フルセン王国との戦いに駆り出されたフレリア王国のリュシアン将軍。率先して戦おうとせず、高みの見物や逃げの一手で戦場を駆け回りつつ、部下の女の子に手を出していくのだった。

「さて、今日も嫌がらせに精を出しますか」
 やたらと陽気なリュシアンの傍らで、暗澹としたクリスティーナは苦言を呈する。
 「すいません。もう少し違った表現でお願いします」
 「おお、そうだったそうだった。敵の補給線を潰しにいくぞ。全軍出撃」
 現在、熱砂の大地フレリア王国を巡る戦いは混沌を極めていた。
 ただでさえ東からドモス王国の先兵たるヒルクルス將軍の侵入を受けて、その対応に大わらわであったというのに、西からは西方半島の雄フルセン王国が、ターラキア山脈を越えて大挙押し寄せてきたのだ。それをダングラール將軍率いる八千人で迎撃したのだが、エバグリーン表の戦いで大敗してしまっただけである。
 野戦に勝利したフルセン軍は、ただちにエバグリーン城を包囲するも、城將マージョリーは頑強に抵抗していた。
 一敗地に塗れたダングラール將軍は、なお纏まった軍隊を維持しているが、すっかり意気消沈してしまっただけで、エバグリーン城を包囲するフルセン軍を遠巻きにしているだけで、一向に近づこうとし

ない。
 そんな中で妙に元氣なのが、リュシアンの別働隊である。この軍は決戦時、後方から高みの見物をしていただけで、負けが決まるといち早く戦場より離脱したので、無傷であったことも影響している。
 やる気のなさにかけては誰よりも上のリュシアンであったが、その麾下には、やる気満々の作戦参謀がいるのだ。
 クリスティーナの企画立案した作戦に従って、リュシアン軍が、敵の補給部隊に夜襲を気取って火矢を放つてみれば、直後に十数倍の矢の雨を降らされる。「うわ、これは読まれていたね。また負けたり、よし、逃げるぞ」
 あっさり撃退されたリュシアンは、やたらと景氣のいい声を上げて退却を指示する。
 「敵、追ってきますっ!」
 「脇目も振らず全力で走れっ!」
 リュシアンの身も蓋もないかけ声に従って、兵士たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。
 当初、クリスティーナの立てた作戦は、エバグリーン城を見捨てるといふものだった。
 エバグリーン城を取ったフルセン軍は、勢いに乗ってさらに領土深くに侵攻してくるだろうから、その伸びきった補給線をリュシアン軍が適時に襲う。
 大軍というのは、それだけで維持するのに大変なのに、慣れぬ砂漠である。そのうえ満足な補給を受けられぬとなれば、たちまち士氣が崩壊する。そこにフレリア国王マドアスに親征してもらい、強襲する。
 そうすれば、フルセン軍を完膚なきまでに叩き潰すことは可能だ、というものだった。
 とところが、無能な上司は「マージョリー將

軍は、ぼくの女だから却下。絶対見捨てない。でもまあ、敵の補給線を狙うって作戦はいいと思うよ。まともによってもぼくらは勝てないからね。きみはこの方針で作戦を立てるように」と作戦の変更を申し渡したのである。
 軍事専門家としてクリスティーナは必死に再考を促したが、リュシアンは譲らず、結果としてなんとも中途半端な作戦になってしまった。
 なんといつても、エバグリーンでは、ターラキア山脈に近すぎる。すなわち狙える補給線が短い。よって効果的な作戦になりえない。
 クリスティーナは、初めから敗北すること前提の作戦を考えなくてはならなくなった。
 つまり、攻撃する前から、敗走路や、避難所をいくつも決めていく。
 それどころか、逆に駐留しているオアシスを見つければ強襲されたことも一度や二度ではない。しかし、ここでもあっさりりと放棄して逃げ出す。
 この熱砂の砂漠フレリアは、いわゆる南国の砂漠とは違う。最高気温と最低気温の差が激しすぎて、動植物が育たないゆえにできた砂漠だ。だから、探すと意外に小さなオアシスがたくさんあった。また一見、ただの荒野でも、ちよつと魔法で掘るとたちまち水が出てくる。それでいて、あつという間に涸れてしまつたりする。
 それは海に浮かぶ小島のようなものであつたらう。その複雑な砂流や水脈の流れを知悉していること、自国民に勝る者はない。
 リュシアン軍は、拠点に固執せず、それらの小さなオアシスを転々としながら、エバグリーンを周りをチョロチョロしていた。
 ※

質問に、実戦指揮官のルキノが答えた。

「はい。ただし、馬から落ちて手首を捻挫した者が一人います」

「男？ 女？」

「女です」

「それは大変、本陣を出て行かなくちゃ」

「いそいそと見舞いに行こうとするリュシアンに、クリスティーナが皮肉を言う。

「楽しんでね」

「ん？ ああ楽しいよ。こういう戦ってぼくの性に合っていると思うんだよね。それに少数の兵で大軍をキリキリ舞いさせているみたいでカッコイイじゃん」

前向きすぎる上司の発言に、クリスティーナは疲れた溜め息をつく。

「まだ一度も、敵の輸送隊の撃破に成功していませんけどね」

連日に行われる補給線潰し作戦は、出撃するたびに、フルセン軍の護衛部隊に軽く追っ払われるのだ。

それをお留守番のオルタンズが弁護した。

「この作戦の場合、敵を打ち破る必要はないんじゃない。敵は補給ルートを狙われていることに気を取られて、エバーグリーン城に総攻撃もかけられないみたいよ。このまま戦線が推移すれば、いずれ物資不足から撤退せざるを得なくなるわ」

砂漠の戦いの難しさは現地調達がほとんどできないということにある。遠征軍としては、時間制限があるのだ。

「わかっています。敵が本気で我々のことをウザがっていることは伝わってきます。でも、こうも連戦連敗だと士気にかかります。一度ぐらいは勝っておきたいところです」

自分で立てた作戦ながら、クリスティーナとして

は、ストレスが溜まることこの上ないようである。

「そっか、勝ち負けで言ったら、ぼくら負けっぱなしだね。これでぼくは何回負けたかな。負けの世界記録とか作れちゃったりして？」

「はあ……」

普通の軍人なら気にするはずの、武人の名譽とか面目。そういったものをまったく気にしないリュシアンは態度が、真面目なクリスティーナには耐えがたいようだ。

こんな変な將軍に、蠅のようにまとわりつかれている敵こそ気の毒と言いたげに、クリスティーナはまたも息をついた。

最近軍の中にまで負け癖が浸透してしまったようである。

主将が負けることを恥ともなんとも思わないのだから、部下たちもそれに倣う。

それどころか、隊長クラスの人材が、積極的に夜襲だの奇襲だの作戦を提案してきて、自分勝手に出撃していつかは、あっさり負けて帰ってきた。大將の薫陶が行き渡ったのか、みな逃げ足だけは速い。そして、小隊長同士、負け数を競うありさまである。

「この軍隊って……」

隊内に蔓延するお気楽な雰囲気、クリスティーナは頭痛がすると言いたげにコメカミを揉んだ。

「子は親に似る。兵は將に似るってことかしら？」

オルタンズはむしろ楽しんでるようだ。

「わたしはいろいろな部隊に世話になってきたが、こんなに居心地のいい軍隊は初めてだ」

実直なルキノも楽しそうだ。

そんな軽すぎる同僚たちの風潮に、ただ一人クリスティーナは染まらなかつた。

「戦とは国家の大事なのです。お遊び気分ですわっていいはずがありません。きつとどこかに落とし穴があります。敵の国王エルフィンは一代で国を篡奪し

たような梟雄ですよ。必ず何か仕掛けてきます」

こうやってのんきに笑いあっていられるのは、部隊からほとんど死傷者が出ないことも原因だろう。しかし、軍事専門家であるクリスティーナとしては、毎日薄水を踏む思いなのだ。

「まあ、そういう難しいことはクリスティーナに任すよ。ぼくは忙しいから」

「忙しい？」

その聞き捨てならないリュシアンの発言に、クリスティーナの視線に殺気が宿る。

「失礼ながら閣下は、いつも女たちと戯れておられるようにお見受けしますが！」

毎日作戦を立案している自分は死ぬほど忙しいが、あなたにだけは忙しいと言ってもらいたくない、と言いたいらしい。

「適材適所に人材を配置し部下を信頼し全てを任せろ。これが上に立つ者の心構えってもんでしょ。ぼくとしては、せめて負傷した女の子のお見舞いに行つて、その心身のリフレッシュに協力しようと考えているんだ」

そのお気楽極楽発言に、クリスティーナのコメカミがピクピクと痙攣する。

しかも追い打ちがあつた。

「百戦百敗でも、百戦錬磨。うん、いい言葉だなあ」

「それって誰の言葉？」

オルタンズの質問に、リュシアンは胸を張って答えた。

「ぼくが考えた。いい言葉でしょ」

「はあ……」

本陣内になんとも微妙な空気が流れるが、リュシアンはめげなかつた。

「あ、そうだ。今度、ぼくのこと不死身の男って呼んでくれていいよ。不死身の將軍リュシアン。うん、いい響きだ」

想像の中では百回以上は上司を殺害していそうな部下たちを残して、お気楽將軍は本陣を後にした。

※

「それじゃ、お大事にね。無理しちゃうダメだよ」

一人で落馬して手首を捻っただけ、魔法治療して簡単に治ったのに、將軍自ら見舞いをしてもらった女騎士は、大いに恐縮した。

それにつけ込んだリュシアンは、しつかり貞操を頂いてから別れる。

（今夜の夜伽は誰にしようかな？ オルトアンスはやっと飽きたかな、ルキノは完全に目覚めちゃったからな。彼女とやると腰が痛くなるんだよなあ。たまにはもつとこうしつとりとした女らしい女とやってみたいな。軍隊にはちよつと無理かあ）

自らのパオに足を向けながらそんなことを思案していたリュシアンは、不意に見知らぬ女性に声をかけられた。

「リュシアンさま。たまにはわたくしと遊んでいただけませんか？」

そこに立っていたのは二十代後半の女だろうか、緋色のパンダナを頭部に巻き、臙脂色のマントで身をすっぽりと纏い、口元まで隠している。

（おつ、いい女よ）

小娘とは違った大人の匂いのする女性の登場に、たちまちリュシアンの鼻の下は伸びる。

「町の人？」

「はい。未亡人でして、少々生活が苦しいのです。わたくしを買ってはいただけませんか？」

「ああ、戦時中だもんね。庶民のみなさんには迷惑かけて申し訳ない。いいよ」

馴染みの女たちとのセックスとは違った新鮮さを求めて、その色気美女を、リュシアンは嬉々として寝所に招き入れた。

そこで酒を出しながらリュシアンは何気なく質問

する。

「ところでキミって、なんの目的でぼくに近づいたの？」

「あら、なんのことかしら？」

すつとぼける美女の瞳を、リュシアンは覗き込む。

「ぼくはこれでも女で苦労しているからね。相手がぼくに好意を持っているかどうかは見ただけでわかるんだ」

女のトパーズの瞳が笑った。

「残念。セックスのクライマックスで、苦しまずに殺してあげようと思ったのによ」

バサッと赤いマントが舞ったかと思うと、中から目の粗い網タイツと、黒いレザーのブラとパンツという過激な装束に包まれた女体が現れ、同時に白い組紐が四方に走った。その一本がリュシアンの首にかかる。

「うぐつ!？」

そのまま天井へと釣り上げられて、足の指先がころうじて付く程度となる。

窒息より先に喉が潰れ、首の骨が押し折れそうだが「詰めが甘かったわね、坊や。それでは助けも呼べないでしょ。わたしの名前はレイテ。紅蜘蛛って二つ名で知られているわ」

確かに美女の色香に迷って、油断していたことは否定できない。

酸欠でもがき苦しむリュシアンが、なんとか首と縄の間に指を入れて気孔を確保すると、目の前にギリと短刀が振り翳された。

「このまま窒息まで待っていたら時間がかかりすぎるから、トドメ刺してあげる」

「……ちよ、ちよつと待った。せめてエッチしてから」

絞り出された男の言葉に、レイテと名乗った女は莞爾と笑う。

「噂通りの筋金入りの女好きね。きみ、フルセン軍からなんて呼ばれているか知っている？」

「な、なんて呼ばれているんですか？」

好奇心を刺激されたリュシアンは素直に質問する。

「ウナギ將軍。捕まえようとしてもぬるぬるして逃げていく」

「うわ、いま一つかっこよくないな、それ。断固として変更を要求する!」

命の危機にさらされながらも、本気で抗議してくる相手に、レイテは楽しげに笑った。

「ごめんなさいね。そのウナギが捕まえられなくてうちのダーリン、かなりカッカしちゃってね。捕まえたところで大して美味しくもなさそうだし、いっそ殺しちゃえて話になったの。バイバイ」

短刀がリュシアンの左胸に突き刺さろうとしたときである。

ブンッ!

何か刃物が飛んで、リュシアンの首を絞めていた縄が断ち切れた。

「っ!？」

どさつとリュシアンが尻もちをつくのを一瞥した女暗殺者は、臙目も振らずに窓から飛び出している。

暗殺とは奇襲しかない。護衛に気付かれたのなら一目散に逃げる。正しい判断と言えるだろう。女暗殺者はあつという間に闇にまぎれてしまった。

「ゴホッ! ゴホッ!」

床に蹲ったリュシアンは、激しくせき込んだ。

「まったくとんだ先客と出くわしたものだ。おい、大丈夫か？」

リュシアンの頭上から降りかかった声は男のものであった。顔を上げると、そこには抜き身の剣を片手に持った見知らぬ男がいた。年のころは二十代と思えるが、なかなか精悍な面構えをしている。



それを見た瞬間、リュシアンは叫んでいた。

「曲者だ。出会えっ！」

「ちよっと待て、俺は命の恩人だぞ」

男は抗議の声を上げたが、どうにもならない。ただちに室内には三本刃の戟を翳したルキノと、サーベルを抜剣したクリステイーナが駆け込んでくる。

そして、室内に見知らぬ男がいることを知って、目の色を変え斬り込んだ。

「痴れ者が、己の浅はかさを悔いながら死ぬ」

「逃がさん！」

ルキノも続く。

狭い室内で、サーベルと戟が、同時に一人の男を襲う。

リュシアン軍のトップツといっぴい二人がかり。特にルキノはあのヴァレリアと互角に戦えた豪の者だ。

相手がいかなる使い手だったとしても、決して取り逃がさないだろう。

「ちっ」

男は舌打ちをして、襲い来る二条の閃きを弾き飛ばした。

ガン、カン、ザッ！

激しい剣戟の間に身の安全は確保したリュシアンの背中を、心配顔のオルタンスがささる。

「リュシアンくん、大丈夫っ?!」

「うん、なんとか……」

一方、見知らぬ男は、猛女二人に追い立てられてぼやいていた。

「たっく、とんだ毒蛇だぜ。俺はおまえたちの上司の危機を救ってやったんだぞ」

「やかましい！ 見知らぬ者がこのような場所に置いて投降しろ」

クリステイーナの言いつ分はもつともである。しかし、しばし刃を交えていたところで、いったん間合

いを取り感嘆の声を上げた。

「いったい何者です。名を名乗りなさい」

声をかけながらクリステイーナは油断なく、窓を背に立った。この男はここから逃がさないという合図だ。ルキノは部屋への入口。いや、その後ろから警備の兵がズラリと並んでいる。

「ほんとはこつそり面会するつもりで手間暇かけて潜り込んだんだがなあ」

完全包囲された男は予定が狂ったと言いたげに肩を竦めた。そして要望に応える。

「俺の名はヒルクルス。ドモス王国フレイア方面軍の司令官って名乗ればいいか？」

ズサササ……

その名乗りを聞いて、部屋を包囲する兵士たちの血は一気に逆流した。

「ひゅーん」

あまりにも予想外の人物の登場に、さすがのリュシアンも呆れ顔で口笛を吹いた。

ドモス軍には数多の名将がいるが、フレイア王国では一番有名な將軍だ。何せ現在、ドモス軍の先兵として、フレイアの東に割拠している男だ。

元々西南のイシュタール王国の王族出身だったが、国を追われて諸国を放浪。ドモス王国に仕官した拳句に、方面軍司令官にまで上り詰めた、という異色の経歴の持ち主である。無能なはずがない。腕が立つのも当然であろう。

しかし、この重囲に入っはどうにもなるまい。思わぬ大物を確保できたことに余裕を感じたリュシアンは声をかける。

「まあ、殺す前に一応、来訪の目的を聞いておこうか？」

女にはとことん甘いリュシアンだが、野郎にはとことん冷たい。

ヒルクルスは皮肉っぽく笑った。

「単刀直入に言おう。リュシアン、貴様、この国の王にならんか？」

「……はあ？」

その提案に、意表を突かれたリュシアンは唖然とする。

「おまえは、先の王太子ウルベインの忘れ形見。いわばフルセン王国の正式な王位継承者だ。マドアスは詐術でおまえの相続すべき正当な権利を奪ったんだ。おまえが成人したからには王位の返還を要求すべきだ」

つまり、リュシアンを傀儡にして、フレイア王国に親ドモス政権を作ろうというのだ。

周囲の兵士たちが、上司を横目で見る。確かに血統的には王位を要求していい立場なのだ。強大なドモス王国の後押しがあればそれは不可能な夢ではない。

そんな部下たちの不安そうな視線を意識しながらリュシアンは苦笑した。

「あいにくと、ぼくはいまの気楽な身分が至つて気に入っている。それにあなたの首を手土産にすれば、ますます国王の信頼を勝ち取れるだろう。みなのおきつと討ち取れ。またとない手柄首だ。国王からの恩賞は思いのままだぞ」

これが美女であつたなら、対応も違つただろうが、男になど情けをかけてやるいわれはない。

リュシアンに発破をかけられた護衛たちが一斉に襲いかかるうとしたときである。

「今日とはとことん運がなかつた。ここまでだな」

男の声が続いて、なんとパオが燃えだした。パオの周りから火がかけられたようである。

「これは魔法っ!!」

オルタンスが驚きの声を上げる。

このままでは火と煙に巻かれて、パオにいる人々

が全員焼け死んでしまう。

まさか道連れに心中するつもりなのか。国家の宿敵を討ち取るべきか、野外に退去すべきか、みなが判断に迷ったときである。

ヒルクルスは重囲を突破して、窓から野外に躍り出た。

「えっ」

驚く一同の前に、バサリと巨大な翼竜が飛翔し、その背にヒルクルスを乗せた。

「リュシアン。今夜はこれで引くが、俺の提案を考えておいてくれ。いい返事がくるまで待っているぞ」

そう言い残して飛龍は飛び去っていく。

「おのれ、弓っ」

窓辺にまで駆けつけたクリステイーナは激昂して叫んだが、その場には用意されておらず、ただちに集まらなかつた。

「くっ……本陣に賊の侵入を許し、取り逃がすとはっ！」

悔しがるクリステイーナの後ろでは、リュシアンがぼやく。

「しかしなんだね。現在のフレイア王国って百鬼夜行だね。おちおち女も抱けない」

何気なく伸ばされたリュシアンの右手が、躑躅色の軍服に包まれたクリステイーナの右の乳房を捕らえた。

「……っ。なんの真似ですか？」

「いや、命の恩人であるキミに、お礼しようと思つて」

ゴホン！

一つ咳払いをしたクリステイーナは、向きを変え、リュシアンの顔を見上げた。そして、右手が高速で一閃する。

バンッ！

リュシアンの頬に平手打ちが決まった。目に星が

散ったというより、脳が揺れたと思う。

「失礼っ」

上司を容赦なく張り倒したクリステイーナは、礼儀正しく一礼する。

「閣下がどのようなご趣味をお持ちかと勝手ですが、公私のけじめはつけてもらわないと困ります。わたしは閣下の私兵ではなく、戦目付。行動はともに致しますが、国王陛下直属です。場合によっては閣下に優先する指揮権を行使することが許され、また閣下が將軍として不適切と判断した場合、逮捕する権限も与えられております」

「はい……」

素直に謝罪するリュシアンの頭を後ろからオルタンスが「オバカ」と小突いた。

※

大変な一夜の後には、リュシアンの寝所の警備も厳しくなり、二度と賊の侵入は許さなかつた。

その代わり、女を連れ込むことに苦労したが……

それでもしつこく嫌がらせの攻撃を繰り返していたある日、変化があつた。

「フルセン軍が、動きました」

一軍でエバークリーンを包囲したまま、別働隊を発して、南下させているというのだ。

率いる將軍はマリガン。その数は二千ほどだという。

「目標は？」

リュシアンの質問に、クリステイーナが答えた。

「おそらくザウルステール」

その分析を聞いて幕僚一同は嫌な顔になる。リュシアンも顔を押しさえて仰け反つた。

「うわ、さすがにイヤらしいところを突いてくるな」

ザウルステールは、フレイア王国唯一の港町である。正確にはフレイア王国の領土ではなく、南のパロムリスト王国からの借地である。

砂漠の国であるフレイアの特産は、魔法の触媒の採掘である。しかしながら触媒は食えるものではない。外国に売って食糧を仕入れないと国家として成り立たない。

陸路よりも海路のほうが一度に多くの物資を運営できるのは世の習いだ。

その荷揚げを一手に引き受ける港である。いかに重要であるかは自明のことだ。

「敵はことさらに己が行軍を見せつけているフシが見受けられます」

「つまり民か？」

ルキノの確認に、クリステイーナは頷いた。

「はい。間違いなく民です。目的は我々を誘いだし、覆滅することでしょう。問題はどのような策かです」

クリステイーナと、その他の幕僚たちは真剣に地図とにらめっこをする。

そんな彼らを見守りながら、大将たるリュシアンは他人事のような顔で、冷たいレモン水をストローで飲んでいたが、不意に口を開いた。

「いつそ、スルーしちゃったら」

「なっ!!」

リュシアンの意見に幕僚一同は哑然とする。

「何を言い出すかと思えば、ザウルステールは我が国の生命線です！」

激昂するクリステイーナに、リュシアンは理由を説明する。

「フルセンが、ザウルステールを攻めると必然的にパロムリスト王国までこの戦役に引つ張り込むことになるよ。それをよしとするかな？」

「そういうことになったら、ほんと、この国の勢力図はグチャグチャね」

赤い眼鏡の奥でうんざりといった表情を作ったオルタンスは、想像するのもイヤ、と言いたげに両手を上に向ける。

ほ



…しかしあれから3日
二人掛かりでもナリカの
味に及ばないとは

七七



おいしいです

うむ

ほ

く



いいいや
ハルカさんのせいじゃ
ないさ

俺も手伝った…
いや邪魔はしなかった
…か

申し訳ありません…



ともかく現状には
対応していかないとね

はい





メシの札って事で
知ってる限りを
話してくれたし

身の安全と
監視の意味も込めて
大蛇丸は上弦の
隠れ里本部へ後送



はいっ

良かったね

スバルの容態は安定
明日にも目を覚ます
だろうって



と言っより

何かにつけ込まれて
思考の方向性をすらされる…
要するにそそのかされている

…らしい

ズズ

…ナリカは

外法印に蓄積された
ノロイの力に操られ…



うん

さしあたりその点は
チャンスとしても
いいだろうね

会って話を…
ナリカさんを取り戻す機会
はあるということですね



ノロイの狙いが
何であれ

ナリカが事態に
干渉して来ることは
間違いない

それならば…



…前回の
攻撃の甲斐あって
青龍城はゆっくりりと
崩壊しつつある

…が瘴気の圧力は増し
前以上に結界を蝕んでいる
——つまり——

青龍城は
まだ生きている



ナリカさんを
城主として…!

超能力
超能力
Beat Blades HEROES

業火

MISS BLACK
原作 / アリスソフト
ORIGINAL
©ALICESOFT

好評発売中!



単行本第一巻



うん



業火「業火」待つ



あ...うん...うん

うん

うん

うん

うん





はい
新手の怪忍の
気配を感じます

現れたか

よし



ハルカ!

はいっ!



先生!



あアンタ達は…!

わ私もそう言った…
のに

つた
助けて…

くれ…

そっだ



そいつらは
救い様のない下衆だ

どれほど悔いても
必ず繰り返す

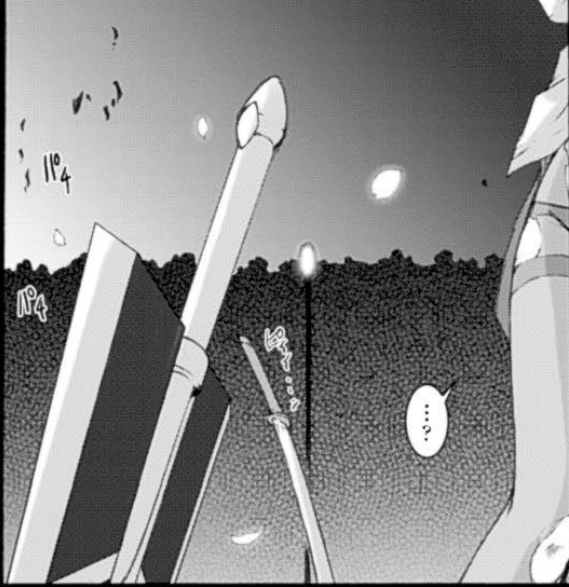
人は変わらぬ

だから

殺せ!

あゝあゝあゝあゝ





…人の心の闇につけ入り
悪に誘う非道の行い

想破上弦衆「閃忍」



ハルカ見参

我が背に負いし
月影に代わり

忍の技にて碎きます



面白い

我が怒りの炎
消せるものなら—



!?

な...



二次元下りムクベルズ屈指の人気ヒロイン復活！
漆黒の魔姫の肢体に白濁が
驟雨となって降り注ぐ！！

魔が墮ちる夜 外伝

— 白濁の慈雨 月魄侵蝕 —

小説 NOVEL
ようどう 譚堂

さきひろ 笹弘
挿絵 ILLUSTRATION

9ページにシェリス様抱き枕カバー化情報掲載！！

古来より、「慈雨の法」という。

女性を隷属せしめる濁精の儀である。まず、牝牝洞に生い茂る麝焚草の根の煮汁、乾燥させた海魔の陰茎の粉末、鬼稜塔で幽閉されし処女の夜喘ぎ。それらを黄銀の浴槽にて混合し、犠牲者へと纏わせる祭衣を三日三晩浸せ。

時が経ち芳香を得るに至った装束にて女体を包み、七日七晩熟成させよ。

然る後、贄が左右に頤を振り髪をおどろに嘆き乱す段を得たならば、それより月の満ち欠けが一巡りする間、弛まず雄の髄液を射塗り続けるのだ。決して、一時も、休息を与えてはならぬ。さすれば彼女、意識の変転を見、汝の体液へと傳くであろう。

ゆめゆめ成就、天地自然の理が為すと思うべからず。貴卿の技巧の淫蕩汪溢を祈る。

「うーん、もう七日七晩経ったけど、始めちゃつていいのかなあ。まだシエリスエルネス、悶え泣いてないよ？」

「ランツ、セ……リ……イ!!」

迂闊にも娘に添い寝を許していた常夜の姫君が、一瞬の隙を突かれて魔都の暴君の領域へと引き摺り込まれてしまつてから、既に七日が過ぎていた。

魔少女の手により淫猥な手管を施されたビスチエドレスが、魔姫の白皙の裸体に食い込んでいた。今も、爛れた官能の釉薬を、透けるように肌理細やかな氷肌へと染み込ませてきていた。「踏んじやおー、意地悪な母親は。わ

たしの世界を気に入ってくれないなんて、そんな事は有る筈ないんだよね」

ランセの影から産み出された豪奢な寝台が、シエリスを仰臥させて捕らえている。背中を敷き布から離す事ができなかつた。その手の拘束術式なのだ。マッドレスの裾を軋ませて立つた少女の素足が、此方の太腿に体重をかけてくる。堅く口を結んで答えず、まぎらさせるままにしながら、火の如く睨みつける。しかし、目尻に掃いた朱が、発情の具合を雄弁に物語っていた。

「だんまり? それとも喘ぎ声が漏れないよう、唇を噛むのに必死なの?」

腹いせ混じりの親指に、蹴るようにして横腹を扶かれると――

「つア――ツツ!!」

艶めいた汗みずくの肢体が飛び跳ねた。エナメル生地の中腰で皮膚が裏返る。過敏な神経の束が、楡の樹皮を剥き生肌を露出させたが如く若精を散らして、総身に落雷を降り注がせたのだ。「ううあ……ふ、ヴ……ヴヴうううう――ウウウアオオオツツ!!」

仰け反った旋毛がシートに∞字を刻む。泡を噴いて身悶え、耳に涎を零す。「な〜んだ、とつくに準備はできてたんじゃない。んじや、始めよつか!」

――一日目。棄都に天満月。

「ぐゆ……きゆら、ふあう……うっ」

束縛により、手の甲も踵もベッドに接し続けねばならぬ。まるで遮る物のない肢体へと、天蓋で犇めく醜悪なフ

ジツポの岳湖孔から白濁が垂れてくる。ポタツ、ポタツ、と、一滴、一滴。

「い、ぐ……ヒイ……つ……つぐ!」

熱した蠟を浴びるに等しい。ピー玉程もあるそれらが露出部にへばりついてくる度に、快感の巻き藁で打たれた

肢体がトランポリンに乗って弾むのだ。(乳房の奥にまで、ひ、響いて……) 励起しきつた麗峰が残像を作り先端

火山を蠢動させる。悪戯に落下地点を変えてくる粘液の指先に摘まれる度に、柔肌を痛める波紋が昂った官能細胞の水面に広がっていく。俄に四肢が

自制を失い、ガクガクと関節随喜。

「燃え、るうっ、羽っ、までえっ!!」

紅紫柘榴を薄く引き延ばした風情の皮膜にも、ポツポツと斑点の焼き鏝が押し当てられるのだ。四枚の木の葉が被虐の炉にくべられ踊り狂う。その付け根まで穢れの烙印に虐げられて「我慢ができなかつたら、自分で慰めてもいいからね?」

そう言つて撫でられる膝間の尖鋸尻尾。くねつて逃げようとする黒漆の導線へと砲弾が命中する度に、瞬間的に桃色の過負荷電流が雪崩れ込み、肉芽がはち切れんばかりに膨張する。

「んオオオオオオオオオオオツツ!!」

山羊角の近くまで持ち上げた両掌でシートを掴みながら、シエリスエルネスは、自分が落し出すのを感じていた。

――二日目。月の欠け始め。

睡眠を取る余裕が与えられていない為、正確には二十五時間目が始まつたと言つた方が良さだろ。

「ハ、ア……ハア……ア……ツ」

べつとりと張りついた酒桜色のシートがジュルジュルと音を立てて蠢き、鼠蹊部を吸り上げてくる。否。その表面に浮いた突起に定期的な雫が落ちてきて陰唇が悲鳴を上げていたのだ。

あたかも、雨垂れが庭石を穿つかの如く。クリトリスが赤燐で汚蟬が塩素酸カリウム。両者が出逢えば化学反応が生じ、轟々とマツチが燃え上がる。

「……ツ、きゅ……みぎゅううツ!!」

視界に極彩色のスパークが散る。莢を脱いでいる牝豆を執拗に狙い打たれて。繊維を抜け、包皮の内側にまで隈なく染み込んでくる悦菜が、腰から頭までじわじわと妖しく突き抜けてきた。

「ふぐ……ツ、ヴウウウ、ウツツ!!」

堪えようと腿を閉じる。陰阜が盛り上がり、ますます密集した過敏痴帯に点滴の馳走が姪虐暴戻、強談威迫。「可愛いな、シエリス。それで我慢してるつもりなんだ」

目をつぶり、懸命に意識を保とうとするシエリスエルネスだ。

(私はランセを心から憎む事ができませんわ。こんな様では流されて――)

「復讐なんて忘れちゃおうよ? 代わりにわたしが、しといてあげるから、シエリスは永遠にここで暮らすの」

論外だ。ぎゅつと歓喜の涙を潰し払い震える睫毛。水気を失つて粉を吹い

た媚薬の層が魔姫から滲み出す琳汗を含み、再びぬらついでいく。早くも思考は途切れ途切れになり、目にも鮮やかな肉芽の朱印が腰布の色を破りだす。

「浮気者。甲斐性なし。育児放棄。そんな強情、微塵に砕いてあげろよ」
「クヒ……ッ、キ、イ、ヒイッ！」

五日目。臥して待つ、月の磨滅。クリ垂れに耐えられたのは、この夜までだった。月魄の水銀の一飛沫毎に跳ね上がっていた煩悶のオクターブが、ついに限界の天井を越えたのだ。

（し、沁み込んできますわあああつ）
女体を狂わす薬効成分が肉芽粘膜の麓から、じわあつと広がり、快感中毒で腰全体を鏽濁かしていく。規則正しいリズムに合わせて縦に振られる。

「あ……当てに……行かされ……エ」

その媚恥態へドレス越しにも欲情の眼を注ぎ、数威を増し始める磯群。打たれた太腿が、針で刺されたかのように緊張する。身を振つても脇腹や腋窩へ飛び込まれ、被害の少なかつた部位にまで魔の手が添えられるだけ。

「んう……っ……え、エ、ゲツ!!」
熱い吐息と共に突きだした、尖った桃型の舌先を強かに直撃された。見開かれた蒼瞳が悔しげに潤んだ。

「美味しい? わたしの体液の味」
「エほッ……く……あつ……ふああつ!!」
彼女は己の嬌声が落下の間隔と同調している事に気づいていない。哀れな

拍節器が次第にピッチを上げていく。

十一日目。月は痩せ細る。
今や、白濁の量は、雨あられ

間断なく降り注いだ黴り液が、シーツの囚人の重みに沿った窪みに溜まり、ちよつとしたプールになっていた。

浸透して裏から滴り落ちるといふ不手際はなく、それどころか滑沢な魔布は生臭い精油を吸り取り、妖しくシエリスエルネスの背中を吸ってくるのだ。

「カー……ハ……ッ、ミヒヤ……ウ!!」
言わば、巨大な舌の上に寝かされ、塗りたくられているような物である。

「ああつ、シエリスの味が伝わってくる! もつとわたしの味も覚えて!」
「へゅア……ッ、イツレエエツツ!!」
両肩の喫水線が淫らな波にしゃぶられて沈み、瓢箪の如く括れた腰の竜骨が凄艶に軋む。湯気に包まれた魔姫は処女航海で嵐に揉まれる客船だった。

十四日目。月籠もり。

太陰の魔性であるランセリイの執り行う淫儀において、今宵は犠牲者の破滅のみならず新生の開始をも意味する。

「は……ひ……も……つ、く……ひ……くる……」
鮮血を練り込んだ雪色求肥が尊い女畜の形を取って蠕動していた。
淫欲に滾らされたシエリスエルネスだ。赤らんだ白磁の肌に孕まれた輻射熱が蜃気楼を生じさせ、紫のプラチナを妖しく揺らめかせている。立ち昇る

懐とした香気が性臭と混ざりあい、嘔せ返る程の牝いきれを醸し出していた。
「ニユズツ……どちゅッばああアツツ!!」
偽根を生やした魔少女が亀頭を朱唇から摺り抜き、鼻先にぶちまけてくる。

「えへつ、シエリスの喉粘膜、暖かかつたよ」 お札されて気持ちいい?」
「ツぶあ、むにやああああアツツ!!」

性獄に繋がれたまま、受けた顔射は数えきれぬ。今では啞えさせられる度に、手足が血管になってしまったかのように甘く搏動してしまうのだった。

「嬉しいよね、裏筋でお鼻を拭いてあげる。ほら、この中にシエリスの遺伝子も入ってるんだよ!」
「お……ッ!! あ……ッツ!!」
「らあ……はゅア……ッツツ!!!」

言葉にならなかつた。魔姫は咆哮じみた喘ぎ声の具合だけで意志を示す、原初の獣に先祖返りを果たしていた。

しかし、今宵は猛き闇の魔性の力が最大限に強まる瞬間でもある。

（……刻……待……つ……ましたわ!）
眩暈のする腐臭を肺一杯に吸い込んで嘔吐かされながら、彼女は乾坤一擲の気迫を振り絞り束縛の呪を軋ませた。

「よつ、悦びなさい、ランセリイ!」
「今だけ、何もかも忘れて、貴方を敵として扱ってあげますわ!!」
「今だけ? そんなんじや、全然足りないなあ……もう、生涯の仇敵として付け狙ってくれるぐらいじゃないと、到底我慢できないよ!」
プギユヂュルネヂョベユオツチャ!!

突如シーツの四隅が裂けた。そこから先端が蜂の巣状になった触手が現れて、ポコポコと泡立った黄金色の射液を上石流の如くぶちまけてきたのだ。

「んアハアオオオツツ!! ヒギツイッな……まッ、らあ、ひづつがう!!」
一瞬、常夜の姫君の時間が止まる。

（何ですのこれ重みの質が違……ッ）
「シエリスはさー、抱き枕になつちゃうんだよね? 娘にはつれない癖に男の腕の中では嬉しそにするんだ?」
「許せないから、買ひそうな連中、皆殺しにして材料にしてやつたよ!」

沐浴——生命と欲望のバリウムで。
（毛穴つ、犯されてますわあああつ!!）
餅のような濃いザーメンの口づけが全身に。ぎゅつと縮んだ衣裳が、ここぞとばかりに勘所を締め上げてくる。

「今日反撃が来るなんて、百も承知。そっちが見てくれなくても、こっちは何だつて知ってるんだから!」
逆襲どころではなかつた。群がる精子を迎え入れようと皮膚の全細胞が卵子化し、一斉に電悦信号を放つたのだ。

「アヘアア……ッ、ピリゅい……!!」
獣返りの先へ。卑汁を吸る原始生物の領域へ。シエリスエルネスの理性は、白濁に重く深く塗り潰されていった。

「アハ、アハハッ、だつらしがなういなあ、お母さんは。わたしが守つてあげないと、何もできないんだから!」
十五日目。萌芽の織月。



我が兄弟
たちよ

此度の戦は
よく戦って
くれた

^^
これがあの
戦乙女が

気い強そう
なのがイイな

美味そう
だぜ

今宵はその
褒美と日頃の
慰勞をかねて

私・の・女が
卿らを癒やして
くれるそうだ

単行本最新刊
8月発売予定!

Walküreist Sklavin

漫画 **ぱふえ**
COMIC

な...!?

そんなこと
聞いてないわ

貴方! 私を
何だと思っ
ているの!?

ん
???





自ら奴隷に
してと
懇願したのは
どこの誰
だったかな？

やめっ
つねらない
でええッ!!

まあ



いっつもを
してないから

すねておる
のだろう？



そ…
それは!!



それ…
だけは



奴隷は黙って
主人に従って
おれば良い

ひ…あ
だめっ

も…申しわけ
ありません
ああ…ん

少し弄った
だけで素直に
なりおって

いやらしい牝に
堕ちたな

そん…なあ
貴方のせい
ですのに…

あやあ



どうして私が
こんな連中に
こんな事を...

でも...
あの方の命令に
逆らえない...

うっとりした
顔しやがって

はあっ
あ...あ

ああ...

ん
や...あ

これじゃ奉仕
じゃなくて
ただのお前の
オナニーだな

くうう
嫌々してる
と言うのに

いいテク
じゃん♪
さんさん
調教された
みたいだな

言うな...
好きでしてる
わけでは...
な...い

夢中になら
て
しまうなんて

胸...があ
熱くて

無駄口は
いいから
早くしろ

アアアア



違…ああ
早く終わり
たいだけ…

早く…
早くう



早く…
もう早く
出してええ

アインカンガ
神器の力で
魅了されても
いないのに

わさ

わさ

わさ

お？ 精液の
おねだりか
立派な奴隷
じゃねえか

こんなことで
おっぱいが
悦んじゃう♡



それじゃ
全身使って

ご奉仕して
くれよな！



びびび
わさ



あゝあゝ
あゝあゝ

おおっ
そんなに
暴れたら
出...

はあああ

ひあっ
はああ



はああ

はあ

あ...
いひやあ
あああ



はあ

じゃ
俺は口な



まだ休むなよ
乳持ってて
やるから
手もしろや

ひあ
はあ



はあ

はあ

こんふあ
いつへん
にい…ん

無理れふ
の…おお

いやあああ
目なひれ…

すげー
ちんこまみれ

こんなの
んぶっ

私じゃ…
ないのお

おお♪
いい締めり

ひらッ
そんな

膣内…で
ええええっ

イ…ク
熱い…の
だめええ

んふあああ
んふあああ
♥

睡眠でえ
ええええ

ひあ…ッあ
あああああ



せーえき…
いつはひ♡
あ…あ

いッてる
いッてる♪
かわいい
♡

きさし

そろ…
次は俺の
番だぜ!!

ま…たあ

は…
あ…♡

潮吹きか!
くっイイ
締め付け
しやがる

んっ♡…
んはああ

あ…あ

あ…あ

あ…あ

ああああ
もう出さ
ないでえ

溢れちゃう
のおおおッ

私の肉体…
もう完全に
調教されて
しまった

おち…ちん
美味しい
だなんて…

おっぱいも

ひゃう
んんん

おま…
もお…

ああ…
は…

もっ…
許しへ

こんなに
せーえき
いつばい

これが…
奴隷の悦び…

ま…た…あ
イツひゃう
か…らあ…あ

おかひく
な…ひゃ…

カニスキがデスバ

魔王様の収穫祭

原作
ORIGINAL

カニスキ

小説
NOVEL

みやお
美夜緒ねこ

挿絵
ILLUSTRATION

さとをみどり

キャラクターデザイン
CHARACTER DESIGN

valyu

各国のお姫さまをさらって、
自分色に染めていけ!!

カニスキの最新ゲームの外伝小説が本誌初登場!!

ゲーム情報は10&11ページをチェック!

オフィシャルサイト

<http://arkham-products.jp/kanisky/prihan/>

©アーカムプロダクツ / カニスキ

ウエルベール獣王国王女、フェミナ姫は壁に掛けられた豪華な毛織り絨毯の前に立ち、彼女最大の敵、つまり自分自身と激しい論戦を展開していた。フェミナは行ったり来たりしながら、城を抜け出す理由について考えていた。私は城に引きこもつてはいたくない。殿方の気を引くための楽器や踊りの練習にも、もううんざり。

魔王ベイルーツの封印が破られ、フェデリア王国のイナルナ姫がさらわれ、更にはアランドラ騎士国のノエル姫もさらわれて、巷では「姫狩り魔王」の噂で大騒ぎなのはわかるけど、どうなのだろう。

囚われた姫は、魔王に犯され奴隷にされてしまうと言われているけど……：：：：だいたい王族記事は大袈裟なものが多いのだ。

それに、世継ぎの姫ならいざ知らず、フェミナの王位継承権は下も下……：：：：大勢いる従兄弟達を差し置いて順番が回ってくるわけがない。

ついでに、イナルナ姫のように大陸一の美女でもないし、従姉妹の姫達よりしく可愛らしく媚びることも上手いとは言い難い。

自分の気にしすぎと思っても、殿方の視線が自分の大きすぎる胸に集まるのが恥ずかしくて、社交は苦痛そのもの。こんな自分が、魔王に狙われるわけがない。

外からは、小鳥の声がかすかに聞こえてくる。

この間から読み始めたちよつと過激な恋愛小説の続きはもの凄く気になる。決めた！ やつぱり、外出してしまおう。殿方の気を引くより、大好きな読書の方がずっといい。

フェミナは壁に掛けられた絨毯を捲り、秘密の通路に飛び込んだ。城から抜け出し、こっそり向かうは町の本屋さん。

フェミナ姫はいつものように官能書籍のところへ来ると、本を掴み、奥にある哲学書のコーナーで読みふける。ここには人が来ないのだ。

その時突然、周りの空間全体がぐにやりと曲がるような感覚に包まれわけがわからなくなった。

顔を撫でる冷たい風にフェミナは冷たい床に座っていることを自覚する。混乱したまま、辺りを見回すと一人の男がいた。

「ここは……どこ？」
「ようこそフェミナ姫、我がセイラム城へ」

「貴方はだれ？ セイラム城……：：：：そんな名前の城……」
「そう言いかけてフェミナは息を呑んだ。」

「あつ！ ま、魔王の城……：：：：そんなまさか……」
「ほお、我が城を知っているのか？」

「ひいつ……あ、うう……：：：：魔王……」
「酷薄な冷気をまとった魔王が近づいてくる。」

言いようのない恐怖にフェミナはじりじりと後ずさるが、すぐに背中が壁にあたってしまふ。逃げられない。

「あ、ああ……あ……む、昔の本で見ました」

「昔の本？」
魔王の視線は、フェミナの胸元へと注がれた。

服の上から見てもわかる大きな胸に、本が埋もれそうに抱えられているのがわかる。

「あ、こ、これは……」
魔王の視線が胸元を見つめている理由に気づいた途端、フェミナは慌てて本を背中に隠そうとした。

「淫縛の補習授業？ おいおい、そんな本が好きなのか？」
「ち、ちがいますっ！」

顔を真っ赤に染めて必死で否定しているのだが、本を持つての言い訳には説得力のないことの上ない。

「ククク！ なんと、ウエルベールの姫君は、性に興味シンシンのイケナイお年頃のようなだな？」

「そ、そんな……う……うにゅう」
魔王は、ひよいとフェミナの手から本を奪い取ると、ペラペラと適当にページをめくる。

「んん、こんな破廉恥小説が好きなのかつ！ クハハ！ あどけない顔してなア」

「あうう……ち、違うんです……それは、それは」
涙目で弁解しようとするフェミナだがもう遅い。

城でこっそり母親に隠れて読んでいた官能小説が魔王に知られてしまったのだ。

「こんなのを読んで、女の壺を濡らしているのか？ Sexしてもらいたくってウズウズしてるんだな？」

「違います、違いますっ！」
「違わないだろうが、すけべな姫のくせに！！ん……：：：：：そうか、いいことを思いついたぞ！」

そう言う魔王は、立ちすくんだままのフェミナに近寄ると、身を包む服に手を伸ばした。

フェミナは恐怖からとっさに身をよじろうとするが、ひと睨みされただけで動かなくなる。

「ぎゃあ、いや、服ー！ やめて、いやあーっ！」
上に羽織ったボンチョを捲り上げ、チューブトップが上にずり上げられると豊満な乳房が躍りだした。

「ほほう、見事な巨乳だな。これだけ大きいと何でも扱えそうじゃないか？ さつきは本を挟んでたしな？」

「そんなつ、挟んでません、挟んでませんー！」
「クククク、ならば、この邪魔くさいボンチョを挟んでみるか!!」

涙声になりながら身体を震わせ抗議するフェミナを、裏切るように豊かな胸がユサユサゆれる。

その間へ、魔王は捲り上げていたボンチョを押し込んだ。

「ぎゃああつ！ やめてえ、あううう」

……こんなことお、ひどいですう

「見ろ！ 貴様のおっぱいは大したものだ！ すけべな姫にすけべなオツパイ、最高だな！」

「い、いやあ、見ないで下さい……ううう、こんなの、はずかしいですう……あう、うううう……」

フェミナは自分の痴態に一層顔を赤らめ、水でも浴びせたら蒸発しそうになつていた。

真つ赤になつてモジモジする幼さに相反する巨乳姿が、いやらしさを倍増させて見え嗜虐心を刺激する。

魔王の手が、その見事な巨乳へ伸ばされた。

「ひあつ、ああああ、くっひいいんあうん……ああ……い、いやああー」

「ほう、大した弾力だ、見事な柔らかさだ！」

「いやあああ、やめて、胸はやめて下さあい」

「貴様のおっぱいを揉んでやつてるのをありがたく思え！」

フェミナの胸を乱暴に鷲づかみにし、魔王はギロリと視線で睨みつける。

「ふええん……あ、ううう……あつ、ああん、そんなこと……い、言われてもお……そんなあ……」

羞恥と混乱で、頭の中がガンガンする。これは、夢？ 私は夢を見ているの？

だが、まぎれもなく現実だと示すように、目の前の魔王は痛いほどしつかりフェミナの胸を掴んでいる。魔王の

息が、声が、何もかもが恐ろしい。

「んん？ 貴様、下着をつけていないのか？」

捲り上げられたスカートの下に、ふっさりとした茂みが湿り気を帯びて現れている。

「え？ あ、ああッ!! あつ、あつ、あつ、あ、あああああッ——！」

替えていたはずなのに、すつとんきような声を上げるフェミナの様子に、魔王は彼女が素でパンツをはき忘れていたことを確信した。

「あああ、いやあつ！ きゃあ、いや——ッ！ 見ないで、見ないで、見ちゃだめええ——ッ！」

「ハッ、ククククク、貴様はノーパンのまま外出していたのか！ とんだ露出狂の変態姫だな！」

「ふえええ、ち、違います！ こ、これは上の……その、おっぱいに意識がいつてしまつて……その、その……」

「バ、パンツを忘れたというか……」

真つ赤な顔のまま言い訳をしながら、魔王が、相変わらず説得力がない。

「どこをどう考えたら、そうなるというのだろうか。」

「その、だから胸が気になつて……それを考えていたら、はくのを忘れてしまっただけですう」

まったく、この姫は変わつていて面白いと魔王は思った。
本当に、どこに胸が気になるとノーパンを忘れる奴がいるかと思うのだが、いたつて本人は真剣だから笑つてしま

う。

「あうう、う……本当に違うんですう」

その大ボケぶりに乗つて遊ぶのも、退屈しぬぎにはなるだろう。

濡れて光る脚の付け根の奥は、しつくりと起き上がつているのがわかる。

更に、その後ろから獣人族の証の毛並みのいい尻尾がふるふる震えていた。だが、それは悪戯してほしげに震えているようにも見える。

「きゃん、あん、あつ、本つ！」

魔王はフェミナの手元から奪い取つた本を、バリバリと勢いよく破り捨てると、ニヤリと笑つて傲慢に言い放つた。

「これから俺様が、幻想すら上回る官能の極みを教えてやろう」

素早く描き出された魔法陣から妖しい光が発し、その中心から呼び寄せられたものが実体化していく。

腸の中身を彷彿させるピンク色をした肉質の触手達が、透明の液を滴らせ不気味に蠢いていた。

「な、に……それ……あ、うううう」

「ククククク、どうだ、可愛いだろう？ こいつらは俺様が、城の地下に飼つてあるペットよ。250年ぶりに目覚めて、こいつらも喜んでる」

「ひつ、いや、そんな気持ち悪いのいやあ……あああ……近づけないでえ」
触手達が大量に蠢いている菓の光景は、どうも女子供には受けが悪い。
その不気味な姿にフェミナも震え、恐怖に竦みあがつてしまふ。

「さあ味わうがいい！ これが幻想を超えた、官能の極みへの入り口よ！」

その言葉と同時に背中を押された身体は、倒れ込むように菓の中心へと落下した。

「きゃあああああああ！ い、いやあああつ！ いやつ、いやつ、いやあああああああ——ッ！」

あつという間に、大量の触手達が群がるように包み込んでいく。

「クハ、クハハハハハハハハハハ！ そんなに嫌がらなくてもよいだろうこやつらが官能の極みを、教えてくれるのだぞ！」

「ひいひいひい、いや、いや、いやああーッ！」

菓の中心で半狂乱になつてもがくフェミナには、魔王の声はまったく聞こえていなかった。

触手を掻き分け振り払い、菓から這い出ようと必死にもがく。

「あああ、あ、やだ、やだ、助けてえ！っ！ ひいひい！ いやあああ、やつ、気持ち悪いっ！」

触手達は互いに絡みあい、グネグネともつれて這い回る巨大なミミズ団子か、イソギンチャクのように、一見しただけでは果穴の底がどこにあるかさ

え見当もつかない生物だった。

「いやつ、もう、いやあ、放して、いやだつたら……あううう、やだ、やだ放して、放してっばー」

触手達は、新しい仲間を歓迎するかのように絡みつき這い回り、その身体

を吟味し始めた。

「はひつ、あわわわわ……ひい……い、いやああ……あううう……あ……い、いやあああ——っ！」

腕、脚、胸、身体のあらゆる場所に、大小様々の触手達が絡みつき、撫で上げるかのように擦り覆いつくす。

「あうう、やだあ……あぶう……あええ……えうん……ああ、あ、も、やめて、やめてええ——っ！」

感覚全てが、触手に埋め尽くされていく。

「うつくううつ、ううう、う……くつ、放して、あううう……い、いやあ……放して……くううつ、放して——っ！」

最早、触手の巢はぬめる沼のようなもので、フェミナの全身を捕らえ、四肢の動きを重くする。

「ああ、あ、やめて……はひん、あ、あ、あ、くひ……あ、そんなとこいや、いやあ——っ！」

無数の蠢く触手は抗うフェミナに絡みつき、その性感帯を探り始めていた。「はひいん、いやいや、はなして、いやよおー。いやあ……あうう……やだあつ……ひいつ、い、いやあ、そ

んなどころダメエーツ！」

一本の触手がフェミナの脚に絡みつき、その奥の秘所に潜り込もうとする。「あ、あああ、い、いやつ、やだつ、やめてっ！ このつ、やだやだ、やだ

——っ！ はひん……あうう……やめて、このつ、いやよバカ！」

剥がそうとするのだが、滑って思うようにいかない。

「くうう……あ、やめて、やめなさい……あうん……あああ、んくう、こつ、この、やめて、いや、いやだつてば、や、やんん……あつ……やだあ！」

表面にイボがあるその触手は、恥裂を擦るようになぞりあげニユルニユルと逃げるのだ。

「あああ、あ……あ……あ……あ……あ、あ、くうう……ひ、あああ、やだ、や、やめて……はひ、はひん」

「クハハハハ、うむ、よい眺めだぞ！」

「そんなあ……こんなの、あ、くつ、うう、うう……いやですう。ああああ、そこだめ、だめえ……はうう……う、う……やめてえっ！」

フェミナは自分の手足に絡まる触手を、必死の思いで己が持つ最大の獣人力で引きちぎる。

「いつ、いやよ……くううつ、はつ、はううう、あ、あああ……いやあ、やだ、やだ、やめてえ……ん、んん」

その瞬間は一時的に自由になるのだが、すぐに別の触手が手足に絡んできてしまう。

「やめて、やめて、こんなのいやです……あああああ……くひん、いやあ、触らないで、嫌なのよお、あううう」

「やれやれ、少し、うるさいぞ！ 貴様は、触手達の奉仕に感謝できんのか、んん？」

「ひやああん……いやですう。こんなの、いやなんですう、だつて、だつて

気持ち悪い……ひああん……そ、そんなとこ、いやあ……」

必死の抵抗を嘲笑うかのように、遂にイボ付きの触手がググッと、フェミナの蜜壺を圧迫した。

「くひいん、あ、あああ、やあ……ああ……ひんんん、あん、あくう、あ……い……いやああ」

フェミナの悲鳴に彩られ、あつさり肉びらは割り開かれると、触手が処女穴にヌチヌチと進入する。

「ひううう、あ……ああ、あつ、あつ、やだ、やだ……あああ……や、やめて怖い……あ……やめて……あう……あ……や、や、や——っ！」

「そらつ、もう一息で処女膜が裂けるぞ！」

「やめつ、あ、あ、あつ……押し当てないでえつ！ やだやだ、破れちゃう……ひつ、あわわわわわ……あああ

ああ……私の初めて、ひや、や、や、や」

イボ付き触手がギリギリまで進入しては引き戻る。

「あくううう……う、うう……ああ、あ……あんん……うくう、はううう……あああ……やあんん」

焦らすように進んでは引き抜く処女鬨りに、フェミナは腰をくねくねと前後左右にくねらせ逃げようとする。

「ふああん、んんつ、やだあ！ こんなの、やめて下さい、駄目です、ええん……あああ、困りますう」

触手が鬨る蜜口は蜜が滲みだしていた。「クハハハ、何の音だこれは、んん？ 貴様は、処女を鬨られて感じてるのか？ さすが、すけべなケモノ姫だな！」

「違う、違いますう……あうう、嫌、嫌なの、あ、あ、いやん、やなのにい、違うの、やだあ、違うんですう」

フェミナは触手から少しでも逃れようと、腰を一層くねらせる。

「はううううん……あう、あう……やんやん、いやあん……あああ、も、やだあ、はひいん、や、だめえ——っ！」

その動きが卑猥な踊りとなって、魔王を楽しませているとは思えないらしい。

「ああん、あつ、あつ、いやいや、やめてえん！」

「なるほどな、クハハハハ！ 貴様は触手に処女を捧げたいわけだな！」

「はひん、あああああ、ひつ、ひんんん……あう、や、違い、あああ、違います……くひい……や、やめてえ」

触手はイボの先端を敏感な花芯の突起に擦りつけて、フェミナを強制的に発情させていく。

「くひいん、あああ、や、やだあ、そこ擦っちゃいやああん、やめてえん、はひはひ、ああん、そこばっかりい」

刺激を受けて、蜜壺から大量の愛液が太腿に流れ出る。

「ひわわわ、いやらあ、やめてえ……そこはだめれすう……い、いやあ……あうう、やだやだ、おかしくなるう」

ザワザワと別な触手が、尻尾を絡めとりながら、その付け根に潜む尻穴へ進入を開始した。

「はきやあん、や、やだ！ そこは、お尻ツッ！ だめ！ だめっ！ お尻だめーッ！」

ブルブルとお尻に力込めて、大きな触手の進入を拒んだものの、細い触手が皺をなぞるように次々と進入してしまふ。

「ひいひい、ややや、やだあ、だめだめえーっ！ そんなところに、ひああっ、ま、前にもッ！ クヒン、クリちゃん、ひぎい——ん」

幾本もの触手が、フェミナの下半身の全てを攻略しに向かっていた。

そのことに気づいたものの、無数の触手に押さえこまれ足掻いても自由がきかない。

「ひぐう、あ、ひい、いや、いやあ……やめ、い、いぎいっ！ くあん、あ、い痛ッ！ あああ、いっ痛いーッ！」

花の蜜に誘われるように触手達は鎌首をもたげ、そのまま、ゾワゾワとフェミナの前後の穴へ蠕動運動を繰り返しながら進入し始めていた。

「あ、あ、あくん……い、痛い、く、苦し……ぐ、あああ、も、助けてえ」

すぐに前の穴からは、純潔の証が……蜜液と混ざり赤い泡となつて証明される。

「ひぐう痛い……んくう、ううう、あああ、痛い、痛い動かないでよう」

上下に蠢く。

熱い蜜に潤んだ肉壁は、フェミナの意志とは裏腹に太いイボ付き触手にガツチリ絡みついて収縮する。

「くひいん、んく……やだあ、うう、苦し……きつくて、あ、変になるう」

「ククク、さすがケモノ姫だ！ 触手を千切りそうに締めつけているな！」

「きやはん、な、中、中で触手が……ひい、うううやだあ、あうあああ」

触手を締めつけることで、それ以上の進入を止めはできたものの、かえって激しく中で暴れられる結果になり、フェミナの抵抗はわずかの間しか持たなかった。

「いやああ中で、触手があ……やめて、やめてゲネゲネ動かないで。ひんっ、あああ、や、やら、そんなとこ……あああ、気持ち悪いん……」

更に追い打ちをかけるように、尿道で暴れる触手の刺激は激烈で、頭がおかしくなりそうだった。

「やらあ……変、へん、変ー、おしっこ出るみたいに……ぐーてするのに……あうあう、いやらあ……オシッコ袋の中、いじらないでえ……」

「ククク、最初は痛がったがすぐに慣れ始めたな、まったく、貴様は勉強熱心だな！」

「ふあん、あああ、そんな……きついれすう、あうあう、おああ、壊れそう」

イボ付き触手と何本もの細い触手が絡まりながら直腸を掻き分け進むたびに、尻穴と肉壺を隔てる薄い肉壁がよ

じれ、蜜壺の触手が蠢くのだ。

「はぐうん……おあああ……はうう、あぐう、ああ……やん……あつ、あつ……も、壊れるうううん」

フェミナはもう、息を吐いて緊張をほぐす努力もできず、触手の圧倒的な体積と圧迫に喘ぎ始めるしかなかった。

「きひいん……あくうううう……あん、んんん、ひ、ひ、あひい、いっ！」

「クハハハ、尻をほじられ、肉壺も尿道も、みんな触手にほじられ、感じているのだろう？」

「はひいん、あうあう……くはあ、あぐ、んふうくく、あああ、ひぐう、らめえ、あああ、壊れる、壊れるう」

「壊れるだ？ まだだ、まだよ！ これしきで、壊れてくれるなケモノ姫！ クハハハハハハハ！」

「ひっ、ひっ、くひいん……あああ……らめ……狂う、ああ、狂うん」

触手がざわめき、次の目標へと攻撃を移した。

「きやううん……あああ、やあん、あんな……おっぱい嫌あー、引つ張らないで、あああ、やだあー、おっぱい、感じるから、やだ、やだああああん」

吸盤を持つ触手が乳首に吸いつき、幾つもの触手が双乳に絡みつき揉み搾り始めたのだ。

「あ、おっぱいだめえ、あややや、はひん、痛い、ち、乳首引つ張らないで……あううう、揉んじややん、揉んじややだあー、あひ、あひいんん」

「引つ張るなに、揉むな。オイオイ、

注文が多すぎだぞ！ 少しは、その口を黙らせろ！」

「ふごお……あえ、あ……んぐぐう……あむんん」

魔王の声に反応するように野太い触手の一本が、フェミナの口内を犯しながら進み、喉をくすぐり始めた。

「あぐん……んぐんぐ、ふぐう……んんん……むうん……はむむむ」

眉根を寄せて苦悶に悶えるものの、声は発せられずに鼻腔からうめき声が漏れる。

「はへはへ、いいれす。もつとしてえ……んちゅう、れるれる、はひいん、い、いのおお！」

身体の中に入った触手が、脳髄までも痺れさせるような強烈な感覚で、フェミナを支配していく。

快感が脳髄を痺れさせていくのか、精神が崩れたのか、フェミナはよがり始めていた。

「ほひい、ちゆびび、くぶう、んくく、あんな、ほしいのもつと、いっばい」

処女膜の破瓜、肉壺や尻穴を犯される、そんなレベルではない破滅的な墮落……もう戻れないところまで墮とされていくのだ。

「あぶうん……あああ、あん……ちようらい……みんなもつと、もつと……フェミナに、ちようらい……あああああ……くる……いいい、いいのお……」

「ククク、いいぞ、そのまま痴態をさらけ出せ！ 全てを捨てて、俺様に捧げるのだ！」



ぐもっ…!?

ぐもももああ!!

股があつ!
裂けつ…!!

をさぐり いれろ!

単行本最新刊「縛姫-シバラレヒメ-」
ヒッド出版社より8月6日発売予定!!

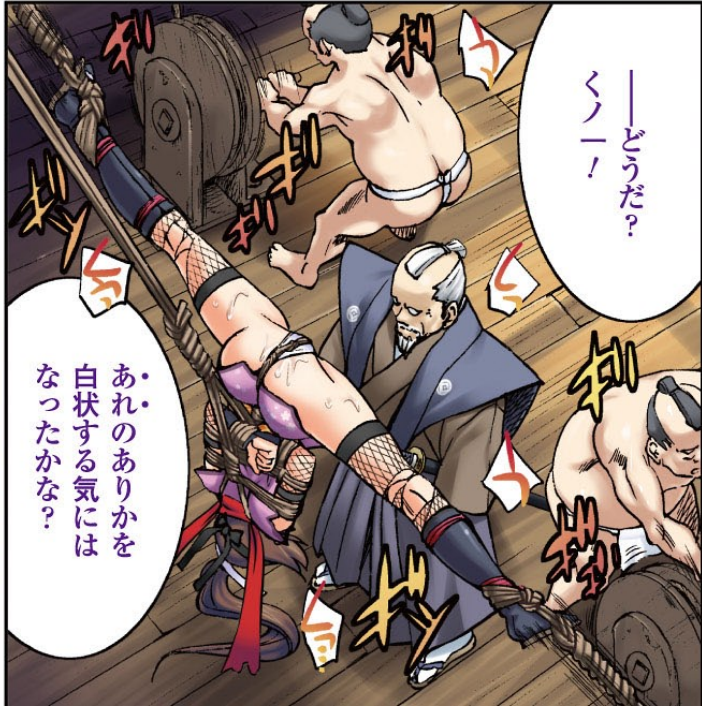
漫画
COMIC

井上よしひさ



—笑わ
せるな…っ!

この程度の責めで
この私が口を
割るとでも…



—どうだ?
くろー!

あれのありかを
白状する気には
なったかな?

ならばこちらの
口に聞いてみる
ことにしよう…

!?

なっ…!!
なにをする!

やめろ!
やめろお!!

—ほお!

これは
興味深い!

まるで蜜が蒸れ
したたるよう
ではないか!!

なるほど…
忍びはいかなる
責め苦にも耐える
というが…

こういう事で
あったか!

苦痛すら快樂と
感じる様調律
された躰…

げに恐ろしき
ものよのお…
忍びとは!

吸うな!
吸うなあ
ああ!!





前回すれ違った戦士さんが…?

カー

すっごい魔法力を感ずるですう

今日は珍しく収穫があったんですねえ!

ズド

めずらしくは余計よ!

でもポロポロだしどんなアイテムだかもわかんないから…

「聖鈴」に関係するかどうかはこれから調べるってとこね

はい

神官のお嬢さん

あなたにはこの像の魔法力影響が強いんじゃないかしら?

あ…ええ

仰るとおりで…あの洞窟から帰る途中で…

ちよつと頭痛が…

聖なる鈴の啼くセカイ

第7話 魅入られる者達

漫画 COMIC ことし 琴瑟

それで
しょうねえ

…よかったら
これ

必要な時が
くるまで
預かるわよ？

えっ？

重要アイテムの
保管もうちでは
仕事の範囲なのよ

ちょ…

そんなこと
言って
あたし達から
奪おうってんじや

な！！

お姉さまに
むかって
なんてことを…っ

こんな程度の像ごとき
お姉さまが欲しが
はすないですう

魔力の欠片も
使えない
人間はこれ
だからっ！！

うっさいわね！
ふっーお宝の心配くらい
誰でもするでしょ！

魔法力を
帯びた像……

また……
「魔術」か……

…あ
クラリスさん

？
どうか
しました？

クラリス……
さん？

お
ま
ま
ま
ま
ま

イカゲル

——この酒場は
明け方少し前に
しばし閉店する…

他の冒険者達が
言っていた通りだな

ク…
クラリスさん

…あの…

あの女店主は
いつ休んで
いるのか
わからない程

常に酒場で
姿を見かけて
いたが——

…ああ
やはりここか
金庫らしき
物があったぞ

クラリスさん
つてば！

やっぱり…
やめましようよ
こんなこと
……ね？

——やめる？

オッ

ほ本当に
やるんですか…？

お前…

自分の兄を
蘇らせたくない
とでも……？

チャ



魔術を使えない
私とお前では
先がない

似合う
似合わないの
問題じゃないんだ

もはや

この程度の
鍵……



そうじゃ……

そういう
意味じゃなくて……
いくら「聖鈴」の
ためとはいえ

盗みなんて……
クラリスさんに
似合わない……

キョ



な……

魔術や
聖魔術の使い手には
悪しき影響が
あるようだが

……っ!?



……これか……

それが私達には
幸いした……



クラリス
さんっ!?



クラリスさん
なんでしょう
これ...っ...

はま
はま
これ...
こんな...熱くて
苦し...

僕の薬で治せ
ますか...?

いや
これは多分
病気の
たぐいじゃ...

いくらお前が
優秀な薬師
でも...

何か得体の
知れない
ものが

No

身体を
走り抜けた...

そんなっ
じゃあ
どうしたら...

この感覚は...

僕...もう
頭ぐるぐるして

あ...っ?

クラリスさんの
香りと柔らかさで
.....

も.....
何も考え
られな...っ...

.....っ!!

ズル
ズル
ズル



クラ…リスさんっ
は……
クラリスさん
かわい…です…

んあ…あつ
待…て

あ……!!

はあ

丸ろ

馬鹿っ

何を
言…て…

あつ♡

待…っ…
それは…!!

はあ…んっ♡

アッ
アッ
アッ



過去にも一度
この感覚は
覚えがある

や…
こころち
やめ…っ…

んあっ♡

わ…
す…
こんなに
とろとろ…

は…
言…う…な…っ

そう
あれは…

呪い………?

昔…
私にかけられた
魔術を解こうと
命を落とした。
この男の兄が…

ああ…



あ……♡

あ……ずっ

……♡

……っあ!

ズ

ズ

ズ

こんな……
身体が……

は……

……あ……あ……あ……あ……♡

だあ……めっ♡

……っは……

きか……な……

……い……っ……!!

ズ

あ……なか……
のみこまれ……
るっ

ん……うう

あ……♡

あ……んっ!!

ズ

ズ

ズ

ピルグリムメイデン

外伝

クリムゾン・レインの受難

前編 ふぁーすと・みっしょん

小説
NOVEL

かりのけい
狩野景

挿絵
ILLUSTRATION

ぽち。

マツドな聖女様が
あとみつく文庫より緊急参戦!
今回の敵は天然ボケの暴走メイド!?



「ピルグリムメイデンI~II」
絶賛発売中!

「せい、いい、いいっ!!」

裂帛の気合いと呼応して刃が喰り、男の攻撃が迫り来る。

大気を切り裂く鋭い刺突を、少女は不敵な笑みを絶やさぬまま、踵に羽根が生えたようなステップでかわした。

紅の尼僧服が翻る。

純白のレースで飾られたアンダースカートが捲れ、ガーターで吊った濃紺のストッキングを惜しげもなく晒す。

「ハッ!!」

軽やかな身のこなしから打って変わっての、弾丸の如き突進。

一瞬にして間合いを詰めると、赤く長い髪を深紅のベールに纏めた修道女は両手に抱えた得物を頭上高く掲げた。

「——!! むう……ッ」

それだけで男が一瞬怯む。

純白に金の十字模様を染めた機体長楕円のガイドバーに沿って、鎖に導かれた無数の刃が並ぶ。

無骨ともいえる形状は無条件に人の恐怖心を煽り立てる。

チェインソー。

2ストロークのガソリンエンジンにて鋸刃を高速回転させ、天高く枝葉を伸ばす大木さえも力任せに切り倒す。

比類なき破壊力を誇る道具。

こんな物を武器として扱うなど、B級ホラー映画の狂人か、それを真似たイカレ頭の殺人者くらいであろう。

まったくもって聖職者が携えるには、余りにも剣呑に過ぎる鉄の塊。

「フンッ!!」

アイアン・メアリーと名付けられた聖具をその重量に任せて振り下ろす。

だが対する修道士もその攻撃は予想済みだったらしい。いや、むしろ最初の突きは少女の攻撃を誘うためのフェイントだったのだろう。

既に後方に飛び退き、間合いを稼いで再度の刺突を繰り出してきた。

チェインソーを空振らせた修道女の胸元。激しい動作にぼむんぼむんと揺れ弾む美麗な乳房が、聖衣を悩ましく隆起させる。

その狭間へと、容赦のない切っ先が突き込まれる。はずだった。

「——なっ!!」

まだ年若い修道士の目前から深紅の姿が消え失せていた。

しかしものものしく恐怖感を煽り立てるチェインソーはそのままの勢いで向かってくる。

「くっ!!」

彼女が攻撃の途中で武器を手放し、足元に滑り込んできたのだと気がついたのは一瞬後。だが戦いの中ではその一瞬が勝敗を左右する。

修道服もアンダースカートも捲れかえって、白いショーツが丸見えになっていた。しかしそれよりも鮮やかな緑の瞳に目が引き寄せられる。

ガツン、と彼女の武器が粗雑に床に激突すると同時に、編み上げのブーツが修道士の足を払う。

「おわああっ!!」

体勢を崩したところに、伸び上がった

てきた紅衣の少女が、勢いのまま喉笛を鷲掴みにする。全体重をかけて修道士を後頭部から地面に叩きつけた。

「あがつ!!」

喉輪に息を詰まらせ、脳震盪に目を回して無防備な仰向けを晒す。

その年若い修道士の腹を、尼僧の長靴が駄目押しに踏みつけた。

勝負あった。全く相手にならず修道士は戦意を喪失し、喉のダメージに噎せ続ける。

その様を薄笑いで見下ろし、深紅の修道女は起き上がりざまに拾い上げたチェインソーのスターターを引く。

ドウウンッ! ギュイイ——ンッ!!

模擬戦であるため停止させられていたエンジンの重たい唸りが、すぐにスロットル全開のヒステリックな咆哮へと猛り狂った。

「なっ!! シ、シスター・レイン! 降参です、うわああああつ!!」

助けを乞う声を無視して、回転刃が振り下ろされた。

首をひねってよけた地面をガガガッと掘り返し、首筋へと迫る。

恐怖に張り上げた彼の悲鳴が、周りで模擬戦に勤しむ他の修道女たちの注意を引いた。

武器による攻撃は寸止め制限された、あくまでも相手を傷つけない戦闘訓練にあるまじき光景。

修道服を纏う少女たちの顔が「またか」としかめられた。

「おやめなさいっ、シスター・レイン!」

何人かが憤りを隠そうともせず各々の武器を手に、深紅の少女へと向かってきた。傲岸不遜なレインの顔が、にんまりと不敵な笑みを浮かべ同僚たちを挑発する。

修道士の頬ギリギリにまで迫っていた鋸刃が引き抜かれ、向かい来る尼僧服たちへと標的を変えた。その時、

ブオンッ! と重々しい風圧が塊のような闘気を備えて真横から襲い来た。

「ぬうっ!!」

本能的に深紅の修道女が、チェインソーを振り回しその攻撃を受け止めた。

ゴイイインッ!

鋼と鋼がぶつかりあい、火花が飛び散る。

レインが自ら跳んで衝撃を殺さねば、アイアン・メアリーは弾き飛ばされ、彼女自身も大地に叩き伏せられていた。長柄をせり出させる、巨大な戦斧の一撃。

どうか体勢を立て直し、反撃を試みようとする紅衣娘の喉元に、短い柄の手斧が既に突きつけられている。

「ババア……」

悔しげに吹き見上げる。その鋭い緑眼を圧倒的な迫力で見下ろす金色の瞳。黒紫の尼僧服を纏う巨体は浅黒い肌茶褐色の縮毛を引つ詰めて頭の後ろで纏め、ベールの下に納める。

美しいと言うより凛々しいと賞賛した方が似つかわしい精悍な顔立ち。

美しいと言うより凛々しいと賞賛した方が似つかわしい精悍な顔立ち。

エリザベート・ボーデン。

全ての巡礼聖女たちを纏める異端審問局局長。かつては不死の三真祖、漆黒、白銀、銀翼。全てと交戦し互角に渡りあつた猛者である。洗礼名をブラック・ローズという。

「また懺悔室にぶちこまれたいか、クリムゾン・レイン」

審判の如く低く響き渡る声に、憤っていた修道女たちがそらみたことかとほくそ笑み、各々の訓練に戻る。

「あんな弱つちい連中とじゃ訓練にならない」

その同僚たちの背中を、紅衣の少女が挑発した。だからお前ら全員でかかつてこいとはかりに。

修道女たちが一斉に気色ばむ。

「お前たちは訓練を続ける。休憩時間はまだのはずだぞ」

が、エリザベートの一瞥に仕方なく一礼を返すと訓練を再開した。

「チツ、まじめっこどもが。ふん、でも、ババアとガチンコも悪くないか」

その様を不満そうに舌打ちし、ならばいつそ、いま力負けさせられたばかりの局長を煽ろうと、レインの生意気な瞳が企みを宿す。

「誰がババアだ、小便臭い小娘が。来い、シスター・レイン。仕事だ」

呆果てた溜め息を一つ、エリザベートがぶつきらばうに告げる。

「仕事！ それなら早く言いつてば不死者を切り刻めるなら、あたしはいつでも大歓迎だから」

異端審問局巡礼聖女、クリムゾン・レインの美貌に喜悅の笑みが浮かんだ。

人の血肉を喰らい老いず死なず永遠を生きる不死者。人に在らざる呪わしき存在を滅ぼす方法は、唯一一つ。

穢れなき処女の血液を奴らの体内に注ぎ込むことである。

不死の蔓延る地へと赴き戦う、異性との交わりを禁じられた純潔の乙女たち。彼女たちがこそが、忌まわしき人類の敵を滅するため教皇庁が設立した異端審問局の主戦力、巡礼聖女であつた。

「で、そいつを滅してくればいいわけね、いつものように」

十字架に磔にされた救世主の壁飾り以外、装飾的な物が一切ない。実用第一に整理された殺風景な空間。

エリザベートの執務室で任務の内容を聞き、レインはまるで近所のマーケットにミルクとパンでも買いに行くかのような調子で言った。

異端審問局始まって以来の問題児。作戦を共にすれば、勝手な行動と無謀な戦いぶりで味方を窮地に陥れる。

口を開けば憎まれ口と悪態の雨あられで、気の弱い者を泣き怯えさせ、気の強い者を憤慨させる。

懺悔室の常連。協調性皆無。戦闘狂。悪評を連ねればきりがない。

そんな彼女だが、不死者を討滅する腕はずば抜けていた。倒した数だけではなく、数チームが合同で臨んで返り

討ちにされた強敵さえも単独で打ち倒した実力を持つ。

孤高にして無敵を誇る巡礼聖女。クリムゾン・レイン。

そんな彼女に与えられた任務とは。ローマ郊外の小さな町で、数週間前突然に外部との交流が途絶えたという偵察に送り込んだ修道士部隊も、潜入直後から連絡が途絶した。

不死者が教皇庁からさほど遠くもない地に出現したと思しい状況。

現地に赴き探索。敵を発見した場合、即座に殲滅せよ。以上であつた。

詳細を聞くなり早速部屋を後にしようとするレインに、黒薔薇色の僧衣を纏う女丈夫が言葉が続けた。

「シスター・アリアはまたお前と組まれるくらいなら、むしろ不死者に堕ちてお前を喰らつてやりたいそうだ」

「ハア!!」

アリアアアアア誰だっけ、と数秒考え、ああ、前回の任務で戦いの最中びびり泣きわめいて邪魔してくれた、万聖節のカボチャよりも間抜けなツラした無能女かと思ひ出す。

それが任務に何か関係あるのかとエメラド色の眼を睨めて訝しむ。

「なので今回は他のシスターと行つてもらう」

「ハアア!!」

もう一度不機嫌そうに、レインは首を傾げた。単独任務の方が誰にも邪魔されず効率的に不死者をぶつ殺せる。パートナーなんか足手纏いにしかなら

ない。信じられるのは自分だけだ。もし例外があるとするれば……。

(あたしの背中を任せられるのは、彼女だけ)

いまはもうこの場にいない、青紫の髪をなびかせる射手の面影を脳裏に浮かべた。

「役立たずのお荷物押しつけられても迷惑なだけだから。あたし一人で十分」

回想もつかの間、迷惑そうな眼差しをエリザベートにぶつける。

再び背を向け出て行こうとした時、局長室の分厚いドアをノックする者があつた。

うらかな六月の日差しが降り注ぐ。心地よい風に草揺れる丘から一望する町並みを、何か怪しげな薄桃色の霧が包み込んでいく。

既に近隣でも噂が広まっていた。町に入った者は二度と帰つてこない。

赤い僧衣の腰に手を添え、レインは深い溜め息を吐いた。これから乗り込もうとしている、呪われた地に対してではない。傍らで呑気にビニールシートを広げている大馬鹿女に対してだ。

「お弁当の準備ができましたよ、シスター・レイン」 腹が減つては高楊枝ですから乗り込む前にお食事いたしましよ」

パートナーなんかいらぬのに無理やり押しつけられた、まだ教練中の半人前。見習い巡礼聖女。

濃紺の修道服を着る乳デカ女。

著者近況を書き上げるまでトイレにいかないぜ！と自らに試験を課したのですが、どのネタにしようかなかなか決められなくて……。くふおおおおっ、ほ、膀胱があああああっ!! もうツツ!! あ……………

亜麻色の長い髪。
何の悩みもなさそうな笑顔。
能天気な絵に描いたような、あたしが一番嫌いなタイプ。
洗礼名フラクソン・エッジ。
本名はジュリエッタ・マッシナとかいうらしい。
「修道院では『シエフ』と呼ばれていたわたしが、腕によりをかけて作り出したからあ、たーんと召し上がれ♪」
ジューバコとかいう、妙にでかいラシチボックスを開ける。
「おわっ」
その中に詰まっていた物にちよつと面食らった。サイコロ状にカットされたステーキが一分の隙もなくぎっしり。さらに二日目にはフランスパンが丸々一本、無理やり四角い器の形に押し込められ、不自然にテカテカした表面に色取り取りの小さな粒が振りかけられている。
そして三段目。でろでろに伸びきったパスタ。これも妙にツヤツヤと光沢を帯びていた。かかっているミートソースも異様なほど赤みが強い。
バランス悪っ！ 野菜がないじゃない!! そんなツコミが脳裏を過ぎる。それ以前に何というか、甚だしく食欲を減退させる見た目の料理だった。
町のビストロで出てきたら、間違いなく店ごと叩き壊されるレベル。
まあそれでも小腹がすいていたのは確かだ。ゴタゴタしている間に昼食を取り損ねていた。

「冷めても美味しいように一時間かけてるんですよ」
叱り飛ばすのをひとまずこらえる。自信満々にジュリエッタが勧める地雷臭たつぷりな料理の中で、唯一安全そうなサイコロステーキを行儀悪く手掴みで口に運んでみる。
「ふおっ！ こ、これは……」
「隠し味に、メイブルシロップとラズベリージャムを加えてみたんですよ」
「噛み締めた途端、壮絶な甘みと酸味が脳天を直撃し、レインの意識を一瞬遠のかせた。」
「パスタ生地には甘くて美味しい上質のお砂糖をたつぷり練り込んであります。ソースは苺をメイブルシロップでコトコト煮込んで、砕いたチョコレットのチツプを散らしてみました」
挽き肉つぼい黒いのはそれかよ!!
愕然とするレインの鼻孔に、そよ風が料理の香りを運ぶ。
胸が焼けるようにむかついた。
吐き気が込み上げる。
「パンは中をくり抜いて、カスタードクリームをたつぷり詰めてみたんですよ。でもそれだけで全然甘さが足りなくて美味しくないんで、上から蜂蜜をかけてコンペイトウを散らして、はわあっ！ なにをっ!!」
「くそまずいわあああっ!!」
このジュリエッタという修道女は、甘ければ美味しいという味覚の持ち主らしい。
深紅の巡礼聖女は全力で黒塗りの重

箱を蹴り飛ばしていた。
零れたパンくずとパスタに藪から飛び出してきた野ネズミが食らいつくが、その途端に全身を痙攣させ泡を吹いてひっくり返る。
「あああ〜」
生態系を破壊しかねない危険料理をぶちまける。晴れ渡った空に大きな弧を描いて飛び去ってゆく重箱へと手を伸ばし、ジュリエッタが嘆く。
「ふん」
その様を忌々しく睨めつけ、口中に残る最悪な後味に顔をしかめると、レインは足早に不穏な気配に包まれた町へと向かった。
桃色の霞に阻まれ、遠くまで見渡すことができない。人の気配が全く感じられない閑散とした通りを、警戒を強めそろそろと進み行く。
「や、やつぱりおかしいですわこの町。それに、何だか……」
傍らのジュリエッタが不安げに声を震わせた。静まりかえった町中にその声が思いの外大きく響く。
じろりと睨めつけると、彼女自身驚いて大きく目を見開き口元を両手で覆っている。
小さく舌打ちし、レインは頭の中で見習い巡礼聖女の言葉を受け継ぐ。
（そう、それに何だか……）
体調が変なことになっていた。この程度で緊張するほどヤワではないはずなのに、心拍数が高まり気が高ぶって

いる。気温が高いわけでもないのに、身体が火照り修道服の下でじつとりと汗ばみ始めた。
毒物ではないことは潜前に確かめた。それでも甘つたるい香りのする霞の影響であることは間違いない。下腹の奥に疼きが生じて、尿意に似たもどかしさが心を落ち着かなくさせる。
（この感じ、何だか、あの時に）
生理前の悶々とした感覚に似ていると思いつながら町の中心へ向かう。甘く脳裏をぼやけさせる霞が増す。飲食店が並ぶ一角へと入り込んだ。
『メイド喫茶☆あんでっど』
きらびやかな看板が視界に飛び込んできた。丸っこい字体で書かれた店名の横では、可愛らしくデフォルメされた少女のイラストが、にっこり笑いかけていた。
古風な町並みに壮絶なほど場違いな店。そしてこれ以上ないほどそのまんな店名に、レインはがっくりとへたり込んだ。
「シ、シスター・レイン！ ひよつとしたら、あれこそがこの町を襲った不死者の居所なのではない!!」
ひよつとしなくても確実にそうだろう。虚脱感が甚だしい。手足が萎えて立ち上がるのも億劫だ。
いっそ、傍らで何だかやたらと気負っているジュリエッタに丸投げしてとつと帰っちゃおうかと思う。
「はあ……。とりあえず中に入る」
「はいっ!!」

そんなわけにもいかず気力を奮い立たせ、レインは新米巡礼聖女に入り口のドアを開けるよう命じた。

まあ何もないだろうとは経験と勘で分かるが、万が一の場合にはこの間抜けが引つかかるだけだ。

そんな酷いことを深紅の修道女が考えているとは夢にも思わぬ様子で、ジュリエッタは馬鹿正直にノブを回した。そつと少しだけ開けて隙間から中を窺うとか、むしろ力任せに蹴り開け一気に突入するとかではなく、普通に開けちゃう警戒心のなさがすごい。

もしかしたらこの新米、大物か？
そんなわけない。単なる大間抜けだ。チリンチリンと軽やかに来客を告げるベルが鳴つちやつてる。なのに気にもしない。戦闘訓練で何習ったんだ？

「ごめんくださいーい」
挨拶しやがった。敵地に乗り込むのに。真正銘救いようのない馬鹿だ。背中ら装備したチェーンソーに手を伸ばし緊急に備える。

「お帰りなさいませー、お嬢さまー」
だがそれに劣らぬ能天気さで、舌つ足らずの声が答えた。

ジュリエッタの背中越しに警戒しつつ覗き込むと、少女が一人エプロンの前で行儀よく手を揃え三十五度の、非の打ち所がない完璧なお辞儀で出迎えていた。

ぼつちやりとした丸い輪郭の人好きがする顔立ち、人間を喰らう怪物とは思えぬ愛くるしさだ。

ピンクのセミロングの髪に、白いヘッドドレスを飾る。

だが愛想よく笑みを浮かべた糸のようには目に細い眼が見開かれると、そこには血のように赤い瞳が暗い輝きを宿す。

唇が綻ぶと、鋭く尖った犬歯を覗く。老いず、死なず、人の血肉を喰らう。闇に生きる不死者の証。

その呪われし者の退廃を微塵も感じさせぬ肉感的な身体を包むのは、紛うことない、黒を基調としたフリルとレースでたつぷりなメイド服。

しかも胸元は釣り鐘型の見事な美巨乳がいまにも弾け出てきそうなほど大胆に開けられ、エプロンを備えたスカートは、さりげない身動きにもショーツがちらちらと覗き見えるほど短い。

「不死……者!!」
「はーい、わたくし、漆黒、様のご命令で、こちらで冥土喫茶☆あんでつどを営むことになりました、ヨハンナ・クリューガーと申します」

欧州に版図を広げつつある不死の真祖の、物憂げな顔が思い浮かぶ。

(だめだ、メイド喫茶とか全然結びつかない……)

とはいえこの女が呪わしき人類の敵であることは変わりない。

事実、一段と濃度を増してきた桃色の霧に、身体の火照りが尋常ではなくなってきた。早くしなければ戦闘に支障を来すだろう。

細鎖で背負ったチェーンソーを素早く構え緑の瞳に闘気を漲らせる。

「冥土喫茶☆あんでつどなのですー」
そのレインへとヨハンナは拍子抜けするような笑顔でもう一度店名を告げる。

「あの、冥土喫茶、あんでつど……」
「はあっ!!」
「はて……？」

きよとんとする巡礼聖女たちに、もう一度店名を告げかけ、不安げに顔を曇らせる。

「あ、あの、不死者のわたくしがメイド姿でご奉仕する店と言うことで、メイドと冥土をかけてみたのですが、面白くなかったでしょうか？」

「……」
面白いかそれ以前の問題だ。さっぱり意味が分かんねえ。しかもネタの説明とか最低。

可哀想な子を見る目でレインが絶句している。

「ぶつ。なるほど、メ、メイドと冥土も、店名があんでつど、つて……。プーッ。くつくつく……うぶつ」

隣でジュリエッタが笑いに身を震わせていた。ツボに入ったらしく苦しげに噎せ返つたりする。

深紅の少女がジト眼になる中、不死者メイドの顔がぱっと晴れ渡った。

「……」
問屋巡礼聖女クリムゾン・レイン。不死者は全て滅する!!

絡んだら負け。
ドゥオルルル——ンッ!

アイアン・メアリーのリコイルスターを勢いよく引き、エンジンを起こさせる。

握り手に内蔵した採血機により、処女の血を回転刃へと送り込む不死者殲滅のチェーンソー。

突進の構えに腰を落としながら、傍らのパートナーを横目に確かめる。当たりにしているのではない。未熟な腕前で邪魔されたくないからだ。

お前はとりあえず引つ込んでろと声をかけようとして、レインは我が目を疑った。

「あああ……、は、あああ……」
ほんのいままでクソ寒いギャグに笑い転げていた相方が、半開きになった唇から悩ましの喘ぎを零している。

はち切れんばかりの爆乳を自分から大胆に採みしだしていた。

頭の両脇に三つ編みを垂らした亜麻色の髪を揺らし、柔らかな美貌を切なげに歪ませる。

「お前、何やって……」
尼僧服の生地につくくり浮き立った乳首を入差し指でこねこねと弄り潰し、背中を打ち震わせる様に見入ってしまった。

「あ、あふ……しすたあ・れいんッ。な、なんだか、身体、変です。弄ったら、止まらなく……はあああッ!!」

指をめり込ませて両房を採み捻り、見習い聖女は激しい刺激に顔をしかめて声を高ぶらせる。軽くイッてしまつたらしくへつぱり腰でよろめき、もじ

もじと腿をすりあわせた。

肉感的な脚を浮き立たせる尼僧服の股間部分がじつとりと濡れている。

くちゅ……。

「へああっ！」

その部分に指を宛てがい、ジュリエッタは感電したように身震いするとその場にへたり込んでしまった。

放心した顔にだらしのない笑みを浮かべ、それでも指を止められず乳房と股ぐらを弄くり続ける。

「ばかあ、やめろお……おあっ!!」

浮乱な行為を繰り返す後輩を怒鳴りつけようとした声に妙な媚が生じていた。

(く……、なに、これ……)

唐突に込み上げてくる衝動に戸惑う。手の中で頼もしくエンジン音を奏でる聖具アイアン・メアリー。

その重々しい振動が、たまらなく身体を震わせる。

(どう、して? こんな、いつも)

わけが分からない。これまでほとんど意識したことのない響きが、いまはやけに気になって仕方がない。

ブルブルと掌から全身へと広がる痺れに思わず心奪われぼんやりとした。

(これを……)

ふと浮かんだ想像に喉が鳴った。

(な、なにをしよう……、あたし。そんな、こと……ばかな……)

戦いを始めようとしているのに、あり得ない。だが一度思い浮かべた妄想が、脳裏から離れない。

(ア、アイアン・メアリーを、……だなんて!!)

馬鹿なことをしようとしている。止めなくてはと心は焦っていた。

けれど身体が止まってくれない。

「く、あああああっ!! だめ……ッ」

ぼやける眼を見開き俯く。その視線の先で、両手が理性の制御を離れた。

敵に刃を突きつけていたはずのチェインソー。その激しく振動する機体を股間へギュッと押し当てた。

「イひああっ!!」

ふわんと意識が浮き立ちそうになる。痺れるような快感が股ぐらから迫り上がって全身を包み込んだ。

「あ、ああああああ、はああっ!!」

恥骨からダイレクトに下腹部が揺さぶられ子宮を痺れさせた。しかも使い慣れた武器だけに指先はスロットルを自在に操り刺激に緩急をつける。

「う、そ、あああつ、イイイッ!!」

股ぐらだけではなく激しい振動は、形のよい乳房までもぶるぶると震わせて尼僧服の裏地との擦れあいこそばゆい心地よさを生んだ。

いやそれどころか全身の肌が、甘美な震えに甘い官能を呼び起こされる。

「くうそおっ!!」

このままではチェーンソーオナニーでイキまわってしまう。もっと快楽を味わっていたい誘惑を必死にこらえて、レインは武器を手放した。

「なに、した……この不死者ッ」
甘い喘ぎを押し殺しヨハンナを睨む。

屈託のない笑みが返ってきた。

「はい。ご主人様たちに心地よく過ごしていただけるのがメイドの喜びですから。わたくしが、漆黒様の眷属にさせていただいた時に、この、ラブ・ド

ライブの能力を授かりました」

ヨハンナが嬉しそうにはしゃぐと、淫靡な肉感の身体からむわんと甘ったるい芳香が溢れかえる。

「く、ふあ! は、ンンンああ」
意識がふわんと浮き立ったと思つたら、レインは我慢しようもなく自分で乳房を捏ね回していた。

傍らでもジュリエッタが、もどかし

いとばかりに修道服を破って生乳を直に採み、よがり声を響かせる。

(桃色の、濡ッ、こいつの、能力。あ、うぐう……手え、止められないっ!)

処女の血液によつて不死者を滅する巡礼聖女にとつて、性交は戦術を失うことを意味する。

そのため発情を催させる能力の敵とはいままで何度も遭遇したが、ヨハンナは桁違いだった。

意思の力が全く及ばない。肉体が否応なしに快楽を求めて動いてしまう。(なめた、真似を……ッ! あうっ)

自分で採む乳房の熱い甘美に表情が呆けて啜り泣くような嬌声を零す。

「お城でも皆さんに悦んでいただけなのですが、何故か、漆黒様にはお気に召していただけなくて……。こちら

でお店を開くように命じられたのです」

この強烈な催淫効果に、おそろくは真祖の居城に勤める不死者全員が骨抜きにされたに違いない。

「ですがこの町の皆様は、わたくしのご奉仕をお気に召して下さったよう嬉しいのです。おや、皆様そろそろいらつしやる頃ですね」

よく見ればアンティークで飾られた品のよい店内。壁にかけられた鳩時計が三度鳴いて時を告げる。

間を置かずして、軽やかなベルを鳴らしてドアが開かれ、ざわざわと大勢の者たちが入ってきた。

皆、一様に瞳が血の色に赤く濁り、口を開けば犬歯が鋭く尖っている。

ヨハンナ・クリューガーに喰らわれ不死者と化した町の者たちに違いない。

「お帰りなさいませ、ご主人様方」

その彼らに向かって、メイド不死者は恭しく頭を垂れた。

関係的には人々を不死にしたヨハンナが主であり、彼らの方が従になるはずだが、ここメイド喫茶ではそういうものなのだろう。

それに主が複数というのも変な話だが、それもそういうものなのだろう。

ほんわかと癒やし系の笑顔を振りまく不死者メイドに、客たちは既に情欲で紅潮した顔をさらにだらしなく間延びさせた。

「ヨハンナちゃん、今日もきちゃったよ。いっぱいご奉仕してね」

「今日のメイド服も一段とエッチで似

合ってますぞ」

「あれ、この子たち、新しく入った娘？
シスターの格好したメイドかあ」

年齢身なり様々な客たちは迎え出た
メイドをちやほやすると、続いて床に
へたり込み自慰に耽る二名の巡礼聖女
に興味を抱いた。

(メイド……だとおつ！ 豚みたいなの
ツラした男共がッ、見るなッ、あたし
を!! な、生意気……ッ……)

オナニーしてる。だのエッチな身体
だ、などと呟かれ恥辱に唇を噛むがや
はり敏感部をまさぐる手は止められな
い。赤らむ目で睨みつけるが逆効果。
気の強そうな美貌に男共からほく、と
感嘆の溜め息が上がって益々羞恥を煽
る。

じゅわんと股ぐらに熱い迸りが零れ
出る。その感触を意識した瞬間。

「ほわっ！ はっ、ああーっ!!」

アングラスカードを捲り上げて股ぐ
らに指を押し当てていた。

脳天が真っ白に染まった。落雷のよ
うな刺激に、膝立ちで尻を浮かせビク
ッ、ビクンと、背筋を痙攣させる。

(こんな、豚男どもにッ、見られてる
前で、んあは……たっぷり、汁……う)
指先にねっとり絡みつく愛液の多さ
と熱さに自分自身で驚く。

男共が凝視しているのに、濡れたシ
ョーツをくちゅ、ぐちゅと掻き回し
その下の肉褌が蠢く甘美に細い喘ぎを
迸らせる。

「ひあ、お尻い、変になりましたゆ」

隣では負けじとジュリエッタも犬の

ように這いつくばり、尼僧服から半ば
溢れた乳房を床の絨毯に擦りつけなが
ら、高々と突き上げた尻房を両手でぐ
ねぐねと捏ね回していた。

(だらし、ない、半人前めえッ)

軽蔑の眼差しを向けるが、レインの
状況も大差ない。取り囲む男たちの視
線に全身を舐め回される感触が、熱烈
な愛撫のように肌を疼かせる。

(く……うああ、見る、なあああッ)

このままで視線だけでイッてしま
いそう。快感に意識を保っているの
が困難になってきた。ぼやけた理性で
必死に打開策を講じていると、

「おや、シスター・レインじゃないで
すか。あんまりだらしのない顔でオナニ
ーしてるから、見間違えましたよ」

いきなり名を呼ばれ心臓が止まりそ
うになる。知りあい？ 誰？ こんな
みつともない所を見られたなんて!!

恐る恐る顔を見ると、黒い僧服に
身を包んだ修道士の一団が、下衆な笑
みをニヤニヤ浮かべ進み出てきた。

「お前……たちはっ!!」

処女でなくてはならないという条件
に加え、並外れた戦用能力と不屈の精
神力が要求される巡礼聖女の人数は決
して多くない。

そのため殲滅を目的としない任務や
数が必要とされる作戦用に、異端審問
局は男性の修道士部隊を組織していた。
怪異の状況を探るため送り込まれた
きり連絡が途絶えたという捜査チーム。

それが彼らなのだろう。

戦闘訓練の時に手合わせして、こっ
びどく叩きのめしてやった顔がいくつ
もある。

そして当然ながら彼らもまた赤い瞳
と鋭い犬歯を持つ不死者の下僕へと成
り下がっていた。

「それにしても、あの強いシスター・
レインがこんなエッチだったなんて意
外だな。おっぱい綺麗な形してますね」

当然だが向こうもしつかりと覚えて
いた。全然笑っていない目で挑発的に
見つめながらべったりへたり込んだレ
インの前にしゃがんでくると、おもむ
ろに空いている方の乳房を採んだ。

「汚い手でえ、触るなァンッ!!」
怒鳴りつけたつもりが鼻にかかった
嬌声にしかならない。

「可愛い声ですね。いつもこんなに大
人しくて色っぽければいいのに」

誰が男に媚びるようなみつともない
真似をと睨んだのに、瞳を潤ませた誘
う眼差しとなつて彼らを喜ばせる。

(こんな奴らに、おっぱい、触られて
……。気持ち悪……イイ……うう)

片方の乳房を自分で弄る動きに合わ
せて指をめり込ませてくる修道士の手
を払いのけるどころか、身体は益々胸
を突き出しなが甘美に悶える。

「はう、らめ、だけど、いい……お乳
たまらないです……ふあはあああッ」
その様子に当てられたのか、ジュリ
エッタにも数人の男が群がって、愛撫
に甘い声を上げさせている。

「あらら、ご主人様たち、今日はお
茶もケーキも召し上がらず、こんな
ああ、ヨハンナ、いっぱいご奉仕しま
すから。何なりとお申しつけを」

彼らを発情に陥れた張本人も、メイ
ド服をまさぐられ嬉しそうだ。

「く、う、調子に乗りやがって……、
お前たち、全員ッ切り刻んで……へあ」

後ろから抱きついてくる他の修道士
に撫でられた。正気なら鳥肌ものなの
に、心地よい熱波に子宮をときめかさ
れ、自分からどうぞと尻を迫り出す。

これでは男に媚びるしか能のない、
平和ボケした馬鹿女と何ら変わらない。

群青のストッキングを下ろされ、太
腿を直に撫でられると下腹が大きく疼
いて、股間を弄る指先にまたしてもた
っぷりの蜜が溢れてくる。

悔しさに唇を噛み締め、体内で荒れ
狂う快楽に身を縮こまらせ耐える。そ
んな巡礼聖女を好きにできる喜びに修
道士たちの股間が尋常ではなく盛り上
がっていた。

それを物欲しげな眼差しで、じつと
見つめてしまっていた。

「おお、気高い巡礼聖女様が俺のペニ
スに興味津々のご様子だ」

指摘され、心臓が跳ね上がる。顔を
背け、冗談言うなど修道士を睨む。

だが実際には、恥辱に赤らんだ顔を
前のめりに突き出して、ズボンから引
つ張り出される赤黒い勃起肉を凝視し
ていた。

(男の……。汚い。嫌な、かた……。ち)



ルピィ、来日

ジャポン初来日



怨霊退散!!

ふたご巫女
VS パーサス
姉妹姫♥

人物紹介

謎の行き倒れ

戦利品獲得



如月珠音
如月社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の器に憑かれやすい。



さで…
帰ろ…



こちら秋葉原電気街

あーっもう
疲れたア!



如月鈴音
如月社の双子巫女の妹。霊力は弱いがしっかり者の常識人。



?



何で私が
お姉えの友達
代わりに…

こんな
ものを…



ルピイ
ダイアノの自由奔放気ままなお姉様。エヌラルダの姉。



はーはーん
ひいひいっ!!



ごめんね鈴ちゃんっ
私は神社にいないと
ダメだから…

いくら私は休みが
あるっていったって…



エヌラルダ
ダイアノのお姉様。実は男。しつかり者。



どうなん?!

み…水を
……

あ…ああ……

気温 27°C



友達

あ、巫女好きのんか…

お姉え…友達は
選ぼうよ…

ずい…

脱出の達人



余裕で五杯っ!!



危険察知



劇的勘違い





味方兵士たちの視姦に晒される女将校！
肛虐公開調教と輪姦陵辱に堕ちていく！！

CASTLE PRISONER
キャッスルプリズナー

雌将校隷属調教
後編

小説 夜士郎

挿絵 吉飛雄馬

登場人物紹介



ノエル・セリエンティ

ヴィスバ皇国の軍指揮官。自ら前線に立ち、車を指揮する。

ヒルダ・ローシャツテ

ガルム帝国軍第四師団隊長。残虐に敵兵を殺すことから「緑色の死神」と恐れられている。

アン

十九歳。ノエルの部下だが、姉妹のように仲がよい。

ゴルム國務大臣

ヴィスバ皇国外交部トップ。帝国へと寝返りノエルを陵辱した。

前号までの あらすじ

ゴルムの手引きによりヴィスバ王宮は敵軍の手に落ち、ノエルは凶暴なヒルダに囚われ陵辱される。

内股を擦りあわせれば、ぐちゅると淫靡な水音が響いた。

「はあっ、はあっ、あっ、か、痒いッ……、熱いッ……」

薄暗い場所に横たえられたノエルの身体から、湯気が上がっている。

上気する頬は桃色に染まり、首筋から鎖骨にかけて汗まみれ。床に向かつて重ねられた、胸元の大きな鏡餅が質感たつぷりにふるりと震え、分厚い軍服すら押しあげて、固く尖った肉突起の形がうつつすらと見て取れる。

しなやかな筋肉と、適度な脂肪に包まれた、すらりと伸びた両足は、付け根までまる見えであった。

スカートを、腕がされていた。剥き出しの太股を包み込む、黒いパンティストッキングには、まるで虫に喰われたみたい丸い穴が開いている。

――虜囚の身となった後。ガルムの城に連行され、そこで――身体中を精液と小便と穢され尽くした。今は水で

洗い流しただけのノエルの全身からは、湯気とともに鼻をつく、生臭い雄臭が立ちのぼっている――。

「くうっ、痒いのが、収まらない……。お尻がおかしくなりそうだッ」

内股を汗でぬたぬたに濡らして、筋肉を晒す黒艶の脚が、二匹の蛇の如く絡みあい、うねくる。引き締まった尻房が潰れ、蠢いて、極薄の黒布を破れそうなほど引き伸ばしてしまう。

――股間に、白い三角地帯が透けて見えていた。そこも、汗に濡れて、肌にとびとりと貼りついていて――きゅつと、恥谷の割れ目にまで、食い込んで

いるではないか。

「ああ、熱いッ……、痒いッ……」

恥筋をくにくんと歪めさせ、ノエルは肉を灼く苦悶を堪え忍ぶ。

疼く。お尻の穴が、痒くて。お腹の奥が、熱く疼いてたまらない――。

両手は手枷で拘束されていて。だから自らの手で慰めることもできない。

直腸に、大量に流し込まれた、薬品と山芋を混ぜ合わせたという特殊な流腸液。ヒルダの目前で強制排泄をさせられた、その流腸液は、敏感な直腸粘膜を、凄まじい痒みで汚染したのだ。

それから幾日経ったことだろうか。痒みは一向に収まってくれない。

「あんな、あんな無様な姿を……」

だが、それよりも――。

「あんな、あんな無様な姿を……」

ノエルを責め苛むのは、その痒みに悶絶する肛門を抉った、固い固いディルドの感触であった。思い出すだけで排泄穴がきゅつと切なくなる、あの頭の中を漂白するような悦楽。硬質のディルドの、張り出した傘に腸管を掻きむしられ、腹腔の奥底まで小突かれて。それが、あまりにも気持ち悪い――。

（違うッ、違うッ、欲しくなんてないッ、欲しく、なんてっ……!）

ズクン、ズクンと、子宮が熱い鼓動を打つ。内股を擦りあわせれば、ぐちゅると淫靡な水音が響く。

――濡れて、いるのだ。とろりとりと膣奥から漏れ出す蜜液に、ショーツの股ぐらから黒艶の内股までぐちゅつと濡れそぼち、ひくつく肛門まで浸ってしまったているのだ。

（嫌なのに、どうしてこんなに――）

――また欲しい、なんて。

（考えるなッ、考えるなッ……）

桃色の唇から血が流れた。艶めく犬歯が、肉を裂く。

（アン……、アン。無事……なのか）

――あの女が見せたりボンは、紛れもなくアンのものであった。いつ、捕らえられたのか。今、どうしているのか。ヒルダは、何も答えなかった。

――己の無力が、あまりにも情けなくて。それなのに、衝動に囚われる雌肉が、忌々しくて仕方がなかった。

（……一体、どこに向かっている）

不規則な震動を繰り返す、木の床。

馬車の中であった。それは、罪人を連行するための牢車であった。揺られに揺られ、何時間が経っただろうか。

「んっ……、はあっ、ふああッ……」

床の震動が身体の芯まで響くようだ。ジンジンと疼く直腸肉が、腹腔の中で蠢いている。びくびくと、白桃ヒップが震え上がって――。

――痒い、欲しい、痒い、欲しい。身中を蝕む痒みの嵐に、憂うべき部下の身の上すら霞んでいく。馬車が止まるまで、戦女神の身体は固い床に汗を塗りつけ悶々とのたくつていた。

いくつもの、銃声が聞こえる。肌を刺す殺意の群れ。入り乱れる足音。

（――戦場だ）

馬車の停まったその場所を、ノエルはそう推察した。

扉が開く。気配が、近づいてくる。「ほら、着いたわよ」

ヒルダである。襟首を掴まれて、強引に立たされる。

「ここは……どこだ？ 私に、何を」

訊く。けれど、ヒルダは何も答えない。切り裂くような笑みを浮かべて、枷に鎖を繋げ、表へ連れ出された。

耳朶を打つ銃声が、いよいよ鮮明となる。陽光が、瞳を突き刺す。白む視界に、その光景はあった。洞窟である。杭と有刺鉄線、土囊とで、入り口にバリケードが築かれている。隙間から顔を覗かせる、軍人の姿は――。

（我が国の、兵士ではないか）

（我が国の、兵士ではないか）

（我が国の、兵士ではないか）

（我が国の、兵士ではないか）

（我が国の、兵士ではないか）

（我が国の、兵士ではないか）

そうだ、ここは緊急時の拠点の一つ。いざという時のために、弾薬と食料を溜め込んだ、秘匿基地であった。「彼ら、なかなか頑張るのよねえ。攻めあぐねているの」と、ヒルダ。

「物量に任せることもできるけど、被害も大きくなるし……兵糧攻めなんて悠長なこともやつていられないし？」「……だから、なんだ？ 私に、投降を命じるとでも？」

「下らんことを——と、鼻で笑う。だが、ヒルダはその麗貌をいにと笑みに切り裂くと、ノエルをバリケードの前まで引立てる。銃声が、やんだ。」

「大尉……」「大尉だっ……」
「はあい、ヴィスバの皆さん」と、愉しげに言うヒルダへと、一人のヴィスバ兵が、問うた。

「なんだ……人質のつもりか？」
「いいえ。鬱憤が溜まっているであらうあなたの方に、慰問にきたの」
「慰問……だと？」

兵士の目が、こちらを向く。その、どこか照れたような表情にノエルは、ストッキングから下着までが剥き出しな、己の痴態を自覚した。

身体が、熱くなる。気づいてみれば、兵士達の視線はその全てが、女神の肢体に集中しているのだ。上着の胸元を膨らませる双乳や、穴だらけのストッキングに、欲望の瞳が注がれている。恥じらいに足を組んで、ノエルは股間

を隠そうとする。下着に染みこんだ、恥ずかしい蜜液の滴り——それを悟られてはいないかと、全身に焦燥の汗が浮かぶ。

「た、大尉殿あんな格好をさせられて……ああ、どんな辱めを受けたのか」

哀れみの声が、聞こえる。けれど彼らの視線には、ノエルにとつて見慣れた情欲の濁りがあった。

——あの、ガラム城の男子便所で、ノエルを囲み、散々に欲望をぶちまけた敵兵どものそれと同質の——。

（……いや、違う、違う……はずだ）
命の瀬戸際で戦う男達は、その性欲もまた獣の如く猛るのだ。それは子孫を残そうと欲する、人としての本能なのかも知れない。だから彼らが、戦場のストレスから欲情してしまうのも、仕方がないのだ。

——そう、思いこもうとしても。
「ああっ……見ないでっ……」

こみあげる羞恥は、抑えきれない。じわりと、股間が熱くなる。目が、目に、目に、見られて——とくんとく

んと、子宮が、疼痛に蝕まれた尻肉が燃えあがる。陽光の下で艶めく太股が震え、その内股にまで、浅ましい涎が伝い落ちていくのを感じてしまう。

ごくりと、誰かの唾を呑み込む音がひどく耳に響いた。
思わず、顔を背けようとして——。

「くっっ?! あああっ!」
不意に凄まじい勢いで、身体が引つ張られた。見上げれば、手枷に繋いで

いた鎖が、木の枝の上を回っている。身体は幹へと引き寄せられて、両手を掲げる格好であった。ヒルダが、鎖の端を握っている。

——まるで、野晒しの罪人。
そして、その罪人を前に、ヒルダが

手にした処罰器具は——。
一本の、乗馬鞭であった。

「ふふ、うふふ、ふふふふ……さあ、いい声で鳴いてもらおうわよ……」
どろりと、濡れた声。その手の平がノエルの尻をすうとなぞると。

「ひゅっ」
と、奇妙な声が喉奥から漏れて、柔らかな乳肉がぶるんと跳ね上がった。
あの、鞭で——鬨りものにして、泣き喚く上官を人質に、兵士達に降伏を促そうというのだろうか。だが。

（痛みならば——耐えられる）
ぐっと、下唇を噛む。この、腹の中を蛆虫が這い回るような痒みの拷問に比べれば、それを掻き消すであろう痛みなどむしろ望むところであった。
「ふふ、うふふ、ふふふふふふうふふふふふふふうふふふふ」
ひゅんひゅんと、幾度か鞭が宙を打ち、ヒルダは腕を振りかぶり。

「さあ……お啼きなさいっ!」
激しく、ノエルの尻を打ち据えた。稲妻のような刺激が、尻肉を駆け抜けた瞬間、痒みを押し潰す強烈な痛みに細腰がびくんと跳ね上がり——。

「っ?! あ、あひんっ!」
髪を打ち震わせ、晒した喉から漏れ

たのは、苦痛の悲鳴ではなかった。（な、なんなの、今のっ……）
身体の中に、余韻が響いている。じんじんと、どこか甘くて切ない痺れ。

「ほらっ、もう一回っ!」
「ああっ、いつ、つううっ!」

肉付きの良い玉尻に、皮を巻いた鞭が叩きつけられ、衝撃が脂肪層を通過して直腸に到達する。

すると——開かれた桃色の唇から吐き出されるのは、少女のように瑞々しい哀鳴なのだ。汗ばむ女神の身体からさらなる甘汗が噴き出して、全身を濡れ色に染めていく。バシィンッ!

「んおっ、はうんっ」
じいんと、尻に響く悦震動。うねくる腹筋、両腕が鎖をかき鳴らす。パンストのお尻部分はすぐに破れてしまつて、被虐の汗を染みつかせた純白の清楚なショーツが剥き出しになつてしまつている。肉谷に、きゅつと食い込んだ布地から、尻の両たぶがはみ出ていて、その脂肪肉に赤い筋が落書きのように描かれていた。

「はあっ、あつ、はあつ、はあーっ」
一つ叩かれれば——脳天まで駆け抜ける衝撃に、ズンと子宮までが戦慄きまた一つ叩かれればどぶりと、肉芯から熱い何かが溢れ出す。お尻の表面がひりひりとしているのに、その内側では痒みを消し飛ばす痛みを、歓喜をもつて出迎える反応がある。

（見ているんだ、仲間達が……見られ

「ているんだ、抑えなければ——」

また、一つ、激しく叩かれて——。

「あぐらうっ、おっ、おひりがああつ、くふうんっ、変になるうっ！」

肉尻を左右にうねうねと揺らして、甘蜜の声を漏らしてしまう。

「お、おいおい、なんて声だよ」

「大尉、なんであんな反応してんだ」

ざわめく兵士達のそんな声に、羞恥が湧き上がる。どうして——。

（なんで、痛いのが、こんなにつ）

——気持ちがいいのだ。

尻は、もとより痛覚神経の鈍い箇所である。一度や二度、そこを叩かれても、どうということはない。だが。

何度も、何度も、何度も何度も。何度、はっ、んひやうっ!!

まん丸い尻の表面に、打撃の波紋が幾度も広がる。左右に激しく揺さぶられる熱れた脂肪肉、極薄のシヨーツがますます尻の谷間に食い込んでいく。

「はひいっ！ もうっ、ひっ、やめっ、やめろっ！ ひぎいっ、ああっ！」

銀色の髪が激しく波打ち、まろやかな双乳が厚手の軍服の中でたぶたと揺れ、ストッキングの虫食いから生肌を膨らませる長い両足を地面に打ちつけて。身悶えるノエルの顔は、どこか艶めかしい赤ら顔であった。

「ちっ、きんきん泣き喚きやがって……情けねえ」

耳朶を打つ声に、おそるおそると視線を向けば——兵士達が、バリケー

ドに貼りつくように押し寄せていて、その顔には、うっすらとした笑みすら浮かんでいるのだ。

全身がかつと白熱した。

（私を、そんな目で見るなあっ!!）

あの——敵国の男子便所で受けた、肉人形を見るような視線。それを、味方から向けられることになるなんて、信じたくなかった。

「お、おい……濡れてないか、大尉」

股間の染み色が、じわじわと四方に広がっていくのはなぜか——。

卵を割つたみたい、薄いシヨーツからぐちゅると溢れる肉愛液。

身体が——熱い。頬が、桃色に染まり、吐く息まで白く、甘く。

「くひいっ、んひいっ、はひいん」

叩かれるたびに——狂ったように身悶える。顔を反らし、爪先立ちの両足に臆の影が浮かび、全身から迸る汗が被虐の女神を艶めかせてゆくのだ。

そして玉葱尻を包み込むシヨーツが、わりいと、裂けた。

肉と肉の合わせ目が外気に晒され、その柔らかそうな尻山は、痛々しげな鞭の跡が乱雑に書き殴られて、もう真っ赤に腫れ上がっていた。

蟻の門渡りから伝って、肛門付近まで愛液に濡れている。まるでお漏らしでもしたかのように、股間からぼたぼたと垂れ落ちる恥水が、乾いた土に吸い込まれていく。

「すげえ、びっちより濡れて……」「本気で感じてるんじゃないか」「大尉殿……あんな変態だったのですか」

「ちがうっ、ちがうぞっ、わたしは、そんなっ……、くひいんっ！」

否定しようとした顔は、肉尻を叩かれてそのままぐんと天を向いた。

「なにが違うと言うのかしらねえ？」

「ヒルダの両手が、腫れた尻に伸びてくる。ずぶりと、豊満な肉にめりこむ十本の指が——兵士達の目の前で、尻房を左右に割り開いたのだ。」

ぬちりと脂汗が粘ついた音を奏で、ご開帳されるのは、真っ赤に爛れた排泄孔であった。尻と一緒に、わずかに左右に開いた肉孔の奥には、腸粘膜の襞すら垣間見えていた。

痒みにひりつく皸穴が、ひくっ、ひくっ、と震えていて——。

「物欲しげじゃない」

「やめろやめろやめろっ、放せっ、見せるなあああっ！」

足下に火がついたように暴れるノエルの、首をねじ曲げ背後を見れば、味方の、部下の、仲間の視線は、吸いつくようにその一点、不浄の排泄孔に集中して。まるで、肛門に眼球を押し

つけて見られているかのような感覚に、全身の毛穴がどつと開いた。

ああ、尻だ、肛門だ。ノエルの、糞を吐き出す排泄孔だ。部下達の粘ついた視線が、肛門をほじくるようだ。

「ああっ、見ないでくれっ……」

部下の信頼を、国家の威信を担ってきた、戦女神の肩が、小さく震えた。

「ふふ……まあだまだ、あなたの情けない姿を見せないとね」

と——ヒルダは何を思ったのか、もはやポロ布と化したパンティストッキングを鼠径部で引き裂いて、左足のみに晒された。汗ばんだ生足が、外気に

と、出来上がったのは、結び玉が連続して並ぶ一本の紐であった。

「何を……する気だ、そんなもので、今度は何をやるんだ……」

暗い不安感が背筋を撫で上げる。ヒルダの唇から、毒々しいほどに赤い舌がぬるりと這い出してきた。手に持つ黒布を舐め、しゃぶり、唾液でべとべとに濡らして——。

「こう——するのよっ」

震える皸肉を押し広げ、ずぶうっつと、布玉をこじ入れてきたのだ。

「くふううっ?! んはああっ！」

びくびくと跳ね上がるノエルの細腰。嵐のような痒みに爛れる粘膜を、粗い布地が擦り上げたのだからまらない。

驚つかみにした豊満尻を手掛かりに、ヒルダは次々と、親指の先で布玉を押し込んでいく。布玉の一つが皸穴をこ

じ開くたびに、爪先までがピンと立ち、丸尻をはね上げて――。

「なになになになにつ!! 入ってつ、るつ、やめろつ、入れるなあつ!!」

「がざりがざりと――身体中を駆け巡る布玉の感触に、脳漿が湧いた。」

「一つ……、ほおら、また一つ。ふふ、ほらまた、入ったわよお」

ことさら、ヴィスパの兵士へと響かせるような大声に、耳の先まで赤くなる。彼らの顔もいよいよ紅潮し、鼻息すら荒く、丸肉を責め立てる淫獣の腕に、爛々と輝く瞳を注いでいるのだ。ずぶ、ずぶ、ずぶうっ!

「詰まる、ううっ! お腹につ、詰まってるっ! いっぱいになるうう」

布地が腸液を吸い込んで、潤滑の足りない腸壁は削り取られるような刺激に苛まれる。内側に巻き込まれていく皺肉、ずぶり、と一玉が内部に潜り込めば、先行する一つがさらに奥へと押しやられ、背筋に痺れが駆け抜けて、銀色の髪を振り乱す。

「ああ……オオ……くひい……」

食いしばる歯から漏れだす、涎混じりの苦悶が、涙と混じり顎を濡らす。

「ふふふ……ほおら、どう? 可愛い尻尾が生えたわよ」

と、ヒルダの隻眼が見つめる先。被虐の糞穴から垂れ下がる、使用済みのパンティストッキング――。

「はっ……はっ……はっ……」

肺腑までせり上がるような圧迫感。犬のように息を荒らげるノエル姿に、

兵士達はバリケードから身を乗り出して釘付けになっていた。

誰もが、非難の声すら上げず、股間を膨らませ、その目にノエルの痴態を焼きつけようとしているのだ。

あまりの情けなさに、涙が滲む。これが、誇り高きヴィスパの兵なのか。私の、部下なのか。

パシインィッ! と、再びの鞭が叩きつけられた――。

「うああっ! やつ、今は駄目だっ」

尻肉が跳ね黒い尻尾が弧を描く。圧迫される腸管に激震が駆け抜ける。

「ほおら、ほらほらっ!」

嗤うヒルダの右手は止まらず、ノエルの赤めく尻玉に、縦に横に斜めにと幾筋もの赤線を描いていく。尻谷から垂れ下がる黒布が、上下に跳ね左右に揺れぶんぶん振り回されて――喉の奥からきんきんきんきんと、堪えきれぬ苦鳴を吐き出すノエルのその有様は、喜び吠える犬のようですらあった。

「ああつ、はあつ、破れつ、破れるつ、ああつ、お尻がやぶれるううう」

尻皮が破裂するのではないかと思うほどの衝撃に、ノエルの麗貌はあられもなく歪む。皺の寄る額、静謐な瞳は熱く潤み、まるで童女の泣き顔のよう

で。苦悶にくねる、むちりとした肉脚の狭間から滴り落ちる愛の蜜は、その量をお増してゆくのだ。

「ははっ、おいおい、大洪水じゃねえか、なっさけねえなあ!」

「感じまく

つてやがる……畜生が」

そんな声が聞こえて、羞恥に銀髪を左右に揺らす。薄布に包み込まれた右

脚は、濡れ染みで内外がくつきりと色分かれすらしていた。

必死に膝を閉じ合わせれば、膣壺が布玉に圧迫されて、恥液をぐちゅると押し出してしまふ。後から後から溢れ出す、淫猥な体液。その、思い通りにならない自分の身体が歯がゆくて――

そんな雌肉を見られていると思うだけで、肉壺がきゅんと疼いてしまふ。

「ふふ、すごおい。こんなに、涎を垂らしちゃって。いやらしい――」

嗤い、ヒルダが黒布尻尾を手に取り

た。ぐつと、引き上げる。途端にずり

ずりつと肉粘膜が逆剥かれ――、

「んおおっつ!、はおおお――」

ぐんと上目剥く眼球、皺肉が、肉穴

が捲れ――ノエルの尻が追従するよう

に吊り上げられていく。しなやかな脚

がくつと伸び上がり、爪先立ちも限界

に達した、刹那。

ずぶりっ!――布玉一つ、皺肉を

捲りあげて飛び出した。

「んふううあああつ!」

背筋を駆け抜ける落雷に、ぬめる舌

肉がつんと突き出される。

「ふふふ、気持ちよさそうな声。ほおらつ、ほらほらっ!」

「ひいん、引くなつ、引く引くなつ、あひいっ、でてるうううっ」

さらに淫猥な尻尾を引かれ一玉が

こそげ抜けると、内臓まで引きずり出

されそうな逼迫感に襲われる。臓腑が

溶ける。子宮が、焦げる。

痒みを感じ取る布玉の暴虐が――

気持ちいいのだ。精神まで侵されていくような悦楽に、自分が、自分でなくなりそうだ。

悦び震える、そんな自分を見つめる、部下達の獣じみた視線が痛い。

「ああつ、もうっ、もうっ……」

ゆるゆると、左右に揺れる銀の髪。

ノエルの蒼い瞳が、一筋の涙を流す。

「もうっ、一気に出してしまえっ!」

延々と続く、肛肉嚙りに、どうにか

なつてしまえそう。子宮底を焦がす

逼迫感に、狂つてしまえそう。

「ふふ……そう。そんなに、気持ちよくなりたいの」

と、ヒルダは黒布に手を掛けて――。





そして今まさに
人間の勇者達と
竜人の女王ヒルデとの
最後の戦いが
繰り広げられていた

長きに渡り戦争が
続いていた人間と竜人

魅惑ボディに絡みつく
欲望の視線

しつこい人間共め…
ごっとなれば…

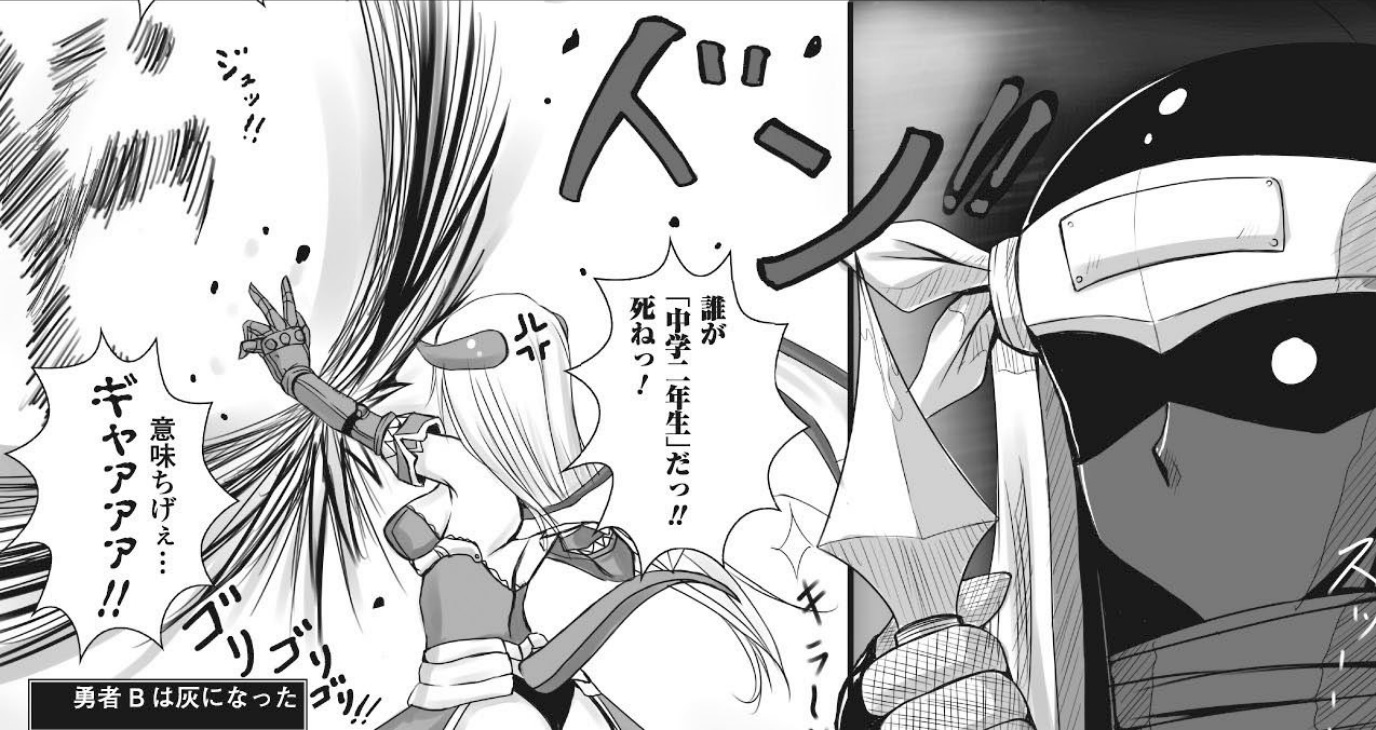
竜姫ヒルデ

屈辱の墮淫責



必殺
ドラゴニツク
バーストツ!!

みんな
気をつけるっ!
名前が厨二病
臭いぞっ!?



ズン!

誰が
「中学二年生」だっ!!
死ねっ!

ギヤアアア!!
意味ちげえ…

ブル
ゴッゴッ!!

勇者Bは灰になった



し…しまった
…後ろから…!

それにしても
強力な薬
塗ったんだな？
竜も一発とは

象用なのだが…
こんなに効くとは…
使ってみるものだな♪

フハハハ！
やったぞ
みんなっ！

毒ではなく
シビレ薬だ
卑怯な…
毒ナイフ…か…？



ビクン
ビクン
ビッ
ビッ

おの…れ…っ！



ククク
魔力も杖もなけりや
ただの中途半端な
巫人だなあ女王様？

それにしても
いい体してんなあ
女王様は…



くっ…
力が入らぬ…！



このムシケラども…
私にこのようなことをして
ただで済むと思うな…っ！



お：
やわらけえし♪

やめろ…カスが
気安くさわる
…なっ…!

ぐい♡

ムギユ♡

さて中身を
拝見っとな

くっ…
よせっ…!

胸もでっけえし♪

もみ♡



うおおっ!
すっげえでっけえ
乳に乳首っ!

くっ…
見る…なっ…!

けしからん
女王様だなあ!
しかも陥没乳首
だぜ♪

たが♡

い
けるん♡

そいじゃ
陥没の中身にも
ご挨拶だぜ！

へへ
それじゃ俺は
こっちを！

VOO
LOV

ビク
ビク

ち
ち

んはあ…っ！

ムギ

やめろ…
きたならしい
…んあっ…！

た

くう…んっ！

おいおい乳首立って
きたんじゃね…？
感じてるのか？ 王女様は？

ビク

ぐい
フク

ち
ち

もみ
もみ

くっ…！
…なにを…ばかな…
そんなわけが…！



強がってもここは
こんなにピンピンに
なってきたるがな♪

こつちも
ピンピンだぜ
ほれほれ♪

さてそれでは
私はその乳を
使わせて貰おうかな

くっ…こんな
奴らに…っ！



ぶるん

くっ…嫌なはずなのに…
なぜ…体はこんなに…!?

ジュブ
ズブ

ヌホ

んおっ!!
射精るっ!!



ほれほれ♪
どうだい気分は?

んっ…!くっ…!
最悪…だ…

たが

ぬほ

たが

ヌブ

ジュブ

女体化して事件に迫る捜査官!!
初めての悦楽に性の境界が揺らぐ!!

女体化捜査官 ツバサ

The investigator, changing into woman's body. — 白い悪魔の狂辱 —

小説 NOVEL あきつきあきら 秋月瑛 挿絵 ILLUSTRATION Kloah

この世には『存在していない事件』がある。

その諜報活動を行う政府組織は警察から独立しており、存在は表舞台に上ることはない。

国家機密調査庁——通称NSIA。「特別捜査官ツバサ、あなたに女体化を命じます！」

「ええッ!?!」

長身で頑健な肉体を背広の下に隠し、整髪料で決めた短髪の精悍な若者が、愕然と目を剥いて口を半開きにしたまま、科学者たちに引きずられていく。こうして、**彼**は女体化させられた。

「ねえ……起きて」

意識の遠くで少女の声が聞こえる。

「お兄ちゃん……起きてっば」

ぼやけた視線の先に少女の影。

「かわいい妹が毎朝起こしてあげてるのに、どうして起きないかなあ!」

「はいはい、おまえは世界で一番かわいいよ。だからあと五分」

「もおっ!」

少女の影が腹に降ってきて、衝撃を覚えベッドから飛び起きる。

カッと見開かれた視界の先に、少女はいない。学生寮の部屋には、はじめからひとりしかいなかったのだ。

「妹の夢を見るなんて……」

「**彼**は姿見の前に立つ。しかし映ったのは、少女の姿。

パジャマの上着を脱ぎ捨てると、柔らかな髪がそよそよと甘く香り、小ぶ

りで形のよい鼻をくすぐった。

蜂蜜を湛えたような瞳、一流の水墨画家が描いたような柔和な眉、唇は花のつぼみのようにぶくつとしており、少し怪訝さも含んでいる。

「妹そのものじゃないか」

遺伝子情報を持ったナノマシンによる女体化。その遺伝子はツバサの妹のものだった。

——これは実験も兼ねているのよ。鉄壁の女帝と称される現場対応チーム主任、八重垣アツコからの特命。

ツバサは元刑事であり、その捜査能力を買われ特別捜査官になったが、まだまだ新米の未熟さが残る若者。そんな彼に課せられたはじめての単独任務。

「よりによって妹になるなんて、事前の説明じやなにも言われなかった」

新たに開発された『存在していない科学』による女体化は、もともと生体認証などを欺く技術として、研究が進められていた。だが現段階では、男性から近親者の女性にしかかなれない。彼は潜入捜査を兼ねて、被験者第一号となつたのだ。

ツバサは記憶を辿ることにした。

デスクには落ち着き払ったカジュールスーツの女主任——の巨乳。

「話は相手の目を見て聞きなさい」

言葉は鉄の杭となって、新米捜査官の心臓に突き刺さる。

「す、すみません!」

顔を真っ赤にして慌てて頭を下げた。アツコは自らの豊満な胸を一瞥して、

何事もなかったように話を続ける。

「——以上のことから、その多発している不審な自殺を調査するため、あなたには女子学園生として潜入してもらうわ」

鋼の響きを持つ声で、当然のように言われたが、あきらかにおかしい部分がある。

驚いてツバサが聞き返す。

「女子——ですか?」

「そうよ」

「女装なんてそんな、男の俺に女の格好をしるど? 女性捜査官に任せればいい話じゃないですか!」

「特別捜査官ツバサ、あなたに女体化を命じます!」

苦い表情で衝撃の言葉を思い出してから、**彼**。だった捜査官は、その女体化された身体を感慨深げに見つめた。

「これが妹の身体……いっしょに風呂に入つてた幼いころから、今じゃきつとこんなふう……」

大きく実つた胸に手を伸ばしたが、可憐な桃色の小さな突起の前で、拳を握つて叩きつけるように腕を下げた。

ツバサは姿見から目を背け、着替えをはじめた。鏡の少女を見ると、背徳感と罪悪感が脳裏で渦巻いてしまう。

女物の下着では眠れず、隠し持ってきたトランクスから、目をつぶって白いレースショーツに置き替える。

「ピチっとして気持ち悪いなあ」

続けてブラジャーのホックを留めようとしたが——。

「くそっ、なんで三つも留め具が!」

ホックの数が多いのは、この身体を持ち主の胸が豊満だからである。

「そうか!」

背中にも両手を回しホックと格闘して、あることをひらめいた。薄目を開け、ブラジャーを半回転させ、ホックを胸の前に持つてきてから留めたのだ。

「もしかして大発見じゃないのか?」

難関を抜けたツバサは、ほくそ笑みながらブレザーに着替える。

あとは髪を不器用に太い一本の三つ編みに結び、まん丸レンズの地味なメガネをかけ、眉尻を下げてから、控えめな笑みを浮かべた。

「ごきげんよう」

これで決まったとさえずき、スリッパする股間を通学靴で押さえ、落ち着かないようすで部屋を出た。

さわやかな朝だ。

郊外にある全寮制の学園で、自然が豊かで空気もおいしい。

そんな朝が、女の怒鳴り声で一変させられた。

寄宿舎から本館に繋がる渡り廊下。そこから直接出られる屋外に、生徒の影が四つ。声の主はその中にいた。

気弱そうな少女がこづかれて、校舎の壁に背中を打ちつける。周りを囲んでいる生徒たちは、怒りや笑いを浮かべ、なに行われているか想像はつく。

しかしツバサは、生徒たちの陰に隠れて見て見ぬ振りをした。

「話には鉄の杭となって、新米捜査官の心臓に突き刺さる。」

顔を真っ赤にして慌てて頭を下げた。アツコは自らの豊満な胸を一瞥して、

「くそっ、なんで三つも留め具が!」

ホックの数が多いのは、この身体を持ち主の胸が豊満だからである。

「くそっ、なんで三つも留め具が!」

ホックの数が多いのは、この身体を持ち主の胸が豊満だからである。

(任務を優先しろ。まだ潜入して二日目だぞ、下手に動いて目立つと厄介だし、ここは見なかったことに……)

もう本館の入り口は目の前だ。

「やめてっ、いやあああつ！」

少女の悲鳴が正義漢の心を震わせる。(くそっ！)

脚が勝手に地面を蹴り上げていた。

「おまえら！」

男らしい怒声の主に、イジメグループの視線が集中する。熱に駆られ思わず行動したが、潜入捜査官という立場に気づいて冷静になり、メガネを直し眉尻を下げ、キヤラを間にあわせた。

「あのお、イジメはよくない……と」

ツリ目で強気な女子が、指先でパンツを振り回しながら近づいてくる。

「あんただれ、見ない顔だけど？」

「俺は……いえ、わたしはそのお、二年C組の佐藤マイです」

潜入捜査用の偽名を答えながら、地面にうずくまっている少女に目をやると、めくれ上がったスカートから、平手の痕が生々しい桃尻が覗いている。

(女同士のケンカってどうすればいい？ しかも相手は流崎レイナだぞ)

事前に目を通した捜査資料の中に生徒たちの自殺に関わった可能性があると、イジメの主犯格、流崎レイナの名があった。

急にパンツを投げ捨てたレイナが、苦笑していたツバサの胸ぐらを掴んだ。グイッと化粧の濃い顔に引き寄せられたかと思うと――。

(んぐつ、舌が!!)

ツバサは瞳を丸くした。唇を奪われた上に、長い舌まで入ってきたのだ。

ちゅぽっ……ちゅぽ、くちゅ……

柔らかいのに芯があつて、舌をコリコリされながら舐められる。かと思うと、淫靡な蛇がうねるように、巻きつき絡み込み込んでくる。

(相手から唇を奪われるなんて)

驚きを通り越すと、『はじめて奪われる経験』に、気づいてしまった。

(今の俺はされる側なのか、俺が？舌を絡めるのだって普段なら……)

自分がしていたことを相手からされる感覚。急に肌が粟立ち胸がきゅうつとした。

支配され、相手の欲望を受ける立場として、染められていくのがわかる。

うぶな少女の肌は敏感だった。キスをされながら、太腿を摩擦されると、なにかがおかしいと感じる。

(くすぐりたい？ 違う……おかしいぞ、なんなんだ)

まだそれをはつきりとは感じられない。しかし、ここが入り口だと本能的に直感した。

繭の中で怯えるように、ツバサは相手をゆっくり押し退ける。

「やめて……ください」

のどから出たしおらしい声が、自分ものとは思えず、下唇に涎をつけたまま、瞳を丸くして立ち尽くした。身体は離れても、相手の香水の匂いが服にまとわりついて離れない。

レイナは熱い息を漏らし、執念深そうに瞳がギラつく。

「あんたも拒むわけ？」

ねつとりと吐きながら、彼女がちらりと視線を向けた先には、うずくまつたままの少女。

嫌な熱気が空気感に伝わる。身を焦がす黒い炎を淫女は心に宿していた。

自分を取り戻そうとする潜入捜査官(男同士なら殴り倒してやるのに！)

だが、今は女だ。潜入調査は役柄を演じきらなければならぬ。

目を釘づけにされる艶めかしい舌の動き。淫らなレイナは口寂しそうに自分の指を舐める。

「ちゅぽっ……たつぷりかわいがったげる」

言葉の終わりと同時にツバサはこづかれ、校舎の壁に背中を打ちつけた。

すぐに重い胸が下から上に摩られ、手でガードしようとした最中、息の荒い淫女が舌舐りをして、

「はあはあ、気持ちよくなりましたげる」

「あうっ」

上向いて思わず喘いだ。胸はフェイントで、相手の中指がスカートの中に入り、布地の割れ目が淫靡になぞられている。そこが男だったら隆々としていたかもしれない。

(やつぱりだめだ、俺の任務はこんなことをするためじゃない！)

また欲しがるレイナの唇は、濡れた舌を覗かせながら、しゃぶろうと迫っている。

——お兄ちゃん。

脳裏に浮かんだ妹の——唇。

「やめる！」

「兄は力任せに誘惑の♀を突き飛ばして、奪われそうになった唇を守った。それからすぐに、うずくまっている少女を立たせ、

「今のうちに逃げる！」

背中を押しして強引に走らせる。

「待ちやがれ！」

叫んだ女子Aがツバサに足を引っかけられ転倒した。

尻餅をついていたレイナが立ち上がり、拳を振り上げて殴りかかってくる。

「ふざけやがって！」

「ふざけてるのはダメエだろッ！」

ツバサは相手の拳が起こした風を耳の横で感じながら、カウンターパンチを繰り出した。

しかし拳を前にして、恐怖で顔を引きつらせるまだまだ子供が目に飛び込むと、寸前で平手に変えたのだ。

パシィイインッ！

鳴り響く朝の空気を変える音。

イジメを見て見ぬ振りをして、渡り廊下を通り過ぎようとしていた生徒たちが、みな足を止めて転校生に魅入ったのだ。

残る無傷の女子Bが、やられたりーダーを見て激昂する。

「レイナさんに手を上げるなんて！」

殺気を背中に受けたツバサの足下で砂塵が舞った。割れ目に食い込んだパンツが見えるほど、足を高く上げた回

し蹴り。大鎌を薙ぐように女子Bの首を刈った！

どさりと白日を剥いて倒れた女子Bを見て、ツバサは我に返る。

「やばっ、反射的にやってしまった」

それを魅入っていたレイナは、頬を真っ赤に染めて、瞳を潤ませている。

「……好き」

そのつぶやきは、歪んではいたが純白だった。形勢は逆転したが、厄介な副作用を呼んでしまったようだ。甘酸っぱい病気である。

淫女が乙女になったギャップにツバサはギョッとしてしまった。

「今の蹴りそっちにも当たって……ないよな？ 変なことか？」

收拾がつかなくなり、追い詰められた注目的は全速力で校舎へ逃げた。

その場に残された乙女は、紅葉の痕がついた頬に手を当てて、いつまでも立ち尽くし惚けていた。

——授業時間中。

血相を変えて渡り廊下やってきたのはツバサ。

「くそっ、どこで落としんだ!!」

通学靴をどこかで紛失して、ここだと思ったがなかった。入れ違いでだれかに拾われたのか？

あの靴の中には「X抑制試験薬」が入っていた。実験レベルの女体化技術が抱える深刻な問題。女体化が安定しすぎると、元の身体に戻れない。そのために抑制剤を定期的に服用する必要

があるのだ。

（あれがないと一生男に戻れない!）

焦ったツバサはすでに組織に連絡したが、よい返事はもらえなかった。

現場の問題は現場で臨機応変に解決するのが潜入捜査の鉄則。

なんとか新しい薬を届けてもらえることになったが、時間的に間に合わない。代用品を現地で調達するように言われたが、ツバサはその覚悟ができなかった。

——性行為をして精液を子宮に注ぎ込むのよ!

連絡時に言われた女上司の言葉だ。（俺は男だぞ、男同士なんて気持ち悪い!）それにこの身体は妹の……。いや、自分の身体に戻れなかつたら、妹にも会えなくなってしまう）

思考が早く渦巻いて止まらない。（ギリギリまで探して見つからなかつたら、作戦を変更して間にあうか?）

リスクは回避したい。それに——。

「俺の任務は靴探しじゃない」

失敗の穴理めに時間を取られている場合ではない。

——それから学園中を走り回り、男を捜そうとした。だが敷地は広く、体力が尽きるのが早い。

（この身体じゃ体力もないし、胸も邪魔なんだよ。くそ、男なんてどこにも……そうだ、俺は馬鹿だ、部屋に帰れば関係者リストがあるじゃないか!）

急いで寄宿舎に向かう。

静かだった。この学園の建物は古い

ものが多く、ツバサの部屋のあるベロ口館は、寄宿舎ではもっとも古い建物

であり、木造であちこちが傷んでいる。そのために、この静けさは不気味な怖ろしさを孕んでいた。

部屋のドアを開けようとしたとき、ツバサは背後から声をかけられた。

「授業はどうしました?」

柔らかく落ちていた——男の声だ! 驚きと歓喜で目を丸くして、ツバサは振り返る。

「はい、少し気分が優れなくて、自分の部屋で休もうかと」

目の前に立っていた若い白衣の男。やせ形でメガネをかけている。少し日本人離れた彫りの深い目鼻立ちは大変整っており、まるで数式のような。しかし、表情は春のように柔らかい。

「なるほど、ではお大事に……佐藤マ イさん」

「えっ、わたしの名前を?」

「季節外れの編入生ですからね、印象に残っていたんですよ。それでは」

背中を向けて颯爽と去ってしまう。（止めないと、それからどうやって……とにかく逃がしちゃうだめだ!）

ツバサは汗ばむ手で、白衣の男の手を握った。

「先生!」

「なに?」

（男と手を握るなんてどうかしてる。でも今はとにかく）

話をきり出さなくては——。

「相談したいことが、ええと二人つき

りで、わたしの部屋でもいいですか?」

「いいですよ」

すんなりと白衣の男は部屋に導かれ、二人はローテーブルをはさんで座った。

微笑んで見つめられているツバサは、男同士だからこそ落ち着かない。（ちくしょう、本当に男に抱かれなきやいけないのか??）

「悩み事ですか?」

「は、はい!」

「話してくれませんか?」

（話せるか! 抱かれるにしたって、こつちから襲ったら問題になりそうだが、あくまで向こうからってことに）

ひとりで熱くなるツバサ。欲情からではない。ある種の羞恥ではあるが。（俺が相手だつたら、これで……）

ゆっくりと脚を動かしたツバサは、片膝を立てた。向こう側から見ればスカートの中が覗けるだろう。食い込んだままの割れ目が、くつきりと浮き出たままになっている。

妙な沈黙。

ツバサは視線を感じた。股間ではなく瞳に。まだまだ誘惑が足りない。（こつちは恥ずかしい思いしてるのに、こうなつたら両脚を……）

今度は両脚を立てて体育座りする。すらりと伸びた脚線が描く三角形。

両脚の膝頭をキスさせて、内股に脚を開く。そうすることによって、脚と脚との間に描かれる三角形。つま先から伸びた脚は清楚なソックスに守られ、膝頭には指の長い手が置かれた。

253

可憐な少女のポーズだが、危うさを秘めている。三角形はもうひとつあり、これが誘惑の罠だ。

脚で描かれた三角形の中には、小さな三角形が薄布によって描かれている。螺旋に吸いこまれるような構図だ。

女性の秘密を守るには薄く、その形、柔らかさ、匂いを視覚で想像できてしまう。危うく魅惑の薄布だ。

(股に風が当たるなんてこと普段はないのに。もっと脚を開いたほうが……いや、これ以上はできない)

ツバサは恥ずかしげに、落ち着かないように、膝頭を擦りあわせた。(密着したパンツが汗ばんできたぞ)

確かにシヨーツは、男性のトランクスよりも、さらにブリーフよりも、肌に密着するつくりになっている。だが、それだけが汗ばむ理由だろうか？

ツバサは砂漠化した唇を舐めてから口を開いた。

「あの、先生のお名前をまだ知らなくて、教えていただけませんか？」

「賽園アウグストです」

平然と答える清廉そうな教師に、ツバサは焦りからくる苛立ちを覚えはじめていた。

(こいつ、全然興奮してないのか?)
相手はやはり平然と会話をするだけ。「アウグストはドイツ系の名前で、父がドイツ人、母が日本人なもので、なるほど、日本人離れした顔は、ハーフだったためだ。」

(この顔に抱かれるなら、まだマシだ

よな。こいつを……落とすんだ)

ツバサはひざに置いていた手を動かして、その指先で賽園の視線を誘った。膝頭からゆつくりと、すねを舐めるように滑り降り、足首のあたりをもどかしそうに行ったり来たり遊ぶ。

ちらりと賽園の視線が、白い薄布に向けられたような気がした。

しかし、スカートの中身が見えたくらいで、相手の女性を襲うなんてことはない。完全に婦女暴行、強姦犯だ。

ここではあくまで賽園から手を出したことにしたいが、実際には暗黙の了解がなければ、向こうから手を出してくることはないだろう。誘っている強い意思表示が必要なのだ。

(よし、も、もっとやってみよう)

ツバサは震える脚で立ち上がり、賽園に寄りかかって横に座った。甘えるように相手の肩に頭を乗せる。密着することで、温度や匂いも相手に伝わる。

そして、心地よい温度感で、ささやいて聴覚にも刺激を送るのだ。

「賽園先生……なんだか気分が……」

「大丈夫ですか？」

「いえ……なんだか胸が」

ここが決めた。うっとりとした顔を魅せ、潤んだ目遣いで相手の瞳を見つめる。獲物を逃がしてはいけない。(こんな目をした唇が近くにあれば、俺だつたら絶対にキスす——)

ツバサが息を呑む。
「あつ」

自分でやっておいて、目の前の顔に

ドキッとしたのだ。

目と鼻の先で見つめあう。賽園の瞳にはツバサが映っている。男同士で顔を近づけているのに、気持ち悪い感覚は起こらなかった。

(汗……なんだこの匂い?)

男のときには気づくことがない。そう、これは男のフェロモン。女にしか嗅ぎ分けることができない。

自然と賽園の手はツバサの腰に回っていた。痩せてると思ったのに、意外に太い腕、大きな手、肩幅も広くて、身体に触れる胸板も厚い。少女の身体は簡単に男に包まれてしまう。

(あれっ、心が落ち着いて……違う、胸はすぐドキドキしてるのに、なんだこの感覚は?)

感じてはイケナイ感覚に陥り、額から珠の汗が流れる。

「熱……ですかね？」

少し低めの声で賽園はのど仏を動かして、ツバサの額から汗を指先で拭いた。

ゾクッ!

腰のあたりから寒気が背中を這い上がってきて、ツバサは瞳孔を開きながら身体を震わせた。

(な、なんだ? 身体がじわじわと熱くなって、手に汗まで)

一気に燃え上がるというより、身体の中にじわじわ火照りが蓄積されていく。男は熱を発散するが、女は己の身を己で焦がし悶えるのだ。

楽しそうに笑いながら、賽園はツバサの色づく耳たぶを指先ではさんだ。

「耳もこんなに真っ赤だ」

相手が動かすのど仏を見ながら、ツバサは唾液を嚥下して渴いたのどを潤した。

いたずらな仕打ち。相手の口から自分の状況を言葉にされた。その意味がツバサの脳裏を駆け巡り、頬が引きつり艶やかな朱に染まっていく。

相手を誘わなくてはならない。しかし、本心では拒むことが正常である——という意識が、侵蝕されて、べつのモノに変わってしまうような不安。

(だ、だけど俺は男なんだ!)

目を剥いたツバサは、尻を引きずって後ろに下がった。だが焦って横倒しになってしまい、胸が揺れブレザーのボタンが弾け飛び、めくれ上がったスカートから、白い影と肉欲な太腿が!

「大丈夫ですか？」

(なっ、こいつ——!)

心で叫んだツバサの目の前には、秀麗な賽園の顔があった。彼は四つ足になってツバサを跨いでいるのだ。覆い被さると、想像以上に大きく感じる。

そして、少女の太腿には、さらに大きいと錯覚してしまう強ばった醜いモノが、グリグリと押しつけられていた。

醜さと美しさは、相容れることができる。そこに存在する悪魔に魂を売った天使の笑顔。醜いとは怖ろしい、美しすぎては怖ろしい。

本能的にツバサは瞳孔を開き怯える。
「そ、そんなつもりじゃ——」

後戻りできない恐怖を感じているは



ずなのに、張り詰めた胸は、ブラウスの下の乳首を浮き立たせている。
「君が誘ったんだよ」

間違いない事実。ツバサがそう仕向け、相手はそれに乗っただけ。あとはこのまま犯されれば、目的は達成される。筋書き通りではないか？

「なのに、なんで君はそんなに怯えた表情で、僕を見ているんだい？」
誘っていたつもりが、誘われていた。

——男に犯される！

「きゃっ」

小さな悲鳴をツバサはあげてしまった。その少女の声を聞いて、頭が混乱状態に陥る。自分は男なのに、ここにいるのは女なのか？

（今は女なんだ。女だ、女だ、女だ：目をつぶってればすぐに終わる）

自分はここにはいない。ここにいるのは少女。だが生半可な自己暗示は、よけいに意識をしてしまうだけ。

（男の自分がなんで男になんかに！）

悔し涙が零れた。

その涙を賽園はなんと見たか？

「かわいい瞳だね、しかしこのメガネが少し邪魔だ」

ツバサのメガネを奪って投げ捨てた。「この髪型は最悪だ」

髪留めのゴムが外され、編まれていた三つ編みに指が入ってくる。毛根がざわざわとして、ツバサは服の片肘を握り、すくめた首に薄紅が差す。くすぐったいという感覚が誤作動を起こしているのだ。

（髪の毛に触られただけで自分を強く抱きしめたくなるなんて、絶対こんなおかしい！）

交わる三本の束を順番通りに解いていく。楽しみ、髪の質感を味わい、匂いを嗅ぎながら、指が躍る。

「この柔らかで艶やかな髪は、立ちバツクで顔を埋めたくなる。これがいい、このほうがずっといい、君は精錬すれば輝くよ」

うっとり言いながら髪を口に含んだ。「ひっ」

嫌悪の喘ぎが漏れた。今凍ったばかりの首筋に、生暖かい息が吹きかけられ、溶かされようとしているのがわかる。匂いも喰らわれているのだ。

賽園はツバサの太腿に猛った股間を押しつけ、片手で頭を撫でながら、残る手で器用に三つ編みを完全に解いた。それはまるで海のように。髪は床の上を緩やかに波打ち、香りを風に乗せて運んでくる。澄んだ青い情景だ。

水を湛えた瞳は、吸いこまれるように深く、見つめているだけで溺れる。

三つ編みとメガネは少女を守っていた。魔法は解かれてしまったのだ。腹を空かせた悪魔によって——。

腹を満たしてくれるのは欲望だ。

「舐め回したい肢体をしている。君は決して太ってはいないが、ほどよい肉づきの丸みが美しい曲線を描いている。悲しいかな歳を取ると、どうしても女性化肉がたるんでしまう」
制服の上からツバサの豊満な胸をグ

イツと驚掴みにしながら、

「この胸はまだまだ育つのかな？ 若いうちはいいが、年を追うごとに左右に広がり、そして垂れ下がってしまう君の身体は、少女の身体は、美しく僕のためだけにある。この僕のね」

指の間で妖しく浮き出る乳首。
（あつ……乳首が、ブラをつけたときは擦れても平気だったのに……）

今の身体の胸が、立派な性感帯だという自覚。男の乳首も開発することは可能だが、女性が備えている性感には遠く及ばない。
次に賽園はツバサの手を取って、接吻しながら舐めはじめた。

「ちゅっ、手淫はこの中指でしているのかな？ 細くて綺麗だ、男ではこうはいかない。瘦せた男の手は岩のように骨が角張ってしまうからね。食べられたもんじやない」

やられる側には期待がある。前戯はされている側に、その先にある期待を抱かせるのだ。

ついに手は脚まで這ってくる。「太いが男のように硬くない。女性の身体をこの太腿が支えているかと思うと、ゾクゾクするね。女性の身体はこんなにも柔らかいのだから、どうして落けてしまわないのだろうか。触り心地は絹のようだ。そう、頬ずりにいい」

太腿をくすぐられるように、指戯で弄ばれる。ツバサは下唇を噛みしめて拳を握り、自然とスカートごと股間を押しえてしまっていた。

（肌に触られるだけで、絶対におかしい……どうしちゃったんだ？）
触られた皮膚は、粟立ち生きているように呼吸する。

身体を観察され、それを言葉に出されることで、自分の身体が女なんだと自覚させられる。催眠術のようだ。（違う！）

身体は女である。ではなにが違う？ ツバサの心で渦巻いているのは反発。濡れた舌で賽園はツバサの耳穴を舐める。ちゅぶちゅぶとわざわざ音を立て、掻き回すように耳殻をねろりすると、耳たぶを唇ではさんだ。

「冷たいはずの耳たぶが熱いよ」
「んうっ！」

濡れそうになった声を鼻で押さえたが、甘さは香ってしまった。
こんな耳元で低くささやかれたら、鼓膜だけでなく、心まで震える。下腹部まで響いてしまうかもしれない。

そして、なによりツバサを混乱させたのは、匂いだ。そう、フェロモン。（なんで匂いに惹かれるんだ、内股がムズムズして落ち着かない）

匂いは不自然に惹かれるんだ、内股がムズムズして落ち着かない）
匂いは不自然に、深い霧のような不気味さで、強さを増していた。

頭がぼろぼろとして、思考能力が落ちる代わりに、甘い感覚が蓄積される。とろんとしたツバサの瞳を覗き込みながら、悪魔はいたずらに微笑んだ。「自分で抑えているようだが、君は感度が高い。僕に触られるたびに身体が嬉しそうに震える。そんな清楚な顔

をして、何人も男と寝てきたなんて……許せないな！」
「お……男となんて、一度もそんなこと……は」

「ないなら淫乱女の素質がある」
淫乱女？

（好きでやってるんじゃない……俺は男なんだ！）

快感に本来の性別まで流されかけ、自分に言い聞かせた。

ツバサの太腿を摩っていた賽園の手が、つけ根で浮き出ている太い腱をなぞり、滑りながら秘めやかな部分に吸いこまれていく。

尻の割れ目から指先が下腹部へ這い上がり、ショーツをかかなり強く押し、むっちり中に埋もれている小さな肉芽を探り当て、弾きながら引つ掻く。

「あうっ！」
臉を閉じたツバサは背中を仰け反らせ、きゅうつとなつた股を閉じた。

（漏らした!!）
そう感じた。残尿が出た感覚はしなかったが、ヒヤツとして驚いた。

メガネを輝かせる賽園は、スカートをめくり、ツバサの股間を観察する。

「濡れてるね」
「うそだ！」

声がうわずつてしまった。

パニックで思考が転がり回る。
（俺は男でこいつも男なんだぞ、いつ俺が感じた……感じた？ 感じたってなんだよ、そんな馬鹿なことが馬鹿なことかッ、俺は……俺は……）

男なんだッ！

そう声に出して叫びたかった。しかし、最後の最後でツバサは齒を噛みしめて堪えたのだ。

（これは任務なんだ。男だつてことは絶対に絶対に……ならここで抱かれるってことかッ!!）

女体化の弊害が出はじめていた。男性と女性が堂々巡りをしながら、ホルモンバランスに変調を来す。女性はホルモンに情緒を左右されやすいのだ。

任務で正当化できず反発する心。魔の手は今にも忍び寄っている。シヨーツの両腰部分に賽園の手が入られた。花園は悪魔に踏み荒らされてしまったのか。一瞬で理解するツバサ。

（もう引き返せない。脱がされたら、俺は男に犯されるんだ……）

股の間にある賽園の顔をツバサは見つめる。彼のメガネに反射して映っている少女は、自分でも気づかないうち

に、涙の粒をいくつも零していた。
——お兄ちゃん。

ツバサの脳裏で妹の声がした。悲しそうな声と自分の表情がダブる。

（処女が奪われる！ 妹の処女が、妹が、このままじゃ妹が穢されるッ!）

気づいたときには、賽園の顔面を思わず膝蹴りしたあとだった。

「ぐあッ！」
片目を押さえた賽園は床に倒れ、それを尻目にとにかくツバサは部屋を飛び出すしかなかった。

（あいつを振りきって、そうだよッば

り薬を探すぞ。それでいいんだ）

廊下に飛び出したツバサだったが、その華奢な腕が掴まれる。

「寸止めなど許されるものかッ！」
「放せ！」

精巧な義手が腕を鷲掴みにしていた。そこから伸びたコードの先には賽園。

「ただの迷い猫ではなく、猛犬か」
押さえつけていた片目が、怒りとともに手が退かされ晒される。

「この世に計算通りにならない事象があつてたまるものか。僕のプライドを傷つけた代償は高いぞ。君には調整が必要だ、僕が直してあげよう！」

マジックハンドに捕まったツバサの身体が振り回される。迫るガラス窓。ここは二階だ。

「くそオオッ！」
一瞬の判断が明暗をわける。焦りながらツバサはケータイを取り出し、特殊なボタン操作をすると、なんとビームが発射されたのだッ！

轟音とともに壁が穿たれ煙が舞う。簡単に穴を開けた木造の壁。ツバサは軌道が寸前で変わり、壁に背を打ちつける軽傷で済んでいた。

そして、青ざめながら我に返った。「しまった、出力を調整してなかった。衝動的にひとを殺して……」

痛烈な後悔。
しかし、白い影はそこに立っていた。

「君が僕を殺すだと、ありえない。しかし、防衛フィールドの展開が、あと

0コンマ秒遅かったら死亡していた」

ゾクツとしてツバサが叫ぶ。
「おまえ何者だ！」

「孤高の天才ドクトル・サイエン！」
次の瞬間、未だツバサを捕らえたままだったマジックハンドに、強烈な電流が流される。

「ギャアアアアアッ！」
痛烈な絶叫が木霊し、その表情のままツバサは失神してしまった。

金属質な部屋で、ツバサの身体は、プラグコードのような機械触手に捕らえられ、宙吊りの籐にされていた。

目を疑うような光景。重なり蝨く肉欲な少女たち。虚ろな眼をしながら、ヌメリ光る互いの肌を吸いつかせ、淫靡な体臭を放ち、女同士で耽っている。サバトを思わせる光景だ。

捜査資料で見た覚えがある少女。
「あれは自殺したはずの……？」

事件の影には白い影。鉤十字の軍服風の白衣を身にまとい、軍帽を目深に被つた眼帯の男——ドクトル・サイエンが姿を見せた。

「自殺したのは複製人間だよ。脳味噌が長持ちしないから、自殺が趣味なんだ。そして本物はモルモットとして、有意義な人生を送っているということさ。事件沙汰にもならずね」

「ふざけるな！」
人道的に許されるはずがない。手足を拘束された今は、怒声をあげることしかできない。

ツバサは自分の脚に張りつく熱い肌を感じた。視線をやると、全裸のレイナが抱きついていてではないか。恋する甘酸っぱさを失い、ただ甘い。

「ああっ……好き、好き……好き」
虚ろにつぶやきながら、瞳は涙んでしまっている。

「彼女になにをした！」

ツバサの瞳が憎悪に彩られる。女体化での経験がなければ、彼はこんな目をしなかっただろう。男に襲われたことにより恐怖と痛みを覚え、意思をねじ伏せて女を貶めることも許せない。

「はじめに会ったころとは、まるで別人だ。君の正体はなんだね？」

「……………」

真一文字に口を結び、ツバサは目を鋭く光らせている。

「だんまりか。あの特殊なケータイを解析しているが、直接君の口から聞きたいなあ」

方法はもう用意されている。

ハサミを持ったレイナが、ツバサの身体を這い上がってくる。

「脱がして……あ・げ・る」

制服がズタボロに刻まれていく。その不器用な仕立ては、切るというより裂くだろう。淫らに透けていく布地。

「やめろ！」

のれんのようになったスカートからチラチラと白い布地が顔を覗かせている。かわいらしいヘソも見えた。乳房のところは、綺麗に丸く二つ切り取られ、ブラジャーに包まれた豊満な胸が

露出された。谷間が深く、墮ちそうだ。

「ひいつ」

冷たい金属が腹に当たって、ツバサは息を呑んだ。ハサミがブラウスの中に入ってきて、全身がゾクゾクする。

「パチン」

ブラジャーのカップの真ん中が切れ、はらりと落ちる。同時に上がってきたレイナが、ハサミを捨てて、露わにされた乳房を両手で揉みしだく。

「ほら指がズブズブ埋まっちゃうよ」

「あうん！ 遊ばないで、こんなこと今すぐ……やめっ!!」

大きく開かれた口腔が、またあのと

きのように、長い舌で犯される。

「じゅば……ぐちゅ……ンぶっ」

激しい息づかいで、貪り喰らう情婦の口づけ。重なる二人の唇の間から、どろりと涎があふれた。

口を離したレイナは淫靡な視線で、サキユバスの微笑を浮かべる。

「ぼうつと口を半開きにしたツバサは、涎が胸に落ちたことで我に返り、相手と同じ顔をしていたことに気づいた。

「はっ！ 目の前が真っ白だ、触られてない乳首まで……」

その桃色の突起に、ローターがテープで貼られる。アダルトグッズの登場

は、羞恥を演出した。

「ふあっ」

振動していないローターが当たっただけで、たわわに震える乳房。

にこにこ笑うレイナの顔の前には、リモコンが二つ。コードは左右の乳房

に伸びている。

「スイッチオン！」

ダイヤルが回され、バツテンに貼られたテープが外れそうなほど振動する。

「あん……やめろ」

神経末端が集まる乳首と乳輪は、すぐさま刺激を脳に伝達し、意思に関係なく乳管をキュッとさせ、血液が先っぽを勃起させる。

「くっ、乳首が熱い……引つ張られてるみたい……だ」

「リモコン邪魔だからブレザーのポケットに入れとくれ」

ダイヤルが限界まで回され、左右のポケットにひとつずつ入れられた。電池が切れるまでそのままかもしれない。

「ンっ……たはあっ、止めて……」

乳首のみを一点集中され、小さく悶え揺れる乳房は、まるで瑞々しい果実。

「こそばゆい？ そうじゃない……わからない……なんなんだ」

果実はまだ熟してはおらず、声が断続的に漏れてしまうほどではない。開発されていらない箇所は、安易な性感帯と同時に責めるのがいいだろう。

「ショーツから漏れる花園の香り。レイナの顔はツバサの股間の前にあり、片手にはハサミを構えていた。

「切らないでくれ！」

「汚いパンツなんか脱がしたげる」

「汚い？」

股間でなにが起きていたのか、ツバサはすぐに理解することになる。レイナの手が、ショーツを持ち上げるよう

に押すと、ムンと香り立つ。

「濡れすぎて布がたぶたぶしてる」

（そんな……こんなに自分が濡れるなんて、感じてなんかない……のに）

布地は大量に愛液を含んでいた。手で重さを支えた感じは「たぶたぶ」だが、音は「グシヤグチャ」と卑猥だ。

ショーツの左右の腰部分に切れられ、押さえていた手が離された瞬間、まさにポトッと落ちた。

愛液が肉丘の割れ目から床のショーツまで、きらめく蜘蛛の糸が露をまとったように、輝線を引いている。

「違っ、違っ……お」

俺と言いかけた。

男の心と女の身体の葛藤。心は自分で維持し続けなければいけないのに、身体は認めたくない感覚に包まれ蝕まれていく。欲望は強いものだ。

「そんなところ！」

股ぐらにレイナの顔が突っ込まれ、包皮ごと肉芽が舐められている。二枚貝の内側を撫でるように舌が這い、ちゅぶつと肉芽が吸われた。

「そ、そんなに強くっ……はあッ！」

やめさせたいのに、手足は拘束されたまま、揺れ動き悶えることしかできない。自由を奪われ、ただただ犯されるだけだ。

「やっ……汚いからやめてくれ！」

そんな言葉が出るなど自分でも思っていないからだろう。ツバサは今まで舐める側だった。その行為が汚いとも

天界と魔界を
まとめて消そうと
してるなんて

魔王だって
まっ青の
大悪人ね

魔界の
サキユバス風情に
何ができるのさ

虚空の槍が
ボクの手にも
どった今
お前たちはもう
終わりなのさ!

天も地も

マニヤは世界を救えるか!?

消し飛ばして
やる!

マニヤと 天涯孤独の王

漫画
COMIC

おおたたけし

『サキユバスディストーション』
好評発売中!

人間以外
全ての存在を
虚無に還す!

この槍の
光は!





痛うっ
痛うっ
……

こりゃあ
魔王が何とかしろって
言うワケだわ



……
!!?



あんたの
大事な姉ちゃん
生きてんのよ!

いつまで
寝てるのよ!



こんな事
ありえる
ハズは……?

何だ
あのヨロイは……?



どうだつ!



これなら



チ……

マズい
な……



うご

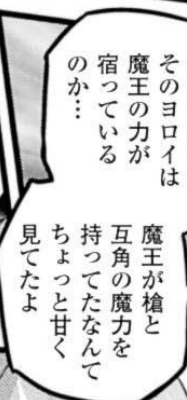
くな!

なっ...

なんで
その眼を
あんたがっ
.....!?

直撃だ...

これなら
女神や魔王でも
耐えられない!



見せてやれ
リアリエル!

さっし
めめめ

まっ…
まさか…っ

や…やだっ

また
聖水なんて
やだっ!

前にも
コイツの聖水を
あびた事が
あるのか?

こいつはいい!
礼を言うぞ
サキユバス!

もしや…

あっ

お前のおかげで
リアリエルは
槍の母になれたん
だからな!

うあっ

リアリエルに
魔界の穢れを
流し込んだのは
お前だったのか?

うあっ



見てなさいよ
このガキっ!!

やっぱり
自己修復も
するんだな

いいぞ


丸裸にして
ふきとばしてやろうかと
思ったがやめた!

魔王のヨロイごとこの槍に
取り込んでやろう!

お前の体も
つくりかえて
やるよ!

尻穴を
さし出せ!






私が
リアリエルの
ヤツなんかと

同じと
思わないで
よねっ！




何っ!?

ボクの
眼の中で
動けるのか!?




こっちは本物の魔王の眼に
睨まれながらイカされまくった
ばっかなの

いいかげん
慣れもするわよ!



魔王もやっかいな
ヤツを送り込んで
きたね…!



あんたがどうして
魔王の眼を使えるのか
知らないけど



あっ!?

ぎゃっ!!



でも
まあ

槍が天使を
取り込むのに
間に合わなかった
お前たちの負けだ



そのヨロイは
身体の中まで守って
くれるかな?

はらわたに
聖水をそそぎ込んで
やるからね

せいせい
耐えてみせろ!

そんなっ...!

やっ...

うっ

いっぱい
でてるうっ



おっと
ムダな抵抗だね!

アセンション・
ギアス!



おおーっ!!

まだ
死ぬんじや
ないぞ

おなか
灼けるっ

お前の力は女神を
還す時に必要に
なりそうだしね

やぶれ
ちやううっ

ひっ

おぐ
うーっ

一滴も
もらすんじや
ないぞ!



新旧に最強を詠われた退魔巫女が
花街にて相見える!!

大正退魔伝

夜天の
巫女姉妹

小説
NOVEL

あまくさしろ
天草白

きしんじゅうき

挿絵
ILLUSTRATION

姫心重機

大正六年、世界大戦の特需により空前の好景気に沸く日本。

夜の新宿にほの白い夜霧が立ちこめていた。瓦葺の家屋とレンガ造りの洋館とが並立し、通りには馬車や人力車が走る和洋折衷の壮麗な街並みは大正という時代独特のものだ。

その裏手には多くの遊郭が建ち並ぶもう一つの街の顔がある。街路灯にひっそりと照らされた二丁目の裏路地で若い女の悲鳴が妖しい嬌声を交えながら虚空に溶け消えていく。

「んっ……ぐう、うっ……」

赤黒い触手が白と紫に彩られた巫女衣装をまとう若い女の全身を拘束し、締め上げていた。胸元に巻きついた触手群は白い小袖の上から乳房の曲線を浮き立たせ、袴の腰部で蠢く触手群は同様に双臀の形をはっきりと浮き上がらせる。

下半身を覆う紫の袴はすでにボロ切れと化し、布の破れ目からほとんど露出している鮮紅色の秘処には野太い陽根が埋めこまれていた。豚を擬人化したような姿の怪物——妖魔は、背中から生やした触手群で巫女を拘束し、飢えた獣さながらに腰を振りたくって彼女を犯している。

「へへ、どうだ、女！ 人間なんぞとは比べものにならねえだろ、あ？」

ばん、ばん、ばん、と脂肪の詰まった腹と、巫女の引き締まった腰とがぶつかりあう音が遊郭と遊郭の隙間を通る裏路地に響き、消えていく。

「はああっ、だめっ、き、気持ちいい、あ、んっ」

身体の内側に長大な肉棒を打ちこまれるたび、巫女は頭頂部で結った黒髪を振り乱し、切なげな悲鳴をもらしたぐちゅ、ぐちゅ、と結合部からは快楽を表す湿った粘音が聞こえてくる。

「私……巫女、なのに……化け物なんか、おか……されて……はああっ」眉根を寄せた巫女が豊満な肢体をくなくと揺らせる。はだけた小袖からむっちりとした肉の詰まった乳房がこぼれ、頂点では屹立した赤い尖りが震えた。

「いやっ、イッて……ん、ちゅっ……しま……！ こんな……んぐっ」

豚妖魔に何度となく唇を奪われながら、巫女は屈辱に表情を歪めた。二十歳前半という女としての瑞々しさと成熟度が絶妙の割合でまじりあった女体を跳ね躍らせ、清らかな巫女が邪淫の快楽へと墮とされていく。

妖魔が暴虐な接吻を終えて、ふたたびでっぴりと脂肪の乗った腰を力強く突きこんだ瞬間、巫女の抵抗は無残にも決壊した。

「ああ……だ、だめ、イ……くう！ イクっ！ イクウウウウッ！」

絶頂の叫び声を上げながら、豊満な肢体をくなくと揺らしつつ、清らかなはずの巫女が淫らな肉悦に墮ちていく。脱力して投げだされた白い四肢が、びくん、びくん、と痙攣した。

「ははは、そうら、出してやるぞ！ 妖魔の子を孕むがいいぜ！」

化け物は最後に深々と肉棒を打ちこむと、そのまま黒髪の巫女の最奥に熱いものを注ぎこんだ。どく、どく、と外から見てもわかるほど大量の精液を狭苦しい腔内いっぱい放出する。

「はあああっ……あ、熱っ……うぐっ……！」

身体が一番深い部分に灼熱した体液の直撃を受けて失神したのか、巫女はそのまま四肢を脱力した。虚ろな瞳で夜空を見上げ、死んだようにピクリとも動かない。

豚妖魔は満足げにうなづいて、なおも勃起の衰えない肉棒で巫女の胎内を軽くこする。と、そのとき周囲を白く濁らせた夜霧を裂き、緋色の道着をまとった人影が突進してきた。

「最近は何だか多分……このおつ」

人影——白いハチマキを締めた女は舌打ちまじりに拳を繰り出す。艶のある黒髪を短く切りそろえ、少年と見まがうほど凛々しい美貌の女だ。夜目にもはつきりとわかるほどの緑色の輝きを宿した拳打が、巫女を拘束する触手の一部を吹き飛ばした。断ち切られた触手群は濁った体液を吐き散らしながら、地面の上でびくん、びくん、と痙攣し、やがて風化する。

「ぼやくのはやめたまえ、曾我中尉。妖魔討滅が私たちの任務だ」

その後方でカーキ色の軍服を着た女が、俗に壱番型と呼ばれる旧式の大型回転式拳銃を構え、機械的な動作で撃

鉄を起こした。頭の両側面で束ねた黒髪は馬の尾を連想させるほど細く、長く、夜風にたなびいている。

獣の雄たけびを連想させるような猛な轟音が響いた。女は、四十四口径の凶悪なまでの発射衝動に平然と耐えて弾丸を放つ。青く透き通った輝きを宿した弾丸が触手の群れを肉塊へと変え、硝煙たなびく夜空へ飛散させた。

「な、なんだお前は」

「内務省管下、対妖魔迎撃特務機関『夜天』所属、長町牧乃少佐である」

驚く豚妖魔に、軍服の女は自らの所属を一息で言いきった。

特務機関『夜天』——それは、多発する妖魔の襲撃に備え、明治の中期に設立された特務機関だ。表の世界にその存在を知られることなく、夜の闇にまぎれ、天に代わって魔を討つ。

物理的な攻撃がほとんど効かない人外の妖魔を駆逐できるのは、並外れた精神力の力——霊力のみ。夜天に所属するのはいづれも一級の霊力を備えた霊能者たちだ。

「で、あたしは曾我巴。階級は中尉。要するにお前を狩りに来たってこと。理解した？ したら消えなっ！ 奥義、疾風迅雷！」

吼えて白いハチマキの女——巴は鉤型に曲げた両手の指を派手に鳴らしながら左半身に構え、神速の突進とともに拳打を繰り出した。豚を思わせる体軀の中央部に命中した拳は、しかし、ぶよん、という間抜けな音とともに跳

ね返されてしまう。

「あたしの拳が効かないっ!」

「どきたまえ、曾我中尉。私の氷竜牙でなら貫ける」

撃鉄を起こした次の瞬間には、青い靈力の輝きをまとった弾丸が放たれている。回転した弾倉が葉莢を吐き出すと同時に鮮やかな手つきで撃鉄を起こして二射。さらに三射、四射——計六度の閃光と轟音がほぼ同時に炸裂し、豚妖魔がよろめいた。

「ブン、二人ともそそるじゃねえか。どうれ、次はお前たちを犯してやるか」にやけた笑みとともに身体を起こした豚妖魔の体表にはさしたる傷もない。背中から無数の触手を伸ばし、股間の男根を激しくそそり立たせていた。

醜悪な器官を目にして二人の女は同時に顔をしかめ、おのおのが拳と銃を構えなおした。

「氷竜牙も通じないか……並大抵の靈的攻撃は受けつけもしないようだな」

「どうする、牧乃サン。体皮の薄いところを探すか? あるいは——」

「華炎招来!」

伶俐な声が響いた刹那、二人の眼前を赤い閃光が走った。うねる触手の群れは、そのすべてが半ばから断ち切れ、赤光に飲みこまれて消滅する。

「な、なん……だと」

振り返った妖魔の前に立っていたのは一人の少女だった。

年の頃は、花も恥じらう十八歳とい

つたところか。夜の闇よりもなお深い色をした漆黒の髪は腰のあたりまで伸び、先端を風にたなびかせている。いかにも勝気そうな相貌は凛々しく整い、身にまとう白と紅の巫女衣装とあいまって、清楚な美しさをたたえていた。

右手に掲げた薙刀は身の丈をはるかに越えるほど巨大で、その長さに見合った鋭利な刃を備えている。穂先全体に灯る薄赤色の輝きは、そこに宿っていた巫女の靈力の残滓だ。

「勘違いするな、妖魔。お前が狩られるのはその二人じゃないわ。あたしの『桜花』が今——お前を断ち切る」

赤い輝きを宿した薙刀『桜花』を手に、美しき巫女少女が地を蹴った。人間をはるかに越える運動能力を持つ妖魔のさらに上をいく敏捷さで、路地の壁を疾走するという離れ業を披露する。豚妖魔が追撃に放った触手群は、いずれも巫女の身体を覆う赤光に触れた途端、跡形もなく消滅した。

「下賤な妖魔ごときが、このあたしに指一本でも触れられると思うな」

美貌の少女が凜と叫ぶ。速力でも靈力でも、巫女は妖魔を圧倒していた。路地の壁を走りながら妖魔の脇を通り抜けた美少女は、そのまま背後を取って必殺の薙刀を振り上げる。

「破邪封妖陣! 華炎招来!」

巫女の身体からあふれだした赤光が妖魔の周囲を包み、結界と化して捕縛する。同時に右手に構えた薙刀に炎にも似た靈気が宿り、巫女服を彩る火炎

を模した紋様が輝きを放った。

「天神——靈覇斬つ!」

「ガッ……アア……」

響いた断末魔が、短い戦いの終わりを告げる合図となった。豚妖魔は脳天から股間までを一撃で断ち割られ、青黒い体液をまき散らしながら真つ二つになって倒れ伏す。体皮の防御力すら及ばない圧倒的な靈力をこめて、力任せに断砕したのだ。

二つに断たれた妖魔の向こう側から、赤光をまとった巫女が薙刀を肩に担ぎ、巴と牧乃に向かって歩いてきた。

「ひゅう。やるじゃん、葉月……」

「また腕を上げたようだな、多岐神少尉。見事だ」

同僚と上官に向かって巫女の少女——多岐神葉月は小さくうなずく。

「その貴女、大丈夫だった? つ……倒れたままの女を助け起こそうとしたところで、葉月の顔がこわばった。

全身の血の気が引くような感覚とともに、葉月の視界がぐるぐると回りだした。信じられない、という思いは、妖魔を相手にしてさえ一歩も気後れしない葉月の意識を薄くかすれさせる。

「不審な点でも? 多岐神少尉」

「おい、葉月? なんか顔色悪いぞ」

二人の声に返事をすることも忘れ、葉月はただ女の顔を見入っていた。年齢は葉月よりも三つ四つ年上だろうが、葉月とよく似た艶のある漆黒の髪を頭

頂部で結い上げて、そこから垂らしている。

白い小袖に紫の袴という組み合わせの巫女衣装は妖魔の体液でヌルヌルに濡れて肌にびったりと張りつき、衣装越しにもむっちりとした豊満な女体の曲線が浮き上がっていた。

「そんな、まさか——」

葉月は何度か度々も青ざめた顔を左右に振った。しかし幾度見ても、その容貌は記憶にある一人の女の顔にそっくりだ。あれから三年の歳月が経っているとはいえ、葉月が見間違えようのない顔。

「んっ……あ」

艶めいたうめき声とともに女が弱々しくまぶたを開いた。下半身に申し訳程度にまとわりついている紫色の袴は布地の大半が無残に破れ去って、むっちりとした太ももや飾り毛に覆われた秘華をあらわにしてしまっている。

「あ、ああ……」

脳裏には、陽だまりの暖かい神社の境内で遊ぶ二人の巫女の姿が浮かんでくる。葉月にとって彼女は憧れそのものだった。彼女のように強く、美しくなりたくて、少年と見まがうほどお転婆だった少女は髪を長く伸ばし、武道を習い、そして今は妖魔を滅するため、に靈力を磨き続けている。

今では組織でも最強と謳われるほどに——。葉月はかつての自分へと飛ばしていった思いを現実へと向け直し、ふたたび

視線を女へと遣る。

先ほどまで妖魔に陵辱されていた女の器官は赤く腫れあがった上には黄白色に濁った体液がこぼれ落ちていた。何度となく妖魔の精を注ぎこまれた名残だろう。女としてもっとも無残な様子をさらしている姿を見下ろし、葉月は唇をかみ締めた。

と、彼女が弱々しく目を覚ます。焦点のあわない黒瞳が巴、牧乃と順番にさまよい、最後に葉月の元でびたりと止まった。たちまち信じられないとばかりに黒瞳が丸く見開かれる。

「葉月……？ 葉月、なの!？」

「姉さんっ!」

葉月は嗚咽まじりの声を上げ、三年ぶりに再会した最愛の姉の如月に抱きついた。

維新の動乱により、幕府に属していた霊能者たちの大半が討ち死にしたことがすべてのきっかけだったという。

妖魔がどこから現れたのか。その正体が何なのか。それは誰も知らない。徳川幕府の時代、江戸の地下に作られた《断妖門》に封じられていた妖魔たちは、時代が明治に変わって以来、頻出するようになった。妖魔軍団は江戸の地下全域に及ぶ門のうち、いくつ

か開いた『穴』から出現するとされ、そこはそのまま彼らの拠点ともなっていた。

「そのうちの一つがここね。薄汚い妖

魔たちの巣窟——」

葉月は眼前の建物を見上げ、吐き捨てるようにうめいた。

広大な敷地に優美な中庭を備え、遊郭というよりは小洒落た西洋館のような造りをしている。ただし門構えなどは純和風の造りで、どことなく和洋折衷の感がある建物だった。

表向きはこのあたりの花街に密集する遊郭の一つにしか見えないが、内部に巣食うのは無数の妖魔だ。

「いくわよっ、巴、牧乃さん。妖魔は一匹残らず掃討する!」

「応。お前こそぬかるなよ、葉月」

「あいかわらず上官に対する口の利き方がなっていないな、多岐神少尉」

葉月に応えて氣勢を上げる巴と、端正な顔をしかめる牧乃。

『月読ノ館』は新宿二丁目に乱立する遊郭の中でもひとときわ呆れている。如月の話では、ここで働く遊女たちはい

ずれも雌の妖魔であり、客の男たちから精気を吸い取っては妖魔たちの活力源にしているのだという。

「大量の精気を吸い取って妖魔たちを増強……そんな施設を帝都の真ん中に建てるなんて。あたしたちも舐められ

たものね」

葉月は切れ長の瞳に炎のごとき闘志を燃やし、眼前の館をにらみつけた。

如月の案内で三人は館の裏口へと回りこむ。

（姉さん……本当に姉さんが、戻ってきた）

葉月は先導する姉の背中を見つめながら、あらためて感慨にふける。

三年前——妖魔軍団による大規模な帝都侵攻があった際、夜天に所属していた如月は多くの妖魔を討ち果たし、鬼神のごとき戦いぶりを見せたという。しかし、ある戦いで不覚を取った如月はそのまま行方知れずとなっていた。

如月の話によれば、妖魔の大軍の前に力尽きて敗れた彼女は捕虜になっただけでなく、妖魔たちに犯され、巫女としての聖性を汚されてしまった。如月は霊力の大部分を失い、その上で性奴隷としてなぶりものにされていたという。

その話を聞いたとき、葉月は全身の血が沸騰するような怒りを覚えた。最愛の姉を汚し、慰み者にしていただけでなく——。

それでも如月は夜天の一員としての使命を忘れず、逆にこれを好機と捉えて妖魔の側に居座り続けた。度重なる淫虐にも耐え、妖魔軍団の情報を集めていたのだ。

しかしその裏切り行為もとうとう妖魔たちに知られてしまい、先ほどの豚妖魔によって処刑される寸前だったところで、葉月たちに助けられたところとだった。

「……けどさ。三年もの間、妖魔に囚われていたんだよな、如月サンは」

「……本当に元のままの彼女なのか？」

わずかに眉根を寄せた巴と牧乃のつ

ぶやきが、葉月の耳に届いた。

「二人とも何が言いたいのか……!」

先導する如月に聞かえないよう小声で反論しつつも、葉月とて疑念がないわけではない。ただ三年前に再会したこの世でただ一人の姉を信じたいという気持ちのほうをはるかに強かった。（だって姉さんはいつだってあたしの味方で——）

そして葉月の憧れであり、目標でもある女性。如月のようになりたい、という思いが葉月を夜天の隊員たらしめ、そこで誰よりも強くなろうと三年間、血の滲むような修行を重ねてきた。

「どうかして、葉月?」

ふいに如月がこちらを振り返り、思いに浸っていた葉月はハッと顔をこわばらせた。右手に握る愛用の薙刀『桜花』の柄を強く握りしめる。

「あ、ううん。別に……」

「——変わってないわね、葉月は。いえ、前よりもずっと強くなった。霊力を感知するだけでわかるわ」

「姉さんに少しでも追いつこうと思っ

て。あたしなりに、ね」

「ふふ、もう私よりも強いわよ」

葉月の胸が熱く燃えた。最愛の姉から受けた賞賛は、葉月にとって勲一等にも勝る勲章だ。

「さっきの妖魔を倒した手並みでわかるわ。——本当に頑張ったのね」

姉妹の微笑ましい会話を中断させたのは、裏口についていた途端に現れた数体の黒い影だった。

牛の頭に人の身体を持つもの。蠟螂ろうろうを人の大きさにまで巨大化させたもの。六本の脚を備えた犬とも狼ともつかないもの。いずれも下級の妖魔だろう。

「夜の巫女多岐神葉月——参る！」

葉月は薙刀「桜花」を構え、その刃に赤い霊力光を宿した。単純な物理攻撃では妖魔を打ち倒すことはできない。邪悪なる妖魔を滅することができるとは神に属する聖なる光——霊力による攻撃のみだ。

牛頭の妖魔が突進してくるが、葉月は長い黒髪をなびかせて易々と体当たりを避けてみせた。振り向きざまに薙刀を頭上へ掲げ、風車のごとく回転させる。

「妖魔ごときに阻まれる多岐神葉月ではないわ。消えろ——天神靈斬！」

葉月は頭上から薙刀を一閃させた。赤光の軌跡は三日月形をした紅の衝撃波となつて牛頭の妖魔を両断し、さらにその後ろにいた二体の妖魔をもまとめて薙ぎ払う。文字通りの瞬殺だ。

「やれやれ、あたしらが加勢する暇もないねえ」

「これから妖魔の本拠地に突入するのだ。少しは霊力を温存したまえ、少尉」

「私に笑うバとは対照的に、牧乃の顔は険しい。

「あたしは妖魔を絶対に許さない。一匹残らず、あたし自身の手で斬り捨てるっ」

輝きを宿す。葉月にとつてすべての妖魔は両親の仇であり、同時に三年もの間最愛の姉を苦しめた憎き敵でもあった。

「……言つても聞くような少尉ではないか。では案内を、如月殿」

「牧乃は小さくため息をつくど如月に語りかけて——」

「雷撃招来」

ふいに重い衝撃が背中を突きぬけ、葉月は前方に吹き飛ばされた。

周囲に雷撃の名残である爆風と爆炎とが吹き荒れている。裏門はほとんど瓦礫と化し、ぶすぶすと黒い煙を上げていた。

「いったい、何が起きたの……!?!」

痛みで薄らぐ意識の中、葉月は黒瞳を見開き、周囲を確認した。

「なにしがやるんだ、テメエ」

巴が両の拳に緑の輝きを宿して身構えている。その隣では無言で壱番型拳銃を構える牧乃の姿があった。そしてその二人に対峙しているのは——。

「あら。二人ともなかなか上手く避けたものね」

艶然と微笑む如月は、いつの間に取り出したのか弓矢を携えていた。

「私の妖弓『桜武』の雷撃矢をしのぐとは、さすがに夜の精鋭たち……それとも最初からお見通しだったのかしら?」

「三年も妖魔の元にいた奴を無条件に信じるほど、あたしはお目出度くない

「インだよ」

「我々は常に客観的な判断をくだす。それが同僚の身内であったとしても。夜の隊員として当然のことだ」

姉と二人の同僚のやり取りを呆然と見つめながら、葉月は地面に倒れたまま立ち上がることができなかった。

背中が焼けるように熱く、全身が痺れて力がまるで入らない。物理的な攻撃ではなく霊的な攻撃を受けたのだろう。外傷はないようだが霊力の源たる精神力のほうがかつそりと削り取られてしまった。

「姉さん……まさか、姉さんが? 嘘よ……」

如月の姿がおぼろげにかすんだ。葉月と同じ艶やかな黒髪は輝く黄金へと、白い小袖は闇を映しこんだかのような漆黒へと、それぞれ色彩を変化させる。

「妖魔に成り下がっていたの?! いえ、そんな」

葉月は信じ難い事実は何度も何度も首を振った。

「姉さんが、この妖魔を統率して——」

「いやそれも違うな。彼女は俺の手駒にすぎぬよ」

夜闇に溶けこむような静謐な声音は、如月のさらに背後から聞こえた。かつ、かつ、と甲高い靴音とともに新たな人影が半壊した裏門の向こうから進み出る。

「妖魔師団第三席、ツクヨミだ。以後お見知りおきを。お嬢さん方」

如月がまどつているのと同じ色彩の、漆黒の外套とフードを長身にまどつている。顔には般若を思わせる白い仮面をかぶり、素顔はうかがい知れなかった。闇の巫女へと変貌を遂げた如月はツクヨミの元へ歩み寄り、その足元にひざまずいた。

「……お前が、姉さんを」

葉月は身動きの取れない身体を恨めしく思いながら、視線にありつただけの敵意をこめて仮面の妖魔をにらみつけてた。

と、立ち上がった如月が、身動きの取れない葉月を抱き起こす。

葉月は動揺のあまり、姉が自分を抱きかかえようとすると手を拒めばいいのか、受け入れればいいのか——その判断すらつけられなかった。

「葉月を放せ! 奥義、疾風迅雷!」

神速で突進してきた巴が霊気をこめた打撃をツクヨミに放つ。正拳突き、肘打ち、手刀、裏拳——正中線上に計七発の拳打を当てたところで妖魔の背後へと回りこみ、同時に、

「氷竜牙、連弾」

四十四口徑から青い霊力を宿した弾丸が続ぎさまに吐き出される。息のあつた絶妙の連携攻撃。霊気と妖気のぶつかりあう爆音が木霊し、周囲一帯が業火と衝撃波に包まれた。

「大した威力だ。諸君らが手負いでなければ、俺も危なかったかもしれぬ」

しかし巴と牧乃の渾身の霊撃を続けざまに受けながらも、ツクヨミは平然

とした姿でたたずんでいた。身にまとった黒い外套は裾がぼろぼろに破け、爆風の中ではためいているものの、本体はまったくの無傷らしい。

巴と牧乃はともに残心を取りながら立ち尽くし、次の攻撃の手立てを見つけれずにいた。

「この女はいただいていくぞ。——来い、如月」

仮面の妖魔の聲に闇の巫女は恭しくうなずき、葉月の身体を横抱きにして抱え上げた。巴と牧乃は諦めずになおも霊的攻撃を加えているが、ツクヨミの触手防御の前には、それも無駄なあがきた。

「葉月っ……畜生！」

虚空に響く巴の絶叫を最後に、葉月の意識は闇の中へ落っこんでいった。

(ここは、どこなの……!?)

意識を取り戻した葉月の視界に飛びこんできたのは、派手な金箔で飾り立てられた壁とそこに描かれた清らかな天女の絵姿だった。楚々とした絵柄とは裏腹に室内の雰囲気は淫靡そのもので、どこからともなく漂う甘ったるい香のかおりが葉月の鼻腔を妖しくくすぐる。

と、葉月の眼前に白い仮面をつけた妖魔が進み出た。

「妖魔師団十三の拠点が一つ『月読ノ館』へようこそ。ここは男であろうと女であろうと、客であれば平等に歓迎する。無論夜天の隊員であつてもね」

「このあたしを遊郭の『客』扱ひするつもり？ ふざけないでっ」

葉月はまなじりを吊り上げて叫んだ。妖魔の経営する遊郭に、その妖魔を滅する使命を負った自分が客として迎え入れられるなど、誇り高い葉月にとつてこれほどの屈辱はない。

力の入らない下肢を無理やり動かして身を起こす。白い素肌から汗の珠が飛び散った。愛用の薙刀『桜花』を杖代わりになんとか立ち上がると、よろめいた歩調で黒い巫女衣装の姉に近づいていく。

「まあ、実の姉を斬るつもりなの？ 悲しいわね、葉月」

薙刀を引きずりながら近づく葉月を見て、如月の儂げな美貌に憂いの表情が色濃く浮かんだ。

「っ……！ か、華炎招来！」

葉月は躊躇しながらも、屋内であることに構わず赤光を宿した薙刀を頭上に振りかぶる。

理屈ではわかってはいる。敬愛していた姉はすでに墮落し、目の前にいるのは斬り捨てるべき敵なのだ。だから躊躇はしない。してはならない。

「天神靈霸斬っ……！」

赤光をまとった薙刀の刃が虚空に弧を描き、漆黒の巫女の頭上へと叩きこまれ——如月の額に触れるか触れないかのところで、その軌道を止めた。

「手加減するなんて優しい子ね、葉月。あなたは昔からそうだった」

に宿し、素手で葉月の薙刀を受け止めていた。儂げな微笑を浮かべ、愕然とする葉月に向かって右手を突き出した。

「ぐっ」

手のひらから飛び出した不可視の衝撃波が葉月の身体を弾き飛ばす。背中から叩きつけられたところで、床を破って無数の触手が飛び出した。

何本かの触手が寄り集まり、太く強靱な縄と化して葉月の両足首に巻きついていた。振りほどく間もなく、そのまま頭を下にして吊り下にされてしまう。

「は、放してっ……！」

逆さに吊られたことで、徐々に頭が血が上っていく。天井に足を向け、頭のすぐ下に床がある、という位置関係はどうにも落ち着かず、無防備で拘束されているという状況もあいまって、葉月の心を黒い不安感が侵食する。

如月が葉月の小袖に手をかけ、ゆつくりと焦らすように合わせ目を押し開いていった。雪白の肌が外気に触れてひやりと震える。

「ああっ……！」

葉月は小袖の下に襦袢の類を身につけていなかった。素肌に直接巫女の衣装をまとったほうが靈力を発揮しやすいからだ。肩がはだける寸前まで小袖を押し開かれると、十八歳という年齢にふさわしい瑞々しく膨らんだ二つの双丘が弾むようにこぼれだした。

逆さに吊られている状態とはいえ、若く張りのある乳房はまったく垂れておらず、重力に逆らうかのように完璧

な紡錘形を保ち、かすかに揺れている。

如月の背後から二体の妖魔が進み出て、葉月の身体を無遠慮に見回した。二体とも身体つきから雌だとわかる。おそろくはこの遊郭で裏遊女として働く雌妖魔なのだろう。

「まだ未通娘の癖に立派なお乳をして。美味しそうじゃないのさ」

四本腕の雌妖魔が感嘆の声をもらせば、その隣から背中に翼を備えた雌妖魔が進み出て、紅の袴の上から葉月の尻の曲線に沿って撫で上げた。

「ふふふう、お腰のほうもなかなか発達しているご様子……男を知らないのが勿体ないくらいだわねえ、ふふ」

「や、やめなさいっ。妖魔なんかあたしの身体をつ……！」

上半身に取りついた雌妖魔が本格的に葉月の胸を標的に定め、四本の腕を駆って襲いかかる。白い小袖を割って葉月の左右の乳房をそれぞれ二本ずつの腕で採みしだした。

「っ……く、うっ……！」

四腕合わせて合計で二十本の指がいつせいに這い回り、雌ならではの淫靡な手つきで右の乳房をつまんだかと思えば、左の乳房を裾野から採みしだく。また別の腕は右の乳房を円周に沿って指腹で撫でさすり、あるいは左乳房の乳輪を爪先で引っかくようにして刺激する。

さらに四本腕の妖魔が葉月の双丘を責めている間に、もう一体の妖魔が三本の舌を葉月の下半身へと伸ばしてい



た。ぞろり、と紅の袴の上からぬめつた舌で舐めあげる。

「お、おかしなことをしたら、残った靈力を叩きこんでやるから!」

胸の膨らみへ受ける刺激に背筋をぞわめかせながらも、葉月は不埒な淫戯を施そうとしている妖魔に向かって、キッと鋭い視線を叩きつけた。体内に残ったわずかな靈力を練り上げながら反撃の機会をうかがう。

「ふん、この期に及んでまだそんな目ができるのかい?」

妖魔は余裕の含み笑いをもらし、三本の舌を葉月の下腹部へ這わせた。一本は尻の割れ目に沿って舐め回し、もう一本は尻の割れ目に沿って舐め回し、最後の一本は袴の両横にある切れこみから、内部の素肌に向かって侵入した。

「ああ、そこはっ!」

葉月は勝気な相貌を朱に染め、巫女衣装をまとった身体を羞恥に震わせた。誰にも見せたことのない、葉月のもつとも奥深く秘められた場所を、下賤な妖魔の舌が舐め回している。

「それ以上は許さないからっ! お、お前たちなんかに……はあああっ!」

抗議の声も空しく、ぬめつた感触が三本、それぞれ別々の角度から秘処の内部へ侵入した。未通娘の膣粘膜はまだ堅く、ほとんど湿っていない。しかし妖魔の舌が分泌するヌルヌルとした体液が粘膜に浸透するにつれ、徐々に内部が濡らされていく。

「んっ、堅いね。あんた、生娘かい?」

巫女さんなんだから生娘だろうねえ
「ど、どうだっというでしょ……やあ、あっ!」

確かに葉月は巫女としての聖性を保つために性的な接触は一切絶つており、当然のことながらその身体は一度も男を迎え入れたことがない。

「妖魔には純潔の価値なんてわからないわ!」

「おや、私たちが汚れているような物言いじゃないのさ。それなら!」

三本舌の妖魔は膣孔付近を這い回る舌を強くうねらせ、ぴたりと閉じた花弁に唾液を塗りたくった。舌先で淡い秘毛をかき分けて肉の亀裂を撫で、さらにその上部に位置する淫芽を包皮の上から圧迫する。

「っ……! あ、はあっ! そんなに触つたら……くうっ!」

乙女の秘処の中で一番敏感な器官を直接的に責められて、葉月の嬌声が高鳴った。しなやかな肢体が電流を受けたように小刻みに震える。ジンとした妖しい痺れは肉悦へと転化し、膣孔から下股全体を甘く浸していく。

「あ、んっ! やめ、てえ……はあああ……!」

いかに靈力と戦闘能力に優れた夜天の精鋭隊員であっても、葉月とて年ごろの少女であることに変わりはない。舌で乳房を弄られるたびに葉月は嬌声まじりの甘い吐息をこぼしてしまい、さらに股間を舐めしゃぶられると、蕩けるような甘痒さに拘束された下肢を

痙攣させた。

「おやおや、今にも気を遣いそうな様子だな。姉に似て淫乱なことだ!」

「っ……!」

侮蔑の言葉を投げかけるツクヨミの白い仮面が目に入った瞬間、全身を貫く愉悅すら圧する勢いで、葉月の胸のうちで怒りの炎が吹き上がった。

「こ、こんな奴らになんか、負けないっ!」

汚らしい妖魔に罵られながら、肉の快楽が芽生えつつあるなど、巫女である葉月にとつてあつてはならない最悪の事態だ。

まして怨敵であるツクヨミの眼前で、そんなことを認めるわけにはいかない

——双眸に鋭い光を宿し、葉月は自分の身体に取りつく雌妖魔たちに向かって、今まで体内で練り上げていた靈力を一気に放出した。

「ガッ……アアッ!!」

二体の雌妖魔は油断しきつていたらしく、葉月の全身からほとばしった真紅の靈光に直撃され、全身が黒焦げになって倒れ伏した。

荒い息をつきながら、葉月はこちらを傲然と見守る実の姉をにらみつけた。

たとえ拘束され、体力も靈力も底を尽きそうな状況でも心だけは折れない。あたしは絶対に諦めない。そんな不撓不屈の意志をこめて。

「簡単にには堕ちないか。いや、そうではなくては俺としても面白くない」

ツクヨミの笑みが合図となつたのか、

葉月を逆さ吊りにしていた触手群が蠢いて位置を下げていく。床から三尺

(九十センチ)ほどの高さで葉月を大の字型に固定し、そこで動きを止めた。

「くっ、人の身体を玩具みたい……次は何をするつもりッ?」

先ほどよりも幾分位置の下がった視界にツクヨミと如月の姿が映っている。「強情だね。あのときの如月よりも気が強いんじゃないか、この妹巫女は!」

「妹のじゃじゃ馬ぶりには、私も幼少の頃より手を焼いておりましたゆえ!」

「ふむ、暴れ馬を調教するのめまた一興!」

ツクヨミがまとった黒い外套の裾がはためき、その下から無数の赤黒い影が飛び出した。先端からどろりとした粘液を垂れ流すそれは、おびただしい数の触手の群れ——数百という触手は空中で弧を描きつつ、思い思いの角度から四肢を拘束された葉月へと迫った。

「き、気持ち悪いっ。側に寄らない……ん、ぐっ」

怒声を浴びせようとした葉月の口に、男根を連想させる赤黒い触手の先端部が押し入ってきた。粘々とした気持ち悪い体液を吐き出す触手を、口いっぱいにはお張らされ、声を上げられなくなる。

「ん、ぐうっ……ぐぐ」

くぐもつた声をもらしながら、触手をかみ切つてやろうとした葉月だが、ぶよぶよとした皮体を備えた触手は思いつきり歯を立てても、わずかに表面

を

イセリア 英雄戦記

the legend of the Aeepa war

第8話 クアールの怪物

おおくまたぬき
小説 **大熊狸喜**
NOVEL ぼたん
挿絵 **牡丹**
ILLUSTRATION

危険なメイズから戻ってきたのも束の間——
フィオナは母の愛を受け、新たな舞台へ！
地下壁画の謎を追う皇女を待ち受けるのは、
閉鎖した怪しげな島と、タ「怪物の
触手による全身愛撫陵辱！！

「フェイエン武踏会には、応援として第七騎士団を派遣します」

メイズから帰還した姫の決断に、会議場の大臣たちは息を飲む。

フィオナが派遣を決定した第七騎士団とは、対魔術戦闘に長けた特殊部隊。

グラマトン聖教会の神殿騎士に対しては、有効な戦力になるだろう。

イセリアの守りに多少の変更を余儀なくされるのは、致し方ない。

しかしそれらを乗りきるために、自分は大陸の西側クアール湖に赴いて、かつては「キラマシク大協定」と呼ばれていた、現「クアール大同盟」と協力関係を結んでくる。

沿岸の大国であり、イセリアとは昔から良好な関係を保っていた。

そういう意味でも、最近クアール湖に出没しては女性を攫うという怪物も放っておくわけにはいかないだろう。

それにフィオナにはどうしても、確認したい懸案もある。

メイズで見た、あの壁画のことだ。

魔王の持つ漆黒の剣と技。それが親友と、どうしても重なってしまうのだ。

壁画とセリーヌは無関係であるという、安心が欲しい。

実は国内のことに關しては、多少ではあるが安心材料もある。

先日、封印を強化したメイズに調査隊を送り、捜索させた結果、ミノタウロスはずべて姿を消していた。

多分、封印の力を恐れて逃走したのだろう。ただし、ゴブリンに攫われた

女性衛士たちの行方は、未だ確認されていない。

しかし何より、今は一国の姫としての役目を優先しなければならぬ時だ。

大同盟へ会谈の打診も、了解の返事も、すでに貰っていた。

会谈へ向かうのは、最低限の少人数である五人。しかも女性だけの部隊で、まさか一国の姫が含まれているとは、帝国も想像しないだろう。

そして出発直前、謁見の間で玉座に鎮座する母王に、挨拶をするフィオナ。

「それでは、女王アリオナIIブリティッシュ様、出立いたします」

「どうか……よき会谈であるとともに、平穩無事な道程であることを」

母王の言葉が終わると、大臣たちはすべて退室。気を遣ってくれたのだ。

ふたりだけになった謁見の間で、女王と姫は、母と娘になる。

フィオナの母であり、イセリアの女王、アリオナIIブリティッシュ。

その姿は清楚にして可憐で、女性としての優しさと美しさと愛らしさ、そして母としての心の強さを、見るモノすべてに感じさせた。

王冠に飾られた豊かな髪を靡かせて、華奢にも見える優雅な細面の中に、優しい瞳が潤っている。

細い鼻筋とポツリとした唇が、少女の愛らしさと女性の美しさを、極上のバランスで納めていた。

しなやかな肩のラインは、上品に艶を見せている。

さらに大きく発達しながら上を向いた乳房が、美しいフェイスと相まって、危ういほどの官能美を魅せていた。

引き締まったお腹まわりと、タツプリと広がる女腰。ロングドレスで見えないが、足首は成人男性の片手で一周してしまふほど、細い。

白い肌に、質素でありながら上品な正装の母王は、憂いを隠せない美顔を見せた。

「ごめんさい、フィオナ。あなたたちにはばかり、苦勞をさせてしまつて……」

「いいえお母様。わたくしは一国の姫として、為すべきことを為すまでです」

悲しみを浮かべる慈しみ深い母に、フィオナの心が勇気づけられる。

しかしフィオナは、母の身体のほうが心配であった。

メイズの封印を強化したことで、母の体調はいくらか回復を見せている。

だが公務に復帰するのはまだ無理だと、王宮の医師団も告げていた。

「お母様……あまりご無理をなさらないで。すべては、わたくしたちが、しっかりと収めて参りますから」

「うふふ……まだ子供だと思つていましたのに……ほう、はあ……」

娘の成長に微笑む母だけど、少し無理をすると思が乱れてしまう。

それに、弱々しく息を吐く母の表情は、頬が上気しているためなのか、どこか官能的にも見える、気がする。

もしかしたら、メイズの邪氣を受けていた影響なのだろうか。

(ただの疲勞なら、よいのですけど……)

しかし今は、心配をしている時間はない。母の暖かい頬と自分の頬を触れあわせると、フィオナは会谈へと出発した。

そして一週間後の夕方には、クアール大同盟の国境へと到着。

フィオナの到来を待ちわびていたのか、到着した一行は、そのまま大同盟の中央議會へと通された。

議會場には沿岸諸国の代表者たちすべてが揃つていて、帝国に対し大同盟も危機感を強めていたためか、会谈はあつけないほど早々にまとめられた。

「我ら大同盟は、オラリオの中にある反乱組織『自由の剣』とも協力関係を持つております」

「はい。我々イセリアも現在、フェイエン武踏会と協同関係にあります」

これで三つの国が、手を取りあつて帝国に対抗できる。もしかしたら、帝国を包圍することも可能かもしれない。

それは自分たちだけでなく、国民たちや周りの国々にも、心強い希望だ。

協議会が理想的な形でまとまると、初老の代表者が宿の手配を告げる。

「お心遣い、感謝いたします……あの」

会谈の目的を果たしたフィオナは、四百年前の歴史について、ひとり密かに尋ねてみた。小声で答える代表者。

「この国からクアール湖を西南西に進まれますと、小さな島がひとつだけ、

存在しております」

その島は、人が住んでいるものの異様に閉鎖的で、しかも島を訪れた者は誰ひとりとして、帰ってこないという。「太古の因習や失われた魔術、さらには英雄と魔王の神話に関わる人たち」という噂です」

そして湖に住む怪物に、唯一被害を受けていないともいう。

「島の名は『バイラバイラ』、太古の彼らの言葉で『永遠の大地』という意味だと聞いております」

（バイラバイラ……行ってみる必要があるでしょう……）

そして翌朝、フィオナは、沿岸諸国の港を借りて停泊している自国の船で、島の島へと向かう用意をさせた。

護衛の騎士たちが、雇った船員たちにテキパキと荷物を積む指示を出す。

そして金髪の姫君は、純白を基調とした、上品な王族専用のアリーナレオタードに身を包んでいた。どのみち怪物とは戦闘になるだろうからだ。

実は大同盟では、すでに怪物退治に乗り出しているという。

しかし怪物は、追い詰めると水中深くに逃げてしまう。そのため、船や女性たちを守ることはできても、怪物を退治するには至っていないのだ。

「でしたら、怪物が水中に逃られぬよう、わたくしも協力いたします」

出発準備の間に、浮遊の魔術を転用して巨大な怪物を水に沈めないようにする、という魔法を用意する少女姫。

船の甲板に魔法陣を描く。そして自身の魔力を液体に込めて小瓶に詰めて、溢れないように蓋を封印。

一時的とはいえ、フィオナの魔力が尽きてしまうほど、消耗する方法だ。

（ですが、不安定な船上で怪物を前に、長い詠唱と高度な集中力を必要とする魔法を使える自信は、ありません……）

しかし後は、怪物が出現したら、小瓶の液体を魔法陣にかければよい。

「仕掛けさえできてしまえば、後は簡単ですわ。ね、ルシィフ」

爆乳の谷間で同行していた妖精に言うと、妖精はやや真面目に答える。

「うーん、いい方法だと思うけど……この湖はイヤな予感がするんだ。油断は禁物だよ、フィオナお姉ちゃん」

怪物退治を、フィオナが魔法で支援するという提案に、大同盟はさらに戦う船団を用意してくれた。

姫のリーダー船と合わせて、全部で六隻の大船団。

そして、沿岸諸国の水軍戦士たちの中にひとりだけ、戦士ではない女性が同乗していた。

「あ、フィオナ姫様ですすか。初めまして、わたし水生生物を研究してる、マリインルウと申します」

ラフな挨拶をくれた女性、マリインルウは、眼鏡をかけていた。

セミショートの頭髮がサラリと流れ、知的な視線が研究者らしい。服装はこの国の人々の平均的なスタイル。

ノースリーブの短いシャツで、姿勢

によつては平均的なバストが覗けてしまいうさだ。縦長のお臍や、引き締まったウエストが露出している。

短いズボンにはバツバツの腿が刺き出しで、足元は脱ぎやすそうなブーツ。

全体的にやや大きいサイズの服で、身に着けている金属は、ナイフのみ。

これは、よく水に入る生活習慣と、湖に落ちても溺れないように。さらに水を吸った重い衣服をすぐ脱げるようにという、水辺に住む人々の知恵だ。

そんなフランクな挨拶の女性研究者に、厳しい視線を向ける少女がいた。

「貴様っ、姫様に向かってなんと馴れ馴れしい挨拶かっ！」

フィオナの前に、盾のように立つ、護衛隊長の少女騎士。

「いいのよ、レーシア」

「は——ハッ、いいエス・ママ！」

初めての隊長任務に、緊張の返答をする騎士隊長、レーシアアスカー。

フィオナを守って辱めを受けたエルの、第一の弟子ともいえる少女だ。

小柄な身体に、紫色の巻き上げツイントールが、チワワみたいに愛らしい。

意志の強そうなツリ目が大きく、スレンダーな身体と相まって、実年齢よりも幼く見えた。

第三騎士団団長のエルスを見習い、剣に対する鍛練は人一倍の努力家。

左右の腰には、二刀一対の剣。その腕は、自ら編み出した技をもって、第三騎士団の副団長に抜擢されたほどだ。

姫君の御前で待機姿勢を取る忠義の

騎士。それでも、マリインのフランクな挨拶には、お冠を隠せない様子だ。（レーシア、真面目な子……）

自分のために、メイズの中で醜い怪異たちに辱められてしまったエルス。

元はと言えば、エルスをメイズに連れ出したのは自分だ。

心の底からエルスを尊敬しているレーシアの、フィオナに対する心中は、きつと穏やかではないだろう。

無論、そんなことを態度に表してしまふようでは騎士失格。そして姫としても、申し訳なく思う気持ちをも、安易に出してはいけぬ。

それでも、やはりフィオナは少しでも、小柄な護衛隊長にねぎらいをかけてあげたいと思う。

「ありがとうレーシア、エルスによく鍛えられているのね……貴女の活躍を報告するのが楽しみだわ」

「はっ——ハイっ、いえっその……」

姫君の優しい心遣いに、凛々しかった二刀流の隊長騎士はツイントールをアワアワさせて、真っ赤になった。

何だか小型の子犬、みたいな少女。一方でフィオナは、鎧がブカブカして

いるように見えることも、気になる。

爆乳の騎士団長を尊敬するあまり、そっくりなデザインの、何だか異様に

余る鎧を身に着けているのだ。

「ねえレーシア、その鎧——」

「はっ、びびッタリですっ、イエス・ママっ！」

よく聞かれるのか、すごい早さで、

しかも食い気味に即答された。

「…ピツタリ、ですか…?」

「ピツタリですつ、イエス・ママ!」

「…そう、そうね…」

もうきつと、ピツタリなのだろう。

そんな少女を微笑ましく思いながら、船団は帆を上げて港を出発する。

水のよい香りがいつそう強く漂い、髪を流す風が冷たくて気持ちいい。

「まずは怪物に襲われていないという島、パイラパイラに向かいます」

出発すると同時に、船上ではマリインを含めた作戦会議が開かれた。

「ヤツらは女性を攫い、卵を産みつけてふ化させるのが目的みたいでつす」

「卵を産みつけて、ふ化…」

聞かされたフィオナたちは、ふ化した怪物の子供を産まされるという、恐ろしい想像をしてみました。

そして船団は数時間後、港から数キロ離れた小島、パイラパイラに到着。

その島の姿は、異様だった。

半日もあれば一周できてしまいそうな小島の周りは、数メートルの高さを持った、壁のごとき岩に囲まれている。

唯一岩壁がないのは北側の一角だけで、ここは壁よりも高く切り立った崖が突き出ている、上陸は不可能だ。

「ここが、パイラパイラ…」

(なんと不気味な…)

まるで周囲との交流を拒絶するかのような、謎の島。

そして湖上を搜索していると、岩壁の隙間から一艘の黒い船が現れた。

左右から伸びる数本のオールで水を掻く中型船は、帆船に比べて小さく、遠くまで行ける船ではない。

しかも漕ぎ手の乗組員たちは、皆上半身が裸の男性で、暗い彩りの仮面を被っていて顔は見えなかった。

決して友好的とは思えない様相に、フィオナたちは緊張をする。

(伺ったお話の通り、閉鎖的な方々のようです…)

それでも姫は、相手が航海上の常識といえる距離で船を停止させたことに、理性的な人々だとも感じた。

ひとり立つリーダーらしき仮面の人物が、声をかけてくる。

「ここは我ら、パイラパイラの水域である。外界の者は立ち去られいっ!」

六隻もの武装船団を相手に、平然と威圧的な態度だ。

「姫様…!」

護衛隊長が、油断なく相手を注視する。緊張が走る船上で、フィオナは騎士たちを制し、自ら交渉に立った。

「わたくしはイセリア英雄公国皇女、フィオナブリティッシュです」

少女姫の名前を聞いて、仮面の人物たちの空気が揺れたのがわかる。

数瞬の後「如何な用件か」と問われた姫は「湖の怪物について、何か対処法をご存じならば、ぜひともお知恵をお借りしたいのです」と告げた。

黒い船は一度島へと戻り、島の意志を伝えるために再び戻ってくる。

「貴様たちが条件に従う限り、我らは

フィオナ姫の上陸を許可する」

「条件…?」

使者の言葉に、胸騒ぎがする。そして伝えられた条件は、フィオナが予想すらしていない、異様なものだった。

「船団はこの場で待機。フィオナ姫は一切の衣服装飾を排し、単身こちらの船に乗船いただく」

相手の言葉に、耳を疑う。

一国の姫君に対し、上陸したければ全裸になって、たつたひとりで男たちの船に乗れ。と言っているのだ。

(そ、そんなこと…!)

そんな理解不能な要求を突きつけられるなんて、思ってもいなかった。

斜め後ろに控えていた少女騎士も、紫色のツインテールを震わせて前に出て、怒りを露わにする。

「貴様らつ、我らイセリアの姫君に対し、何たる破廉恥つ!」

威嚇のために、今にも剣を抜かんとする仕草を見せつける護衛隊長。

しかし暗い仮面の男たちは、変わらぬ強い言葉を返してきた。

「ならば早々に立ち去れい。我らは外界の者に用などない!」

一方で高圧的な物言いに、船上の騎士たちの空気が怒りで熱くなる。

フィオナは、決断をしなければならなかった。

(は、裸で、彼らの船に…)

何を考えているのかもわからない男たちの中に、裸で乗り込める女性など決していない。どう考えたって無理だ。

しかしこのままでは、あの壁画に關する手がかりも、手に入らない。

(セリーヌ、わたくしは…)

優しくして美しい親友の微笑みが、頭を過る。自分は、セリーヌとの友情を信じたいのだ。

少女はひとつだけ、確認を取る。

「わたくしを含め、皆の安全は保障されますか?」

「フィオナ姫は一国の皇女。指一本触れてはならぬと、長老のお言葉である」

その返答を聞いてフィオナは、決意を固める。そして一歩、前に出た。

「…そちらの船に参りましょう!」

「なりませぬ姫様つ! あのような不遜の輩の戯言に従うなど…つ!」

レーシアの忠言に、金髪の姫君は緊張した笑顔を見せる。

「大丈夫:彼らを信じるわ」

指一本触れないということは、無事帰ってこれるということでもあるのだ。

(彼らが約束を守れば、ですけれど…) 怯える心を押し込めて、フィオナは小さく数回だけ息を整えると、エメラルド色の金具を解いた。

姫君の脱衣に驚かされながらも、レーシアは部下たちに、顔を背けるよう命令を下す。

「フィ、フィオナ様つ——皆つ!」

隊長に従い、騎士たちは背中を向けて、姫を囲んで脱衣を隠す。

しかしそんな行為でさえ、パイラパイラは許さなかった。「我らを脅かす意志のないことを証明

するのならば、騎士たちは下がれ！」
「何を……っ！」

歯噛みをする騎士隊長を、フィオナは優しい口調で諭す。

「いいのよ……下がって、レーシア……とはいえ、声の震えが止まらない。鎧のパーツをすべて外すと、レオタードの、首後ろを外す。」

「くそう、ボクのおっぱいなのにつ！」
騎士たちが下がると同時に谷間から追われたルシィフも、悔しそうに歯ぎしりをしていて。

留め具を開けると、細くて白い首筋が大胆に露出する。レオタードをずらして、白い鎖骨や胸の肌を晒す。

さらに衣装を下げて深い谷間を露わになると、フィオナは周囲の視線が熱くなって突き刺さってくるのを感じた。

（み、皆さんが……見ている……！）
自分を守るための女性騎士たちはともかく、これから一緒に戦う沿岸諸国の男性戦士たちも皆、遠慮しながらも姫様の脱衣を注視している。

大勢の視線を意識すると、衣装を掴む手が止まってしまふ。

（でも……今は……！）
息を飲んで決意をすると、姫は純白の生地を滑らせて、足元に落とした。

大きな乳房はカップに包まれ、ムッチリと谷間を形作っている。

恥ずかしさのためだろう、細いお腹は扇情的にくねられて、引き締まりながらも肉感的な柔らかさを見せていた。

上品ながらシンプルなシヨーツが、

大きく発達した少女腰をピツタリと包み、食い込んでいる。

丸いお尻と一緒に、パツパツの腿は健康的な艶を浮かべて、男性の視線を釘付けにしていた。

ブーツを脱ぐと、細い足首と小さな素足が露わになる。

美しい下着姿になっても、まだ羞恥が終わったわけではない。

（まだ……これも……）
ブラのホックに指をかけると、僅かに逡巡する。

そして目を閉じて締めつけを解くと、ふたつの爆乳がタプんと解放された。

陽光に晒された白い乳房は、羞恥による薄い汗でキラキラと輝く。

（……っ！ 皆さんの、視線が……）
乳肌や先端部分に、仮面の使者や仲間

の戦士たちの視線が集中。
そんな注視をフィオナ自身が意識してしまつと、桃色の媚突がキュウ……と硬化をしてしまふ。

さらにフィオナは、愛らしい媚顔を真つ赤に上気させながら、ウンと息を乱し、ムチムチのお尻に張りつく薄い生地へと指をかけた。

お尻肌指が触れると、自分が何をしようとしているのか、強く意識させられてしまふ。

もう心臓はドキドキと早鐘を打ち、今にも逃げ出してしまいたいほどだ。

「このまま立ち去るか？」
（……わ、わたくしは……っ！）

使節の声を聞いた瞬間、金髪の姫は

強く目を閉じて、小さな下着をスルリと下ろした。

白くて丸いお尻が、突き出される形で完全に露出。

引き締まっていて柔らかい、秘すべき下腹部までもが、周囲の人々の視線に晒されていた。

（わ、わたくし……人々の前で……っ！）
もう視線を感じない場所なんて、どこにもない。

仲間たちに見られる白い肌は羞恥で薄い紅葉に染まり、腰も無意識にモジモジとくねられてしまふ。

本能的に身体を隠そうとしたら、両腕は頭上にと命令されてしまった。

愛らしい少女姫が、船上で一条纏わぬ全裸になり、両腕を頭上に掲げる。

「ひ、姫様……っ！」
主を恥姿に晒した不埒な使節に対し、

護衛の騎士少女は、今にも飛びかかりそうな怒りを見せていた。

そして渡りの板をかけられると、裸のフィオナは単身、黒い船へと乗船させられる。

暗い仮面を被った男たちに取り囲まれた、裸身の金髪姫。

そしてパイラパイラの船は、船団に對して決して動かぬように命令すると、姫を連れて島へと進路を取る。

「フィオナ様……！」
騎士隊長の声を聞きながら、フィオナは内心の震えが止まらなかつた。

（いったい、何を……）
船が通る岩の間隙は狭く、フィオナ

たちの船では入れないだろう。岩壁をくぐると、中は狭い港になっていた。

船が接岸すると、少女姫は両手を掲げさせられたまま上陸をうながされる。裸の足に、足場の板がヒヤリと冷たい。

（ここが、四百年前を知る孤島、パイラパイラ……何か、とても強い魔力を感じます……）

邪気はなく、むしろ聖浄な魔力だ。頭上に広がる青い空と、孤島を囲む岩の壁。本当に外界を拒絶している。

港から扉を開けて街へ通されると、意外と大勢の人々が待っていた。

「きやあつ……あ、あんなに人が……！」
思わず屈んで身体を隠す少女に、仮面の男が告げる。

「身体を隠すのならば、敵意ありと判断する。立ち去るがよからう！」
「えっ……い、いえ、あの……」

港の人々は男性も女性も、皆裸身の少女を遠慮なく、舐めるように覗き込んでいる。

それでももう、ここまで来て帰るワケにはゆかないだろう。

「ど、どうか……長老様に……！」
言いながら、全裸の姫君は震える脚で立ち上がる。爆乳と秘処を隠していた手を、息を飲みながら頭上に掲げた。

（ああ……人々が、見ている……！）
「……ほほう……」

フィオナの裸に周囲からは、感心するようない下すような、雑な鼻息が浴びせられる。

人々の服装は、神話で語られるよう



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>